

令和6年度こどもの居場所づくり支援体制強化事業
(NPO等と連携したこどもの居場所づくり支援モデル事業) 事業実施報告書

令和7年3月31日
徳島県

目次

1 事業要旨	1
2 事業目的	1
3 事業の実施内容	1
1 「こどもの居場所」の開設・運営	1
2 支援ニーズ調査	2
別添 1 選定した「こどもの居場所」の実施概要	5
別添 2 こども対象調査票	6
別添 3 保護者対象調査票	12
別添 4 支援ニーズ調査結果概要	16
別添 5 各事業者からの課題と提言	17
別添 6 NPO法人Creer実施報告書	18
別添 7 (一社)うみのこてらす実施報告書	35
別添 8 (一社)ひとみ学舎実施報告書	53
別添 9 NPO法人チルドリン実施報告書	79
別添 10 (一社)心繋プロジェクト実施報告書	124

1 事業要旨

- (1) 実施主体
徳島県（こども未来部青少年・こども家庭課）
- (2) 事業名
「こどもの居場所」支援ニーズ調査事業
- (3) 予算額
5,000千円
- (4) 実施期間
令和6年4月1日から令和7年3月31日まで

2 事業目的

本県では令和元年度に「徳島県子どもの居場所づくり推進ガイドライン」を策定し、こどもの居場所の開設・運営支援として、相談窓口の設置や運営者への伴走支援を担う人材育成など、県社会福祉協議会等の関係機関と連携して居場所づくりを推進しており、民間調査では「こども食堂」の箇所数について毎年約1.5倍増となるなど、「こどもの居場所」の量的充実の観点では一定の成果が上がっている。

一方で、過疎や高齢化により、地域に教育・福祉サービスなどの公的資源が十分ではない中、貧困や児童虐待・不登校など、複合化する社会課題に対応するためには、「地域における支援の最前線」として、「こどもの居場所」は食事・生活物資の提供の場のみならず、地域の実情や多様なニーズをふまえた対応が求められている。

本事業は、「こどもの居場所」の開設・運営を通じて多様なアプローチによる支援をモデル的に実施し、利用者の支援ニーズを把握するとともに、課題を検証し、取組の横展開により県内の「こどもの居場所」の質的向上を図ることを目的とする。

3 事業の実施内容

1 「こどもの居場所」の開設・運営

- (1) プロポーザル型公募による事業者選定実施スケジュール
- 令和6年4月12日 委託事業者選定委員会設置
- 令和6年4月15日 事業者募集開始
- 令和6年4月30日 事業者からの参加表明提出期限
- 令和6年5月10日 事業者からの企画提案書提出期限
- 令和6年5月17日 選定委員会委員へ企画提案書送付
- 令和6年5月28日から6月12日 選定委員会による書面審査
- 令和6年6月19日から6月21日 選定委員会による契約候補者選定協議
- 令和6年6月24日 契約候補者選定（5者）
- 令和6年7月1日 委託契約締結（契約期間 令和7年3月31日まで）
事業者による居場所の開設・運営、支援ニーズ調査の実施

(2) 事業者選定方法等

①委託事業者選定委員会

【委員構成】徳島県こども未来部

徳島県こども未来部青少年・こども家庭課

とくしまこども未来会議

公益財団法人徳島県母子寡婦福祉連合会

徳島県社会福祉協議会

②選定に係る評価項目及び評価事項

評価項目	評価事項
企画提案の 妥当性	こどもの居場所づくりに係る取組として、県内における先進性があるか
	具体性のある提案となっているか
連携する機関	効果的な事業実施のため、関係機関と連携を行っているか。
実施にあたり 活用できる 特性	事業実施にあたり、評価すべき活動実績や専門性、ノウハウ、ネットワーク等を有しているか。
実施後の展開	事業実施後の展開が考慮されているか。
実施体制	事業を確実に実施できる体制を確保しているか。
スケジュール	業務開始から完了までのスケジュールが、適正に設定され、実行可能な内容となっているか。
経費の妥当性	効率的で妥当と認められる経費が見積もられているか。

③評価・選定方法

- ・選定委員は、企画提案書に基づき、上記評価事項毎に５段階評価により評価と採点を行う。
- ・各委員の得点を集計し、総得点の高い方から順位をつけ、委託料上限額の範囲内で委託候補者を選定する。
- ・平均点が下限点数（平均６０点）を満たさない企画提案者は、委託候補者として選定しない。

(3) 選定した「こどもの居場所」の実施概要

別添（１）のとおり

2 支援ニーズ調査

(1) 項目設定に係る視点

有識者への意見聴取をふまえ、「こどもの居場所づくりに関する調査研究報告書」（令和５年３月内閣官房こども家庭庁設立準備室）及び「こどもの居場所づくりに関する指針」（令和５年１２月閣議決定）において示された「居場所づくりに関して大切にしたい

視点」を参考とし、「こどもが今来ている居場所をどのように捉えているか」について評価する。

（２）調査表

こども対象調査票 別添（２）のとおり

保護者対象調査票 別添（３）のとおり

（３）調査方法

運営する「こどもの居場所」に参加するこどもとその保護者に対し、紙媒体又はwebにより調査。

（４）調査結果

回答者数 ２８９名

内訳 こども １５８名

 保護者 １３１名

各居場所毎の調査結果概要については、別添（４）のとおり

（５）分析・考察

①こどもの視点

・こどものそれぞれの「居場所」への評価

「居たい」「行きたい」「やってみたい」という３つの大項目のうち、「居たい」項目のうち「安心・安全な場である」という評価が高い。

・居場所に行って変化したこと

「それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った」、「楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ち込みにくくなった」という評価が高い。

・居場所でやってみたいこと

「自分が好きなことや、興味があることをしたい」、「自分が知らないことや新しいことに取り組んでみたい」という、行動を伴う回答が多い。

②保護者の視点

・居場所の利用に伴う保護者の変化

「精神的負担、ストレスが減った」、「時間的な余裕ができた」といった、精神的ゆとりに関する回答が多い。

・居場所の利用に伴うこどもの変化

居場所毎で保護者の受け止めが異なるものの、「楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ち込みにくくなった」、「初めて知ったことや、興味をもったこと、好きになったことなどがあった」、「自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった」、「以前より、人と関わるのが好きになった」と、肯定的な受け止めが多い。

・居場所に望むこと

「こどもが知らないこと、新しいことに取り組めるようにしてほしい」という回答が多い。

- ・どのような居場所であれば利用させたいか
「こどもがいつでも行きたい時に行ける」という回答が多い。

③示唆

- ・「こどもの居場所」は、こどもにとって心理的安全性が保たれた空間であり、こどもは安心して「自分がしたいこと」、「自分が知らないこと」に挑戦しやすい。
- ・保護者は、「こどもの居場所」の利用を通じ、こどもの変化をポジティブに受け止めるとともに、自身の精神的ゆとりを実感している。

別添1

運営団体	活動名	主な活動	開設場所	開設目的	実施概要	活動の成果		実施時のポイント
						開催回数	延べ利用者数	
NPO法人 Creer	クレエール子ども食堂	こども食堂	徳島市	こども食堂を居場所として提供し、食事や学習支援、生活習慣支援等を行う	○開催頻度：平日11:30-18:00、第4土曜日10:00-14:00 ○活動プログラム ・食事の提供 ・大学生ボランティアによる学習支援 ・入浴等の生活習慣支援 ・農業体験、音楽鑑賞	200回	4,777名	・こどもの居場所まで来られない、配慮を必要とするこどもへの対応として、「こども宅食」をおこない、各家庭へ食事や生活用品を届け、相談に乗ったり、こどもの見守りを行った。
(一社) うみのこてらす	中高生のフリーカフェ ゆうてらす	大学生スタッフによる中高生の居場所	徳島市	10代のこどもたちが安心して過ごせる居場所を提供するとともに、大学生チームを編成し、こども支援の担い手を育成するとともに、新しいロールモデルやつながりを生み出す場をつくる。	○開催頻度：月2回（第1・3金曜日16:00-19:00） ○活動プログラム ・大学生とこどもたちが気軽に話せる場を提供 ・必要に応じた個別相談の対応 ・学習のサポート ・夜ごはんの提供/緊急食料配布 ・挑戦の場所づくり（アートイベント、クッキングイベント、釣り大会など）	17回	112名	・安全管理とリスクマネジメント 虐待リストを作成し、対応の統一を図るための開催マニュアルを整備した。月に一度のケース会議を開催し、運営状況や課題をスタッフ間で共有し、必要な対策を検討。 ・こどもたちが参加しやすい環境づくり LINEやInstagramを活用し、初めて参加するこどもに向けた歓迎イベントを実施したことで参加のハードルを下げた。 ・空間デザイン パーテーションで空間を区切り、安心できる居場所づくりを心掛けた。居場所の名称決定やのぼり旗のペイントをこどもたちと一緒にを行い、愛着を持ってもらえるよう配慮したほか、活動内容や食事メニューについてもこどもたちと相談しながら決定し、自分たちで作り上げるプロセスを大切にしたい。
(一社) ひとみ学舎	①居場所の会②デコポコボン③相談事業	不登校のこどもと保護者への支援	鳴門市	学校に行きにくくなっているこどもが、家から出ていくきっかけをつくるため、こどもと保護者をセットで継続して支援する。 ①小集団で保護者もこどもと一緒に安心して楽しく過ごせる場 ②対人関係に不安を持つこどもに一对一でソーシャルスキルトレーニング（SST）を行う場 ③保護者が気軽に相談できる場	①開催頻度：月1回（第3土曜日13:00～16:00）、夏休み（7月末の10日間）10:00～12:00 ○開催プログラム ・外遊び・室内遊び・絵を描く等興味を持ってもらえるようにバラエティに富んだ内容 ②開催頻度：月2回程度 ○開催プログラム ・心理職によるSSTを実施し、コミュニケーションのトレーニングを行うとともに、進学や復学等の進路選択支援を行う。 ③開催頻度：随時 事前予約後、ひとみ学舎や指定場所、オンラインで相談	①19回 ②15回 ③298回	①129名 ②46名 ③68名	①活動前後にスタッフミーティングの時間をもち、参加者への理解を深めたり、活動内容や方法について振り返ったりすることでこどもや保護者一人一人に合った支援を検討する。 ②まず「同じ場を共有する」ことから関係づくりを始め、こどもが空間に慣れ、自然に対話が生まれる中で生活や学習・進路の話題に広げていく。
NPO法人チルドリン	こどもおしごとカフェ	児童館等での職業体験	徳島市、小松島市	夏休みなどの長期休暇中に、こどもが過ごす児童館等において、様々な分野から職業体験のワークショップを開催し、こどもに将来の職業選択につながる体験機会を創出する。	○開催日：R6.8.8、R6.8.16、R6.12.21 ○活動プログラム ・児童館で、こどもと保護者を対象に、職業に触れる講座を開催。（講師：バイクプロライダー、警察、着付け） ・産直市と連携して野菜の選び方講座、料理の仕事講座を開催。	6回	53名	児童館等を活用した居場所づくりの実践を通じて、公共の「こどもの居場所」のニーズを把握する。
(一社) 心繋プロジェクト	きずなの町並みプロジェクト	フリースペース	美馬市	①フリースペースの設置 ②子育て支援に係る各種体験講座の実施	①フリースペース 開催頻度：週2回（火曜日・水曜日15:00～18:00、夏季・冬季休業中10:00～17:00） ○開催プログラム ・学習支援、アート活動、ボードゲーム、自然活動等 ②子育て支援 ○開催プログラム ・こども食堂、ボードゲーム会、野外キャンプ、アート体験 お米について、けん玉会、クリスマス会、手作り玩具体験等	①65回 ②7回	①185名 ②157名	・地域や支援関係者との連携体制を構築するため、看護師、保育士が定期的に相談会を開催するとともに、地域の方が講師を務めるアクティビティを実施 ・子どもたちの意見を取り入れたプログラムの実施、改良

こども用

こどもの居場所に関するアンケート調査 ご協力をお願い

この調査は、皆さんにとって、「ここに居たい」と感じられる場所（居場所）はどんなところか、どんな居場所があったらいいと思うかなどを尋ねるものです。

どんなところに居ると安心するか…、誰と居ると元気になれるか…、何をしていると力が湧いてくるか…、あなたにとって居場所とを感じるものを教えてください。

皆さんの意見をもとに、今後、居場所について検討していきます。ぜひ、あなたの声を聞かせてください。

あなたについて

【問1】あなたの年齢を教えてください。（○は1つ）

- 01. ～9歳
- 02. 10～12歳
- 03. 13～15歳
- 04. 16～18歳
- 05. 19歳以上（おおむね30歳まで）

※事業者で把握可能であれば省略可能。分析時には年齢を加味してください。

【問2】あなた自身について次のことがどれくらいあてはまりますか。

（○は1つ）

「今の自分が好きだ」

- 01. あてはまる
- 02. どちらかといえばあてはまる
- 03. どちらかといえばあてはまらない
- 04. あてはまらない

【問3】あなたは、将来も今の地域に住んでいたいと思いますか。（1つに○）

- 01. 住んでいたい
- 02. どちらかといえば住んでいたい
- 03. どちらかといえば移りたい
- 04. 移りたい
- 05. 移る予定があるが将来的には戻ってきたい
- 06. わからない

居場所について

【問1】 あなたにとって、（事業者の居場所の名称）はどのような場所ですか。（それぞれ、あてはまるところに○）

		とても あてはまる	あてはまる	あまり あてはまらな	あてはまらな い
居たい	居ることの意味を問われない（変化をもとめない、評価しないこと）				
	信頼できる人、味方になってくれる人がいる				
	過ごし方を選べる				
	ありのまま、素のままでいられる（強制されない、指図されない）				
	誰かとつながれる				
	気の合う人がいる				
	安心・安全な場である				
	くつろげる環境が整っている（キレイである、ゴロゴロできる）				
	居ただけ居られる				
	助けてほしいときに、助けてくれる人がいる				
	誰かとコミュニケーションできる				
	話を聴いてくれる				
	別の目的をもった人がいても、同じ空間にいられる				
	一人で居ても気にならない				

		とても あてはまる	あてはまる	あまり あてはまらな	あてはまらな い
行きた い	自分を受け入れてくれる誰かがいる				
	身近にある				
	気軽に行ける、一人でも行ける				
	お金がかからずに行ける				
	誰でも行ける				
	行くきっかけがある				
	自分と同じ境遇や立場の人がいる				
	いつでも行ける（居場所に行く時間を選べる）				
やって みたい	いろんな人と出会える				
	好きなこと、やりたいことができる				
	自分の意見を言える、聴いてもらえる				
	一緒に学ぶ人、学びをサポートしてくれる人がいる				
	いろんな機会がある（興味や希望に沿ったイベントがある）				
	未来や進路を考えるきっかけがある				
	あこがれを抱ける人がいる				
	新しいことを学べる				
	自分の役割がある				

01. 楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ち込みにくくなった
02. 自分の気持ち（したいことや嫌なことなど）を伝えてもいいと思うようになった
03. 初めて知ったことや、興味をもったこと、好きになったことなどがあつた
04. 自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった
05. それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った
06. 以前より、人と関わるのが好きになった
07. 以前より、誰か困っている人がいる時、サポートするようになった
08. 以前より、自分がやろうと決めたことをできるようになった
09. 変わったことはない
10. その他（自由に書いてください）

01. 自分が好きなことや、興味があることをしたい
(本・漫画やゲーム、プログラムなど)
02. 自分が知らないことや新しいことに取り組んでみたい
03. あまり大人の方から構わないでほしい
04. 話したい時に、自分の話を聞いてほしい
05. 困っていることや悩みごとを話した時に、味方になってほしい
06. 大人に、こども（自分たち）がどうしたいかを聞いてほしい
07. 大人に、こども（自分たち）が取り組んでみたいことを応援してほしい
08. 通いやすくなしてほしい
(お金がかからない、長く開いている、近所にある)
09. 特になし
10. その他(自由に書いてください：)

01. ある
02. ない

【問5】そこは、どのような場所ですか。（○はいくつでも）

- ※【問4】で「ない」場合、【問6】【問7】を回答

--

--

保護者用

「こどもの居場所」は、こどもにとって安全・安心な「心の拠り所」であるとともに、地域の大人やさまざまな年齢のこどもたちとの交流を通じ、自己肯定感を育む場所として重要性が高まっています。

本調査は、こどもや保護者の「こどもの居場所」に係るニーズを把握し、県内での「こどもの居場所」づくりの推進に活用させて頂くため、実施するものです。

お忙しいところ恐れ入りますが、回答に御協力を頂きますようよろしくお願いいたします。

【問1】 お子さんが（事業者の居場所の名称）に行くようになって、あなたに変化がありましたか。（○はいくつでも）

01. 家事負担が減った
02. 時間的な余裕ができた
03. 精神的な負担、ストレスが減った
04. こどもの将来についての不安が減った
05. 変化はない
06. その他（自由に書いてください：_____）

【問2】お子さんが（事業者の居場所の名称）に行くようになって、お子さんの様子で変化を感じたことがありますか。（○はいいくつでも）

01. 楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ち込みにくくなった
02. 自分の気持ち（したいことや嫌なことなど）を伝えてもいいと思うようになった
03. 初めて知ったことや、興味をもったこと、好きになったことなどがあつた
04. 自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった
05. それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った
06. 以前より、人と関わるのが好きになった
07. 以前より、誰か困っている人がいる時、サポートするようになった
08. 以前より、自分がやろうと決めたことをできるようになった
09. 変化はない
10. その他（自由に書いてください）

(○はいくつでも)

- 【問 4】あなたのご家庭では、以下の「こどもの居場所」を利用したことがありますか。また、利用の有無について、その理由を教えてください。
(それぞれ、あてはまるところに○)

	放課後 児童 クラブ	児童館	こども 食堂	無料学習 支援	フリー スクール 等	プレイ パーク	親子 サークル
利用している・利用したことがある							
保護者が仕事で不在の時など、お子さんだけでは心配だから							
お子さんに様々な人と関わる機会を持たせたい、体験をさせたいから							
無料又は低額で食事や学習支援を提供してくれるから							
家事や子育ての負担を軽減したいから							
その他	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
利用したことがない							
どういうところか知らないから							
必要性を感じないから							
参加することで、貧困だと思われたり、いじめられたりしないか心配だから							
知らない人と関わってほしくないから							
どんな食事が提供されるか分からず心配だから（衛生面やアレルギー等）							
利用したいが開所日時等が都合と合わないから							
利用したいが近くにない、どこにあるか分からないから							
利用したいが、経済的負担が大きいから							
その他	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭

その他の理由

例：【⑧】（申込したが定員超過により利用できなかったため）

【 】（ ）

【 】（ ）

【 】（ ）

【 】（ ）

【問5】あなたは、どのような場所であれば、お子さんに「こどもの居場所」を利用させたいと思いますか。（○はいくつでも）

01. こどもがいつでも行きたい時に行ける
02. こどもが一人で過ごせたり、何もせずのんびりできる
03. こどもがありのままでいられる、否定されない
04. こどもが好きなことをして自由に過ごせる
05. こどもが自分の意見や希望を受け入れてもらえる
06. こどもが新しいことを学べたり、やりたいことにチャレンジできる
07. こどもが悩みごとの相談にのってもらったり、一緒に遊んでくれる大人がいる
08. こどもがいろんな人と出会える、友人と一緒に過ごせる
09. こどもが勉強を教えてもらうことができる
10. 無料又は低額で食事の提供を受けることができる
11. 保護者が相談を受けることができる
12. 費用負担がない
13. 利用する必要性を感じない
14. その他（自由に書いてください： ）

別添4

	活動名	主な活動	調査結果概要				
			回収件数			主な考察	
			計	こども	保護者	こども	保護者
NPO法人 Greer	クレール子ども食堂	こども食堂	112	51	61	<ul style="list-style-type: none">こどもの居場所として、成長や交流が生まれる場が強く求められている。様々な人が集まる子ども食堂は、コミュニケーションは取れるが気が合う友達がいな子どももいることや、役割が無いと思っている子どもがいる。こども食堂に行くようになり、子どもたち自身の世界が広がると共に、自身が興味を持ったことや新しいことに挑戦したいと思っている。	<ul style="list-style-type: none">こども食堂に参加することで、子どもが以前より周りへ関心を持つようになったと感じている。こども食堂には、食事だけでなく子供の成長につながる場も欲している。こども食堂に参加することで、家事負担や精神的負担が軽減されたと感じている。こども食堂以外の施設の利用について、児童館は約半数が利用経験ありと答えたが、それ以外の施設はほとんど利用経験がなく、認知すらされていない。
(一社) うみのこてらす	中高生のフリーカフェ ゆうてらす	大学生スタッフによる中高生の居場所	7	7	0	<ul style="list-style-type: none">居場所cafe は10代の子どもたちにとって、安心して過ごせる場であるとともに、新しいことを学び、仲間を作り、自分を表現できる貴重な場所となっていることが分かった。多くの子どもたちが「気軽に利用できる」「信頼できる人がある」「自由に過ごせる」と感じていた。一方で、さらにやってみたいことや要望としては、好きなことにもっと挑戦したい、興味ある分野を広げたいという声があり、継続的なプログラムの充実や多様な体験機会の提供が求められていることがわかる。家庭や学校以外での「居場所」を持っていると答えたこどもも多く、その場所として祖父母宅や公共施設、習い事、さらにはオンライン空間も含まれていた。これらはこどもたちの生活環境やコミュニティの広がりを示唆している。	
(一社) ひとみ学舎	①居場所の会②デコボコボン③相談事業	不登校のこどもと保護者への支援	52	24	28	<ul style="list-style-type: none">「居場所の会」は、こどもたちにとって、自分を守り、受け入れてくれる大人がいる安心・安全な場であり、そこで新しいことや人に出会い、人への信頼感をぐくみ、精神的な落ち着きを取り戻していることがうかがえる。「居場所の会」で出会う人はスタッフだけではなく、参加者同士でもあり、異年齢の仲間と出会う場にもなっていることがわかる。こどもたちが「居場所の会」に期待することにも、新しいことや人に出会いたいことや、大人に自分を受け入れてもらいたいこと等が挙げられている。アンケートに答えたこどものように、学校に行かない、または馴染みにくいこどもたちの居場所に必要な要素として、①自分を守り、受け入れてくれる大人がいること、②一人一人の子どもに応じた対応がされることが十分保証されたうえで、無理のない範囲で、③新しい人・こと・ものとの出会いがあることが必要なのではないかと考えられる。こどもたちの居場所として、祖父母や友人の家の割合は大きいですが、同時に「地域の人が開いている遊びの場所（プレイパークなど）」が多く挙げられていることから、民間の居場所の役割が大きいことがうかがわれる。	<ul style="list-style-type: none">学校に行かない、または馴染みにくいこどもの保護者は、全員子育ての悩みを抱えており、相談したい内容は、こどもの健康や発達、こどもへの接し方、学校とのかかわりなど。相談事業に一人平均33回相談していることや多い人で100回を超えていることやアンケート結果から、継続した一貫性のある指導を求めている。保護者アンケートで相談の場に望むこととして、「子育てに悩み、学びたい保護者、教育に携わる人が集う」場であること、「相談の場で自助、共助的な役割を持つ」、「子育ての講座を行う。交流あり。相談したいときはできる」、「こどもと共に過ごす→大人たちがこどもたちの様子をシェア」が挙げられていることから、保護者の望む「相談」の場は、単に悩みを聞いてもらったり、アドバイスをもらったりする場にとどまらず、子育てについて学んだり、考えたり、話し合ったりする保護者の仲間づくりの場、すなわち「保護者の居場所」という側面もあることがうかがわれる。
NPO法人 チルドリン	こどもおしごとカフェ	児童館等での職業体験	53	31	22	<ul style="list-style-type: none">そもそも「居場所」という言葉についてわかっている子どもが少ない。子どもにとって、大人の存在が過干渉となると居心地が悪く、子どもが望んでいるのは適度に見守ってくれて、声をかけてくれる安心できる存在だということがアンケートから読み取れる。何よりも子どもたちが「こどもの居場所」に望んでいるのは、自分たちが安心して自由に過ごせる場所。大人の関与は、あまり好まないまでも、相談したいときには、側にいて欲しいという希望。次に、好ましい場所としては、「友だち」がキーワードであり、「友達がいる、友達と一緒に」と、気が許せて、気が合う友と同じ時間を過ごせるということが理想的な場所である。「居心地のよさ」においては、「興味のあることができる」ということで、自分の知らないことや新しいことにも取り組める場所を望んでいる。「こどもの居場所」の認知には、児童館などの公的な場所の認知度が高い傾向がある。	<ul style="list-style-type: none">「こどもの居場所」の認知は低く、あえて言うならば、子どもと同様に「学童保育や児童館」。それらに通うことで「時間的な余裕ができ、精神的な負担やストレスが減った」と自覚している。子どもたちには、居場所で多くの体験の機会を望んでいる。「お金をかけたくない」「時間が不定期での申込みではなく、いつでも行ける場所がよい」という意見も現場でのヒアリングで受けており、その上で保護者が考える「こどの居場所」への希望は、子どもたちが、安心安全で、ひとりで通える地域にある場所であり、新しい学びや体験の機会がある、できるだけ料金のかからない場所であることが考察することができる。
(一社) 心繋プロジェクト	きずなの町並みプロジェクト	フリースペース	65	45	20	<ul style="list-style-type: none">多くの子どもが居場所を「安心できる場所」と認識しており、ポジティブな影響を受けているが、「居場所がない」と感じる子も一定数おり、より多様なニーズに応じた支援が求められる。ゲームや読書など、自由な活動ができる場が求められている。大人の関わり方については「もっと話を聞いてほしい」と「構わないでほしい」の両方の意見があり、バランスが重要。経済的負担やアクセスのしやすさも考慮すべきポイント。	<ul style="list-style-type: none">保護者の多くが「こどもの居場所」の必要性を感じており、特に「気軽にに行ける場所」「安心して過ごせる環境」が求められている。

別添5

	活動名	主な活動	課題		提言
			参加者への関わり	運営面	
NPO法人Creer	クレエール子ども食堂	こども食堂	<ul style="list-style-type: none">・コミュニケーションは取れるが、気が合う友達はいない、自身の役割が無いと思っている子どももいることがわかった。また、規模が大きくなった土曜日のイベント時には参加しづらく、平日の人数が少ない日にしか来ない子どもや親子もいる。・さまざまな制度やサービス、相談窓口があるし、地域の人ともまわりにいるのだが、助けてほしいと声をあげない若いシングルマザーが圧倒的に多い。孤立孤独で、ますます家庭、子どもが生きづらい状況になっている。何度も会って、関係性を築いて、やっと、実は・・・と相談されることもあった。	<ul style="list-style-type: none">・貸切バスで農業体験にでかけた際は、応募多数で申込を断った。もっと資金があれば、希望するすべての子どもに体験の機会が提供できる。・遠方での活動の際には、車がない家庭や、こどもだけの参加がしづらいこともあった。・行政に相談した時、個人情報としてこちらが知ることができない。食事をもって訪問する約束をしているので、こども宅食の際は、ドアが開く。心の扉を開き、社会とつながってほしいと願いつつ、訪問を定期的に続けているが、もっともっとネットワークや支援が必要である。	<ul style="list-style-type: none">・こども食堂に来られない家庭に宅食を実施することで、親の精神的な負担が軽減されると共に、子どもも以前より親以外の大人へ関心を持つようになったが、NPOだけではなく、広く連携が重要。
(一社)うみのこてらす	中高生のフリーカフェ ゆうてらす	大学生スタッフによる中高生の居場所	<ul style="list-style-type: none">・経済的困窮、不登校、親との不仲、自信の欠如、親の体調不調、外国籍による言語面での課題など、多様な背景を持つケースが見られた。・「居場所がない」と感じているこどもが一定数存在していることが、非常に見えにくく、こどもの言葉や関わりの中でようやく表面化してくることも少なくない。・月2回の開催では十分に支えきれない部分もある。今後は、より頻度を高めた活動や、個別支援体制の充実が必要である。	<ul style="list-style-type: none">・思春期のこどもたちに対しての最初の周知に苦慮した。居場所という言葉そのものに対する警戒心や、忙しさも要因として考えられる。・学校を通じてのチラシ配布や教育委員会の協力を得て情報を届けることができたこと、さらに参加ハードルを下げるイベントを開催したことで、参加者が徐々に増加した。また、クチコミを通じて少しずつ地域に広がりを見せたことは一定の成果であるといえる。・スタッフの確保大学生を中心とした活動であったため、部活動やアルバイトとの両立が難しい状況もあった。もともと大学生スタッフが内部にいたため、そこからの広報活動ができたが、大学生へ情報と届けることも課題。・月2回の開催ではこどもたちへの継続的な関わりや家庭へのアプローチなど十分な対応が難しい。・登録制の場ではないため、来なくなったこどもへの対応は限られ、声掛け程度に留まってしまう点も課題。・スタッフの心理的負担も見受けられた。スタッフへの心理的ケアも今後の重要な課題。	<ul style="list-style-type: none">・本場に支援を必要とするこどもたちは、自分からSOSを発信しにくい年代であるため、学校生活や日常のなかに支援や情報への接点を用意していくことが大切である。行政や学校、地域とのさらなる連携強化と、持続可能な運営体制の構築のもと、中高生への情報発信やアクセス手段を広げ、日常の中で支援に出会える仕組みを整えることが求められる。
(一社)ひとみ学舎	①居場所の会②デコポコボン③相談事業	不登校のこどもと保護者への支援	<ul style="list-style-type: none">②「普段の生活の延長」としての居場所を、より多くの子どもたちや若者にとってアクセスしやすいものにする。『定期的に通う必要がある場』ではなく、「必要に応じて利用できる場」であることを明確に伝え、利用のハードルをさらに下げる取り組みも重要。たとえば、進学・就職後の若者が「定期的なサポートを必要としないが、時折安心できる場として戻れる場所」として認識できるようにするための仕組みを整えることが重要。③こどものことも保護者のこともよく理解しないと、「その家庭」の悩み事に対して的確に相談に乗ることが難しいので、一つの家庭にかける時間が長くなり、長期にわたって伴走していくことになる。このため、多くの家庭の相談に乗ることが難しい。	<ul style="list-style-type: none">①・「居場所の会」の活動を広く周知していくこと・こどもたちのモデルとなるような、こどもと年の近いスタッフを探すこと・会を運営していく資金を確保すること②・学校に行かない、または馴染みにくいこどもたちの居場所を作っていく際には、まず、①いろいろな種類の活動をこどもたちに提案することによって、こどもたちが「出かけてもいいかな」と思える場を準備すること、そして、出かけてきてくれたこどもたちにとって、②精神的にも身体的にも安心・安全な場にすることが重要である。やっとの思いで家庭から出てきたこどもたちにさらにしんどいことが起こらないように配慮することはいうまでもない。そのうえで、③こどもが人・もの・コトと「その子なり」に関わっていくことを保証する場である必要がある。このことを保証するためには、スタッフの役割は重要である。スタッフがこどもたちの様子を見取り、一人一人のこどもに応じた支援が十分に届けよう場にしていけることが重要であると考えられる。	<ul style="list-style-type: none">・地域の居場所についての情報発信・静けさ、余白、安心感のある場にただ「いる」ことを許される場所は、子どもの内発的な回復力や行動意欲を支える土台となる。何かをする支援の前に、「ただいていい」と思える「支援」以前の段階を保障する空間の整備を制度の中で明確に位置づけてほしい。・一度関係が途切れても、また戻れる、つながり直せるという「再訪可能性」を担保する仕組みを公式に保障することで、長期的に子ども・若者の孤立を防ぐことができる。支援の出口ではなく、循環として位置づける発想が必要である。・居場所の効果や成果を、「就学率」や「就労率」などの定量的なアウトカムだけで測るのではなく、「本人がどれだけ自分らしくいられているか」「安心できる関係ができたか」といった質的な変化にも着目し、評価・支援を行ってほしい。・祖父母や地域の大人が子どもを見守るという社会インフラが崩れた今、その代替となる居場所機能を公的に保障していくことが求められる。地域ごとに、子どもたちのための「何もしなくていいけれど、誰かがいる」空間を再構築する。・信頼関係のある専門性の高い個人やチーム、さらに、様々な方向から解決策を導いたり、必要があればスピーディーに専門機関につながれたりするように複数の人や多職種職種の人でチームが構成されることができそうな、継続して総合的に支援が受けられる相談の場があれば、安心して保護者は相談を受けることができる。
NPO法人チルドリン	こどもおしごとカフェ	児童館等での職業体験	<ul style="list-style-type: none">・こどもは、大人との距離が近すぎると思苦しく感じることもある。	<ul style="list-style-type: none">・周知のタイミングが夏休み直前となり、周知が十分ではなかった。	<ul style="list-style-type: none">・新しい場所づくりよりも、今ある学童や児童館などの公的な施設が、学校の延長の場所としての安心感があり、そこで、子どもたちがより安心でくつろげ、体験の機会を得ることができることが必要。・「居場所」の認知度向上の取組が必要。
(一社)心繋プロジェクト	きずなの町並みプロジェクト	フリースペース	<ul style="list-style-type: none">・継続的な参加を促すため、個々の子どもたちに合わせた関わり方を模索する必要がある。・信頼関係の構築を深めるため、関係者と子ども・保護者との対話の機会を増やす・支援が必要な子どもたちへの個別対応をより充実させる体制の整備が求められる。	<ul style="list-style-type: none">・新規参加者の増加に向け、SNSや広報活動の強化が必要・助成金依存からの脱却と持続可能な資金調達が課題・ボランティアや運営スタッフの確保・育成が求められる・自由に過ごせる空間と、新しいことに挑戦できる機会のバランスが重要。	<ul style="list-style-type: none">・より利用しやすい環境の整備や情報発信の強化が必要。

クレール子ども食堂「子どもの居場所」に関するアンケート調査結果

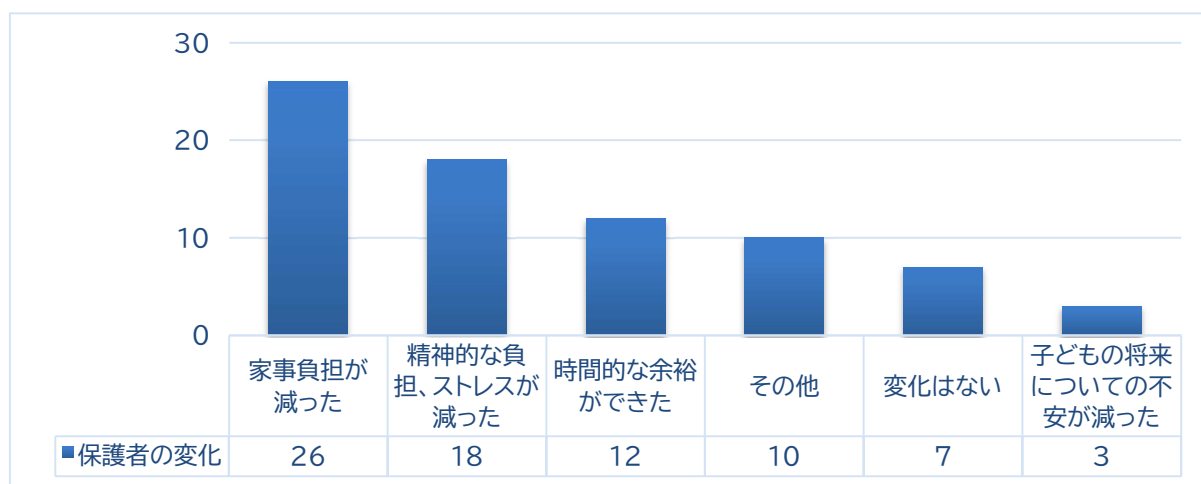
期 間：2025年2月1日（金）～3月17日（月）

回答者：保護者 61名、子ども 51名

1. 保護者へのアンケートについて

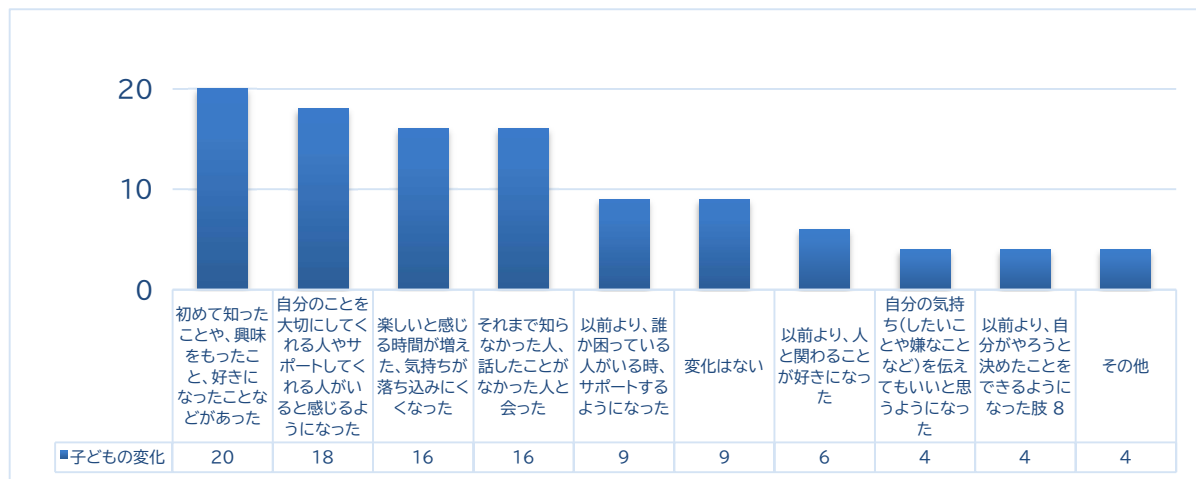
- ① お子さんがクレール子ども食堂に行くようになって、あなたに変化がありましたか？
（複数回答可）

「家事負担が減った（26件）」「精神的な負担、ストレスが減った（18件）」「時間的な余裕ができた（12件）」など77件の回答があった。その他の回答では、「子どもの人見知りが減った」「物資の配給が助かる」「普段食べられないような食材を食べられる」などの回答があった。



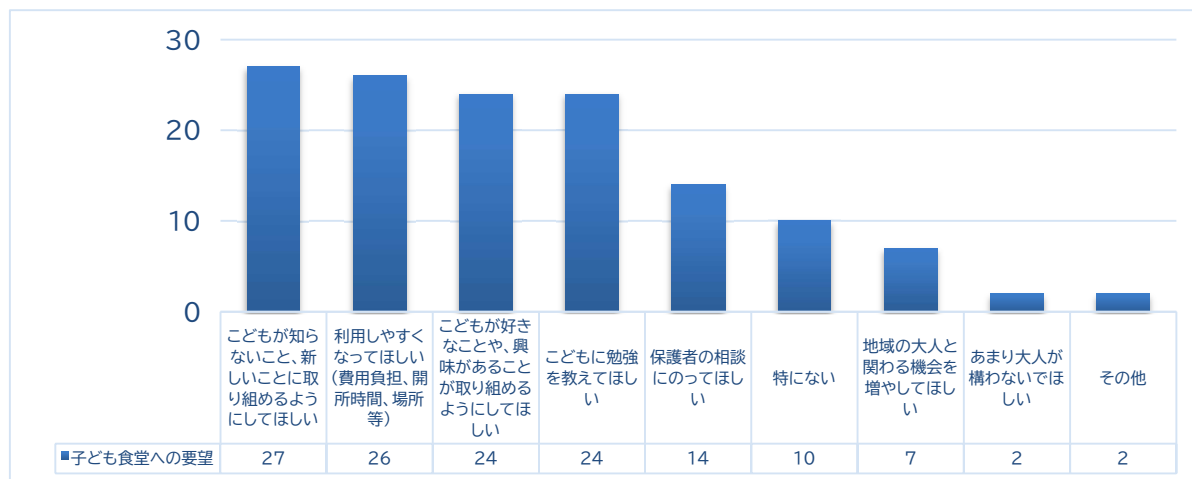
- ② お子さんがクレール子ども食堂に行くようになって、お子さんの様子で変化を感じることがありますか？（複数回答可）

「初めて知ったことや、興味をもったこと、好きになったことなどがあった（20件）」「自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった（18件）」「楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ち込みにくくなった（16件）」「それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った（16件）」「以前より、誰か困っている人がいる時、サポートするようになった（9件）」「変化はない（9件）」「以前より、人と関わるのが好きになった（6件）」「自分の気持ち（したいことや嫌なことなど）を伝えてもいいと思うようになった（4件）」「以前より、自分がやろうと決めたことをできるようになった（4件）」など、106件の回答があった。

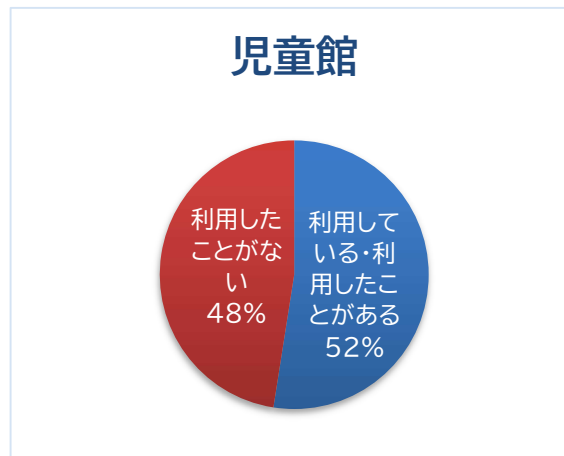
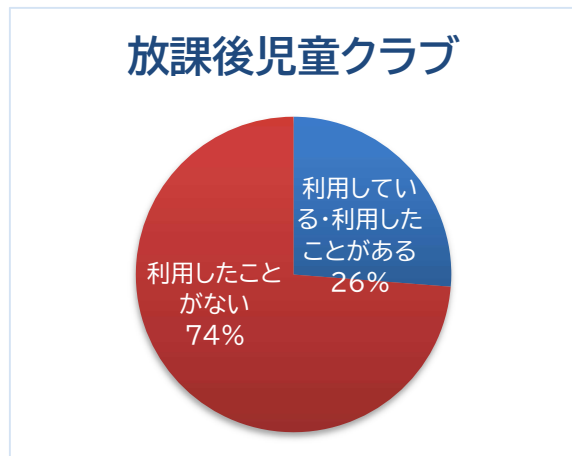


③ あなたが、クレール子ども食堂に望むことはありますか（複数回答可）

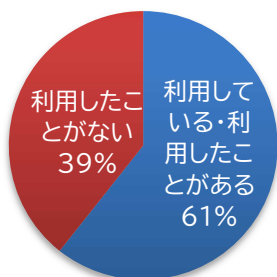
「こどもが知らないこと、新しいことに取り組めるようにしてほしい（27件）」「利用しやすくなってほしい（費用負担、開所時間、場所等）（26件）」「こどもが好きなことや、興味があることが取り組めるようにしてほしい（24件）」など136件の回答があった。



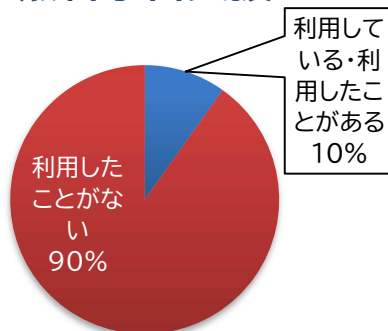
④ あなたのご家庭では、次の「こどもの居場所」を利用したことが、ありますか。また、利用の有無について、その理由を教えてください（N=61）



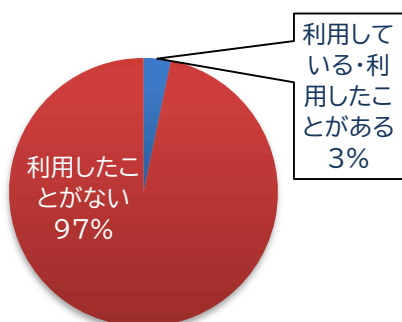
子ども食堂



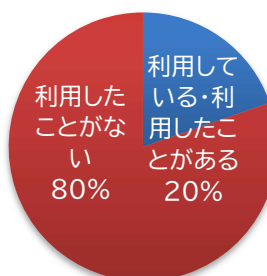
無料学習支援



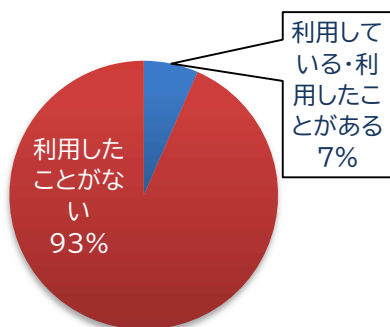
フリースクール等



プレイパーク



親子サークル



放課後児童クラブの利用者は全て「保護者が仕事で不在の時など、お子さんだけでは心配だから」を理由に挙げていた。非利用者は、「必要性を感じない」「どうしてもところか知らない」といった意見が多かった。

児童館は「お子さんに様々な人と関わる機会を持たせたい・体験をさせたいから」「保護者が仕事で不在の時など、お子さんだけでは心配だから」を理由に挙げ、非利用者は「どうしてもところか知らない」「利用したいが開所日時等が都合とあわないから」といった意見が見られた。

子ども食堂利用者の大半は「無料または低額で食事や学習支援を提供してくれるか

ら」を理由に挙げていた。非利用者は「利用したいが開所日時等が都合とあわないから」「近くにない（自由記述）」などの意見があった。

無料学習支援は、利用者がほとんどいなかった。非利用者のほとんどが「どういうところか知らない」「利用したいが近くにない、どこにあるかわからないから」と回答していた。

フリースクールも無料学習支援と同じく利用者がほとんどおらず、利用しない理由も「どういうところか知らない」「利用したいが近くにない、どこにあるかわからないから」と回答があった。また、それに加えて「必要性を感じないから」も一定数見られた。

プレイパークの利用者も2割にとどまっていた。非利用者の意見としては「どういうところか知らない」がほとんどを占めていた。

親子サークルも、利用者はごくわずかであった。非利用者の意見としては「どういうところか知らない」「必要性を感じないから」といった意見が多く見られた。

- ⑤ あなたは、どのような場所であれば、お子さんに「こどもの居場所」を利用させたいと思いますか（複数回答可）

「子どもがいつでも行きたい時に行ける（24件）」「子どもが新しいことを学べたり、やりたいことにチャレンジできる（20件）」「子どもがいろんな人と出会える、友人と一緒に過ごせる（19件）」など、203件の回答があった。

2. 子どもへのアンケートについて

- ① あなたの年齢を教えてください

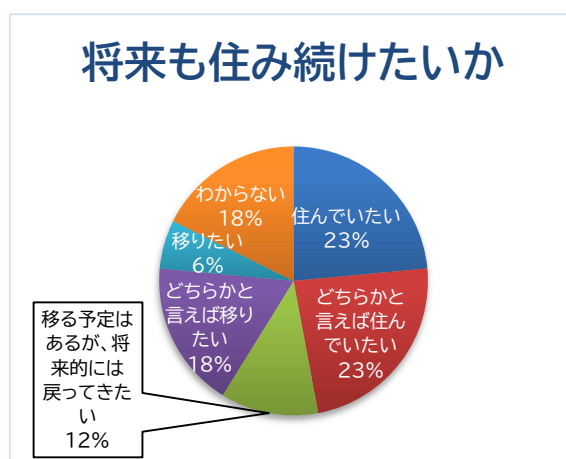
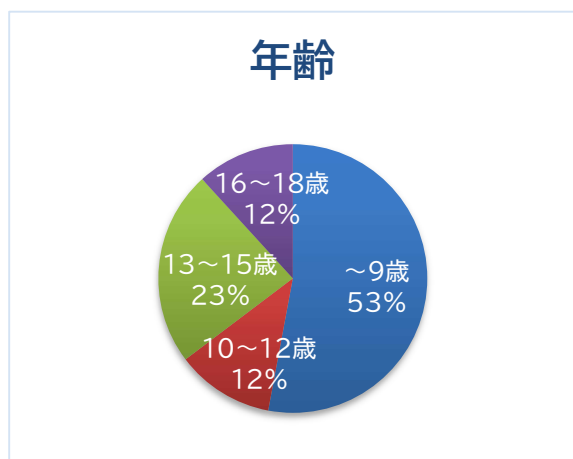
9歳以下が27名、10～12歳が6名、13～15歳が12名、16～18歳が6名だった。

- ② あなた自身について、次のことがどれくらいあてはまりますか？

設問内容が不明のためとぼします。

- ③ あなたは、将来も今の地域に住んでいたいと思いますか？

「住んでいたい」「どちらかと言えば住んでいたい」と答えたのが24名で、「移りた

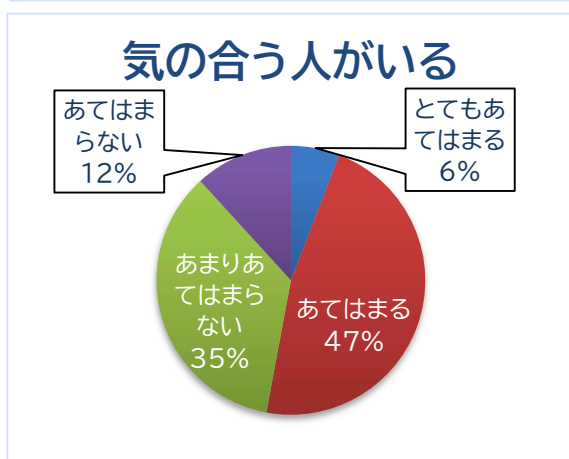
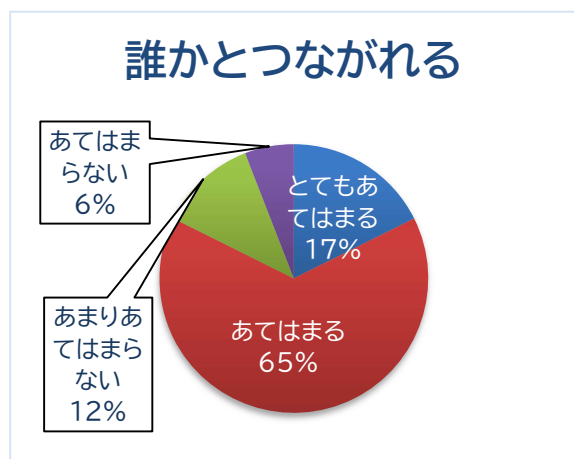
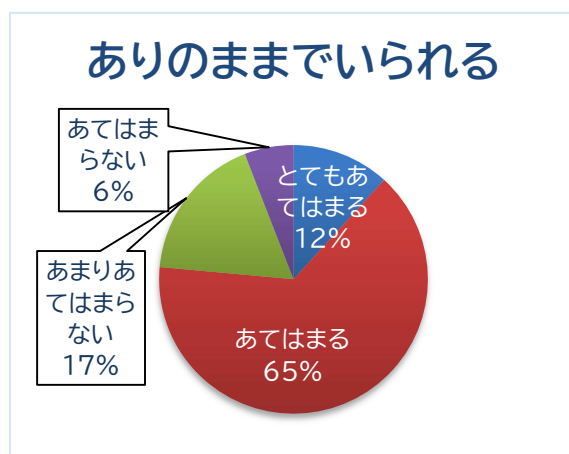
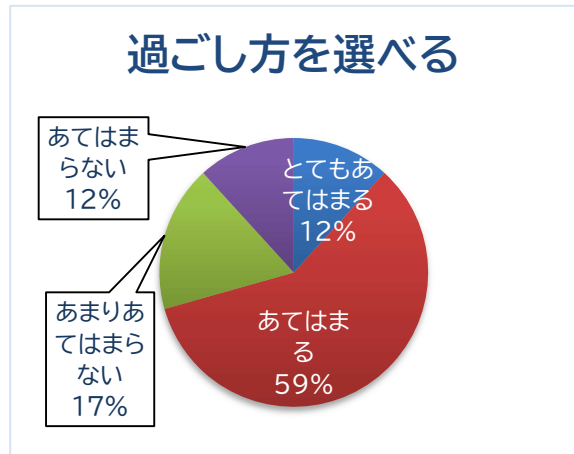
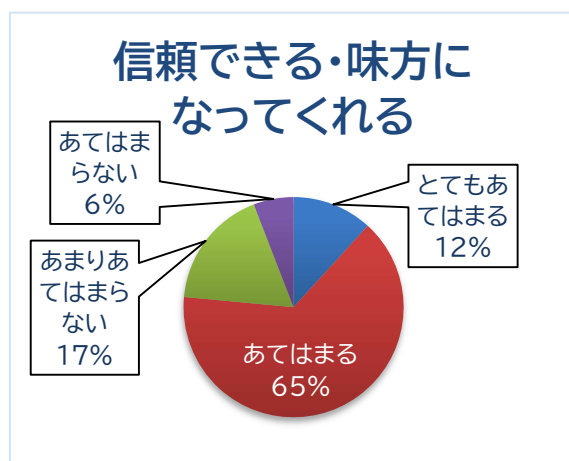
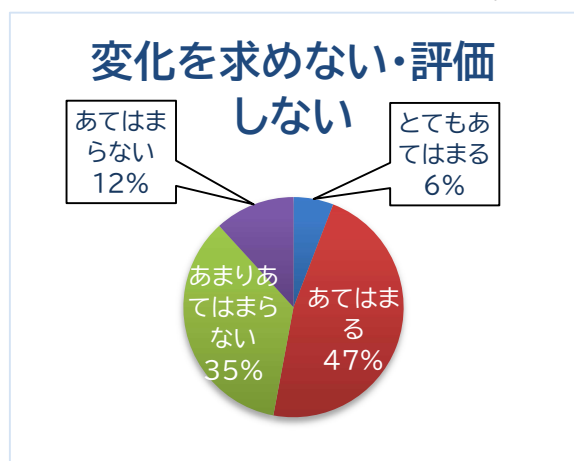


い」「どちらかと言えば移りたい」と答えたのが12名だった。

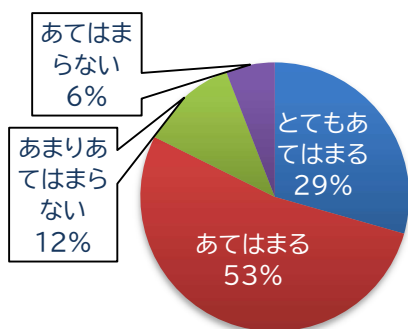
④ あなたにとって、クレール子ども食堂はどのような場所ですか？（全31問）

概ね、クレール子ども食堂が子どもたちにとって、良い場所になっていることが読み取れた。

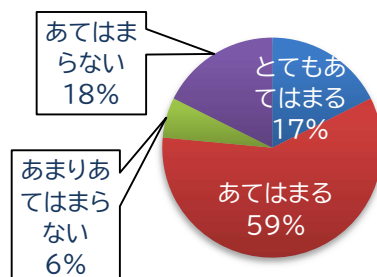
一方で、様々な人が集まる子ども食堂は、コミュニケーションは取れるが気が合う友達がいらない子どももいることや、役割が無いと思っている子どもがいることもわかった。また、規模が大きく様々なところで活動しているため、子どもたちが気軽に行けるわけでもないことがわかった。



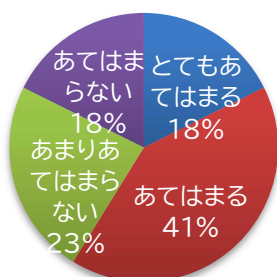
安心・安全な場である



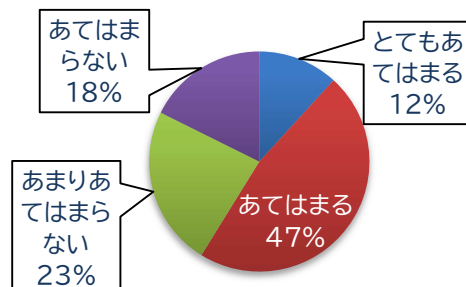
くつろげる環境が整っている



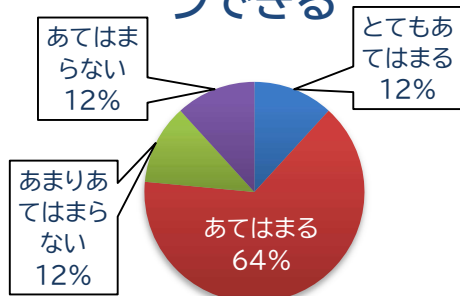
いただだけられる



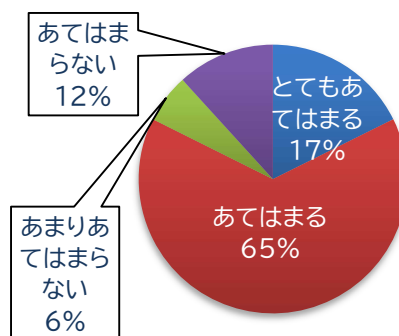
助けて欲しい時に助けてくれる人がある



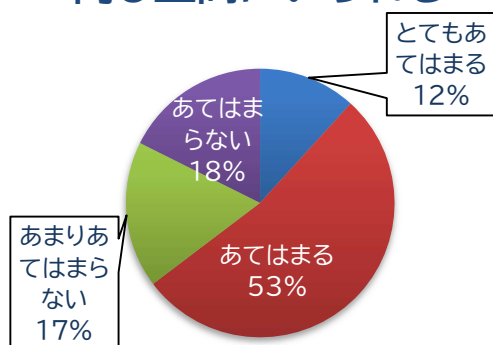
誰かとコミュニケーションできる



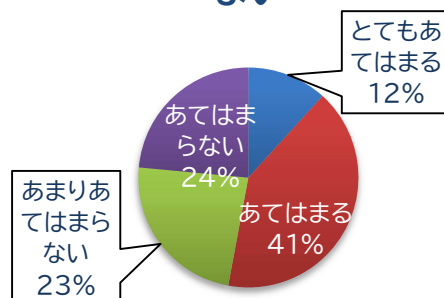
話を聴いてくれる



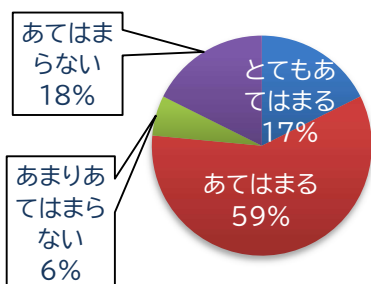
同じ空間にいられる



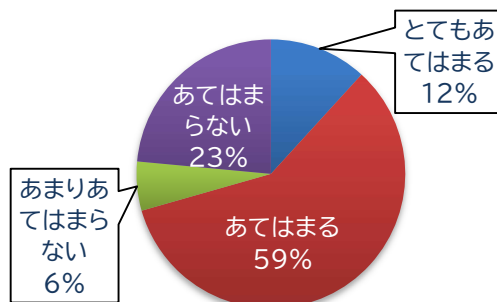
一人でいても気にならない



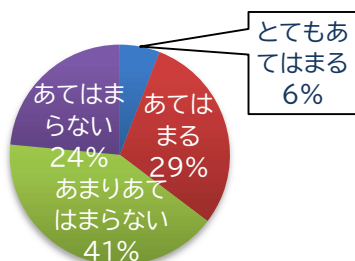
自分を受け入れてくれる誰かがいる



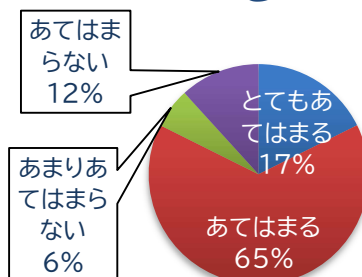
身近にある



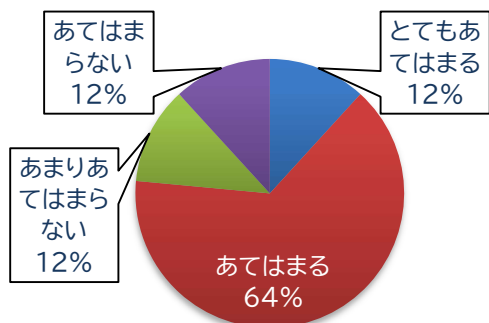
気軽に行ける、一人でも行ける



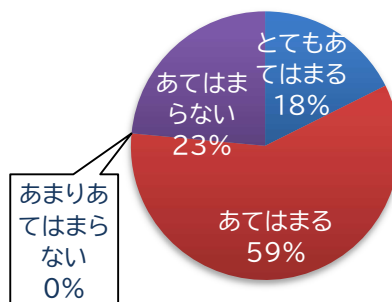
お金がかからずに行ける



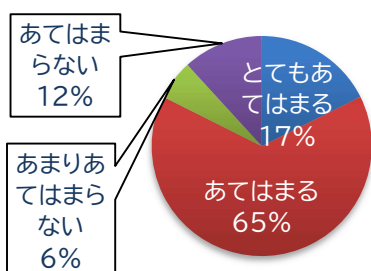
誰でも行ける



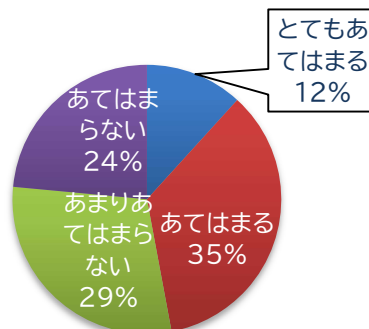
行くきっかけがある



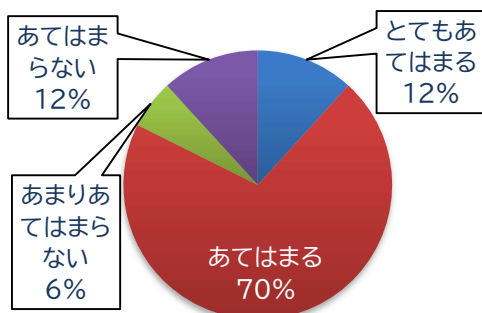
自分と同じ境遇や立場の人がいる



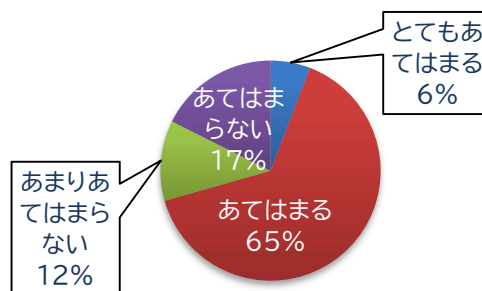
いつでも行ける



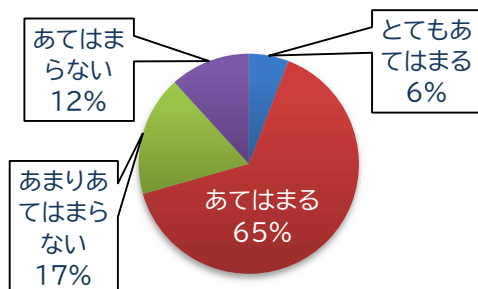
いろんな人と出会える



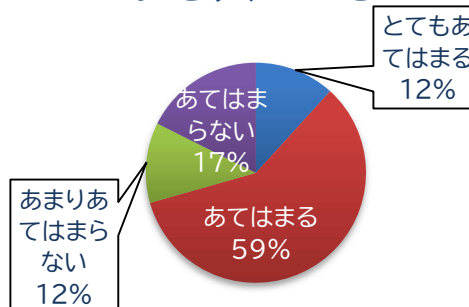
好きなこと、やりたいことができる



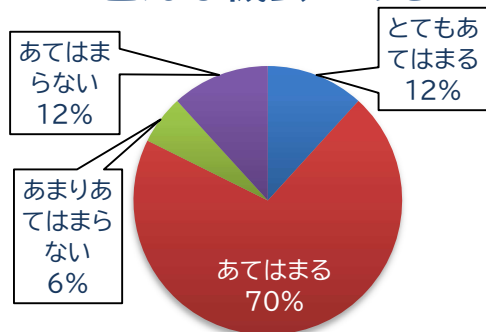
自分の意見を言える、 聴いてもらえる



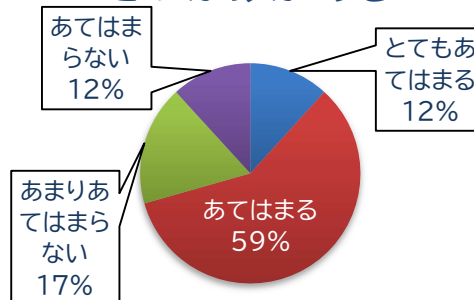
学びをサポートしてく れる人がいる



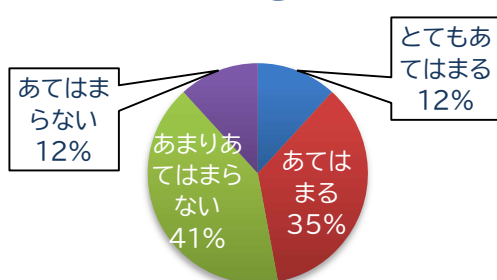
色んな機会がある



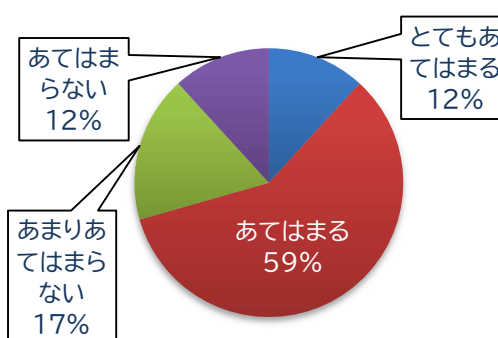
未来や進路を考える きっかけがある

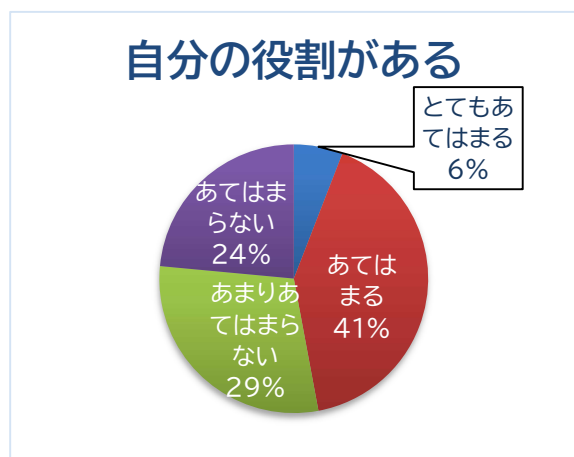


あこがれを抱ける人が いる



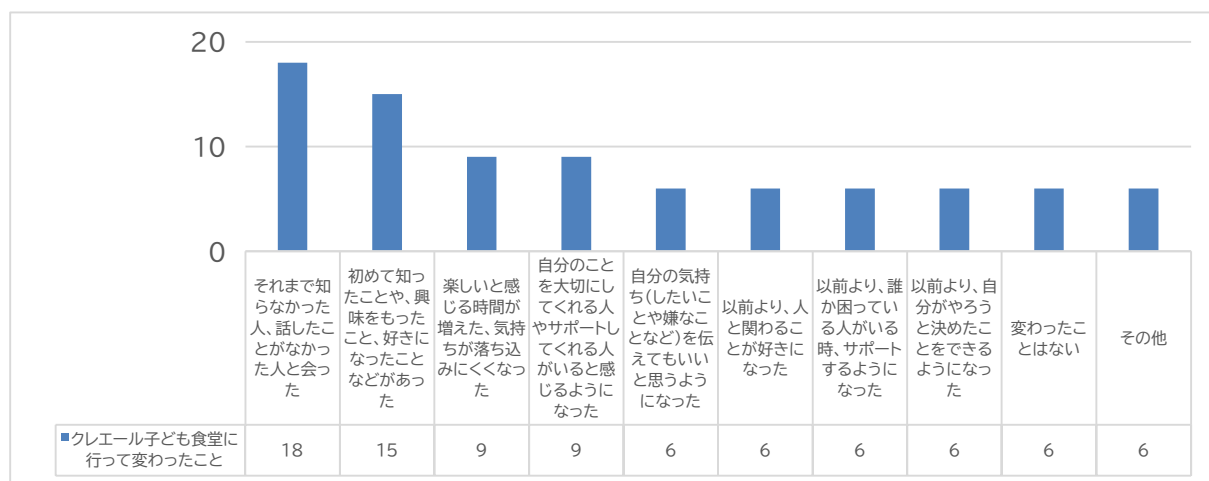
新しいことを学べる





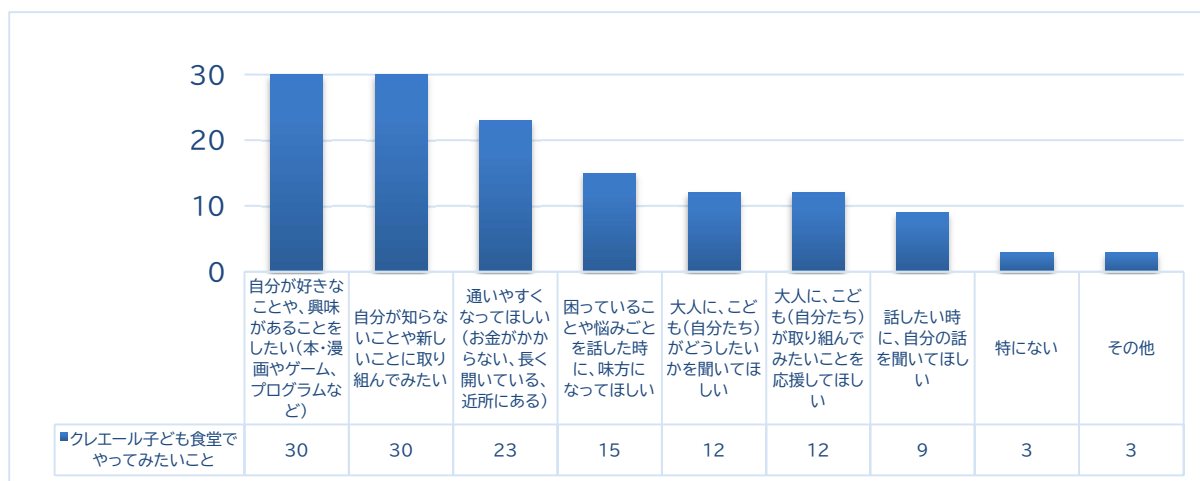
- ⑤ クレール子ども食堂に行くようになって、変わったことがありますか？（複数回答可）

「それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った（18件）」「初めて知ったことや、興味をもったこと、好きになったことなどがあった（15件）」「自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった（9件）」などの回答があった。

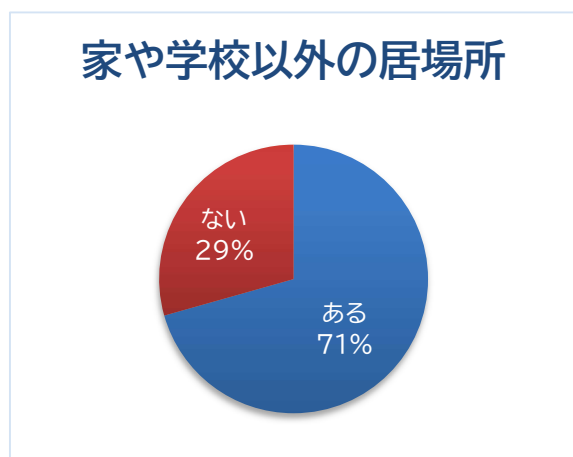


- ⑥ あなたが、クレール子ども食堂でやってみたいことや、もっとこうだったら良いのと思うことはありますか？（複数回答可）

「自分が好きなことや、興味があることをしたい（本・漫画やゲーム、プログラムなど）（30件）」「自分が知らないことや新しいことに取り組んでみたい（30件）」といった意見が見られた。一方、「通いやすくなってほしい（お金がかからない、長く開いている、近所にある）（23件）」出ており、問4でも指摘があったとおり通いにくさが少しネックになっていることがわかった。

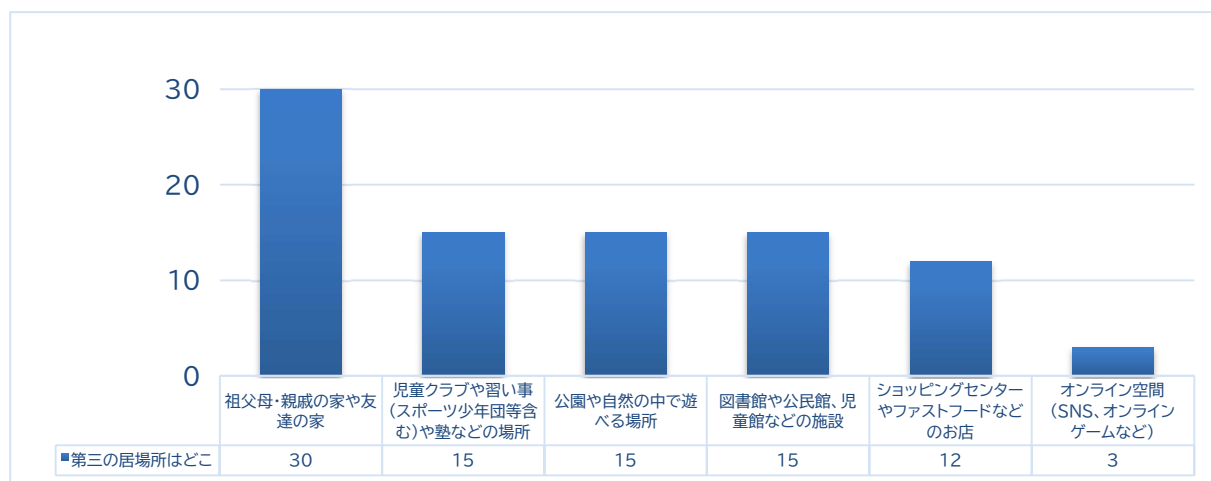


- ⑦ あなたは、家（普段寝起きをしている場所）や学校（授業や部活、クラブ活動）以外に、「ここに居たい」と感じる居場所がありますか？（今、来ている居場所も含む）



回答者51人のうち、36人が「ある」と回答した。また、そのような場所はどこか尋ねたところ、「祖父母・親戚の家や友達の家（30件）」「児童クラブや習い事（スポーツ少年団等含む）や塾などの場所（15件）」「公園や自然の中で遊べる場所（15件）」といった回答があった。

「ない」と回答した人は、家や学校に居場所を見出していた。また、交通手段がないことを理由に挙げている人もいた。



3. アンケート結果のまとめ

保護者向けおよび子ども向けのアンケート結果をまとめると、次の7個の傾向を見出すことができた。

- クレール子ども食堂に参加することで、親の負担が軽減されると共に、子どもも以前より周りへ関心を持つようになったことがわかった
- クレール子ども食堂には、食事だけでなく子供の成長につながる場も欲していることがわかった
- 子ども食堂以外の施設の利用について、児童館は約半数が利用経験ありと答えたが、それ以外の施設はほとんど利用経験がなく、認知すらされていないことがわかった
- 子どもの居場所として、成長や交流が生まれる場が強く求められていることがわかった
- 様々な人が集まる子ども食堂は、コミュニケーションは取れるが気が合う友達がいなくて子どももいることや、役割が無いと思っている子どもがいることもわかった
- クレール子ども食堂は、規模が大きく様々なところで活動しているため、子どもたちだけで気軽に行けるわけではないことがわかった
- クレール子ども食堂に行くようになり、子どもたち自身の世界が広がると共に、自身が興味を持ったことや新しいことに挑戦したいと思っていることがわかった

4. アンケート結果を受けて～今後の展開～

クレール子ども食堂では食事提供だけでなく、食育体験や芸術体験などの機会を子どもたちに与えられるように活動を進めてきた。これは、今までの子ども食堂や宅食事業を通じて得た課題感から活動をおこなうようになった。2025年度は、更にこれらの活動を強化するべく、クラウドファンディングも実施している。

今回のアンケート調査の結果を受けて、クレール子ども食堂が進めようとしていた食育体験や芸術体験の機会創出は、保護者のニーズにも合致すると考えられる。一方で、クレール子ども食堂へ子どもたちだけで通うことは難しいということが多数指摘されており、今後はアクセス方法を改善することも重要になるだろう。また、子ども食堂と児童館以外の施設経験がほとんどないことがわかったので、今後は、クレール子ども食堂をハブに各施設と連携して、相互に子どもたちを送り出せるような環境を作っていきたいと思う。以上

「子どもの居場所」づくり調査アンケートに基づく取組

1. 取組概要

Creer 子ども食堂では、「子どもの居場所」づくりに関する調査アンケートに基づき、以下の取組を実施した。なお、アンケート調査の結果は別紙にまとめている。

課題	取組内容	分析・考察
食事提供だけではなく、食育体験や芸術体験などの機会が子どもたちには必要	<ul style="list-style-type: none"> ・稲刈りやキウイ狩り体験の実施 ・音楽家による演奏や、書道や美術、楽器演奏機会の提供 ・調理実習を行った 	クレール子ども食堂に参加した子どもたちの世界が広がると共に、自身が興味を持ったことや、新しいことに調整したいと思う気持ちが芽生えた。
<p>子ども食堂に来られない家庭がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ服をいつも来ている(洗濯されていない、季節になっていないなど) ・食事の用意が困難 ・子育てができていない <p>貧困や長時間労働でできていない家庭と、養育する気がないネグレクトの家庭がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・孤立している 	・こども宅食事業の実施	<p>親の精神的な負担が軽減されると共に、子どもも以前より親以外の大人へ関心を持つようになった。</p> <p>家庭や子どもの課題に気づき、さまざまな支援が必要だと感じ、NPO だけではなく、広く連携が重要だと感じた。</p>
子どもが安心して自由に過ごせる場所が必要	・子ども食堂を平日毎日および毎月第4土曜日に開催	<p>様々な人が集まることで、子どもたちがコミュニケーションを取れあえるようになった。一方で、コミュニケーションは取れるが、気が合う友達はいない、自身の役割が無いと思っている子どももいることがわかった。また、規模が大きくなった土曜日のイベント時には参加しづらく、平日の人</p>

		<p>数が少ない日にしか来ない子どもや親子もいる。</p> <p>農業漁業体験などの活動に遠くへ出かけることもあり、車がない家庭や、こどもだけの参加がしづらいこともあった。貸し切りバスを借りて農業体験にでかけた際は、応募多数でバス 1 台の定員を超えたこどもを断ることになり、かわいそうだった。もっと資金があれば、希望するすべての子どもに体験の機会が提供できると思った。</p>
<p>困りごとの相談をしたり、行政の窓口を利用したりする人が少ない</p>	<p>個別訪問の際にお話をしたり、参加者が少ないときに、別室で話したりしている</p>	<p>さまざまな、利用できる制度やサービス、相談窓口があるし、地域の人にもまわりにいるのだが、助けてほしいと声をあげない若いシングルマザーが圧倒的に多い。孤立孤独で、ますます家庭、子どもが生きづらい状況になっている。何度も会って、関係性を築いて、やっと、実は・・・と相談されることもあった。</p>
<p>こどもの明るい未来が確信できない</p>	<p>ネグレクトや虐待に近い家庭や、子どもに精神的なダメージを負わせる言葉を親が言う場面をしばしば見かけるので、こちらから、話しかけたり、子どもを預かったりしている。送迎して、子どもの居場所で過ごしている。</p>	<p>今日の危険を回避しても、明日からどうするのか、無力だと感じる。行政に相談した時、訪問支援をしたのか、ドアをあけて面談できたのか、個人情報としてこちらが知ることができない、子どもの安心で幸せな未来が開けていくのか心</p>

		配である。食事をもって訪問する約束をしているので、こども宅食の際は、ドアが開く。心の扉を開き、社会とつながってほしいと願いつつ、訪問を定期的に続けているが、もっともっとネットワークや支援が必要である。
--	--	--

以上

「子どもの居場所」づくりに関するクレール子ども食堂の運営上の工夫

特定非営利活動法人 Creer

1. 取組概要

クレール子ども食堂では、「子どもの居場所」づくり事業を 2024 年 7 月 1 日～2025 年 3 月 21 日まで実施した。また、各取組は子ども家庭庁のガイドラインに基づき、2.～5.のとおり実施した。

2. 「子どもの居場所」の定義

クレール子ども食堂では、子どもの居場所を様々な事情を抱えた地域の子どもたちや、地域住民が集える場所と定義した。

3. 「子どもの居場所」の機能・役割

クレール子ども食堂では、「子どもの居場所」として機能させるにあたり次の取組をおこなった。

- 地域の中での「子どもの居場所」として、子どもたちが自由に参加できる雰囲気づくりを心掛けた
- いつでも必要な時に来られるように、平日毎日 11:30～18 時までと毎月4土曜日月 1 回以上開いた。
- 食事支援として、日替わりメニューの食事を提供した
- 子どもの居場所まで来られない、配慮を必要とする子どもへの対応として、「こども宅食」をおこない、各家庭へ食事や生活用品を届け、相談に乗ったり、子どもの見守りを行った
- 地域の人々と交流できる機会の提供として、農業や調理実習などの食育体験や芸術体験の機会を月に 1 回以上設けた

4. 子どもの安全対策・衛生管理など

クレール子ども食堂では、参加する子どもたちの安全確保および衛生管理として次の取組をおこなった。

- 安全管理の一環として、ボランティア活動保険に加入した
- 衛生管理として、調理スタッフの検便を月 1 回、調理室の消毒を毎日実施した
- 防災・防犯対策として、防犯カメラの設置、入館者の受付名簿記入、入り口でのチェックを行った。スマホでの撮影や必要以上の子どもへの個人情報の質問や接触を控えるよう地域のボランティアの人に注意した。地域のボランティアも登録者のみとした。イベント時の参加者も事前申し込み制とした。

- 個人情報の秘密保持として、参加者名簿は受付終了後は、担当者が保管した。相談内容記録は、各家庭ごとにファイルし、事務室戸棚に収納し、関係者のみが閲覧するようにした。
- 必要に応じて、徳島県警や中央警察署と連携を取れる態勢を整えた。また、個人的に休日や昼休憩時間の警察官の参加者もたびたびあり、安心して運営できた。

5. 地域の実情に応じた「子どもの居場所」づくりの推進支援

クレール子ども食堂では、サポーターとして、多くの農家の生産者や、商店、スーパー、地域住民、社会福祉協議会、ロータリークラブやライオンズクラブ、大学生、企業、団体から支援をいただき活動を実施した。中高生が多く集まる金曜日の夕方からは、大学生スタッフが協力した。またクレール子ども食堂の所在地である徳島市中央万代ふ頭にある店舗や事業者の皆さんがあたたく、活動を見守り、子ども達が安全に行き来できるよう案内などの協力や、水辺の安全管理協力をしてもらった。徳島県からは、週末県職員駐車場を利用者に使えるようにしてもらえて駐車場不足が解消された。

以上

令和6年度徳島県「こどもの居場所づくり」支援体制強化事業
 (「こどもの居場所」支援ニーズ調査事業) 実施内容及び実績報告書 NP0法人Creer

委託事業者名	令和6年度徳島県「こどもの居場所づくり」支援体制強化事業
居場所の開設場所	クレエール子ども食堂 徳島市万代町5丁目71-4
実施内容	こどもの居場所を開き, 食事提供, 相談, 学習支援, 生活支援, 農業体験, 音楽書道絵画等芸術体験, コンサート等を行った

開催月	延べ 開催回数	延べ 参加人数	開催概要	備考
7月	23	475	平日 11:30~18:00 子ども食堂 18:00~21:00 こども宅食 7/27(土) 子ども食堂コンサート	
8月	22	520	平日 11:30~18:00 子ども食堂 夏休み宿題応援 学習・習字・絵画 18:00~21:00 こども宅食 8/24(土) 子ども食堂コンサート	
9月	22	460	平日 11:30~18:00 子ども食堂 18:00~21:00 こども宅食 9/14(土) 子ども食堂 和太鼓 9/21(土) 食育 上勝町棚田 稲刈り	
10月	23	480	平日 11:30~18:00 子ども食堂 18:00~21:00 こども宅食 10/26(土) 子ども食堂コンサート	
11月	27	577	平日 11:30~18:00 子ども食堂 18:00~21:00 こども宅食 11/9(土) 子ども食堂コンサート 11/16(土) 上勝キウイ、勝浦みかん農業体験 11/23(土) 鳴門さつまいも農業体験	
12月	21	815	平日 11:30~18:00 子ども食堂 18:00~21:00 こども宅食 12/20(金)2公演、21(土)2公演、22(日)1公演、 クリスマス会とクリスマスコンサート	
1月	20	490	平日 11:30~18:00 子ども食堂 18:00~21:00 こども宅食 1/25(土) 子ども食堂コンサート	
2月	19	455	平日 11:30~18:00 子ども食堂 18:00~21:00 こども宅食 2/11(火・祝) 子ども食堂コンサート アンケート調査開始	
3月	23	505	平日 11:30~18:00 子ども食堂 18:00~21:00 こども宅食 3/28(金) 29(土) 子ども食堂コンサート アンケート調査集計 報告書作成	
合計	200	4777		

徳島県こどもの居場所委託事業 最終報告書

一般社団法人うみのこてらす

1. 居場所の実施内容及び実績、運営上の工夫及び課題

1.1 実施内容

- 居場所の目的・背景
 - 本事業は、10 代のこどもたちへの支援が県内で手薄である現状を踏まえ、彼らが安心して過ごせる居場所を提供するとともに、大学生チームを編成し、こども支援事業の担い手育成に貢献することを目的としている。
- 実施概要（場所、開催頻度、対象者、提供サービス）
 - 業務名：大学生による 10 代のこどもたちの居場所創出事業
 - 居場所名前：中高生のフリーカフェ ゆうてらす
 - 実施場所：クレエールこども食堂（徳島県徳島市万代町 5 丁目 7 1 - 4）
 - 開催頻度：月 2 回
 - 主な利用者・支援対象者：徳島市近辺の 10 代のこども・若者（約 15 人）
 - 活動プログラム
 - 大学生とこどもたちが気軽に話せる場を提供
 - 必要に応じた個別相談の対応
 - 学習のサポート
 - 夜ごはんの提供/緊急食料配布
 - 挑戦の場所づくり（アートイベント、クッキングイベント、釣り大会など）

1.2 実績

- 利用者数（延べ人数・実人数）
 - 延べ人数：112 人
 - 実人数：39 人
- 支援スタッフ・ボランティアの体制
 - 事業責任者；川邊
 - 学生インターン：3 名
 - 学生ボランティア：1 名
 - ソーシャルワーカー：鳴滝
- イベント・特別活動の実績
 - 回数：17 回（第 1・3 金曜日 16:00-19:00）
 - イベント系

- 釣り大会、ゲーム大会、アートイベント、ネイルイベントなど
- 学習支援
 - 個別で持ってきた教材を大学生がサポート
- 食支援/食事支援など

1.3 運営上の工夫

本事業では、運営面で様々な工夫を行った。地域や関係機関との連携については、学校にはちらし配布や報告書の提出を通じて広報連携を行い、行政機関とは心配なこどもについての通告や相談を通じて情報共有を密にしてきた。

また、安全管理とリスクマネジメントの面では、虐待リストを作成し、対応の統一を図るための開催マニュアルを整備した。月に一度のケース会議を開催し、運営状況や課題をスタッフ間で共有し、必要な対策を検討する場として活用した。

さらに、こどもたちが参加しやすい環境づくりにも力を入れた。広報は親しみやすさを重視して LINE や Instagram を活用し、初めて参加するこどもに向けた歓迎イベントを実施したことで参加のハードルを下げることができた。

空間デザインについては、パーティションで空間を区切り、安心できる居場所づくりを心掛けた。居場所の名称決定やのぼり旗のペイントをこどもたちと一緒にを行い、愛着を持ってもらえるよう配慮したほか、活動内容や食事メニューについてもこどもたちと相談しながら決定し、自分たちで作り上げるプロセスを大切にした。

1.4 運営上の課題

本事業においては、運営上いくつかの課題が明らかとなった。まず、スタッフの確保については、大学生を中心とした活動であったため、部活動やアルバイトとの両立が難しい状況もあった。もともと大学生スタッフが内部にいたため、そこからの広報活動でできたが、大学生へ情報と届けることも課題になってくる。

また、参加者の多様なニーズへの対応も課題となった。経済困窮、不登校、親子関係の不和など、こどもたちから様々な声上がるものの、月 2 回の開催では十分な対応が難しい場面もあった。これに伴い、スタッフ自身が抱える心理的負担も見受けられ、スタッフへの心理的ケアも今後の重要な課題であると認識している。

2. 支援ニーズ調査の集計結果

2.1 調査概要

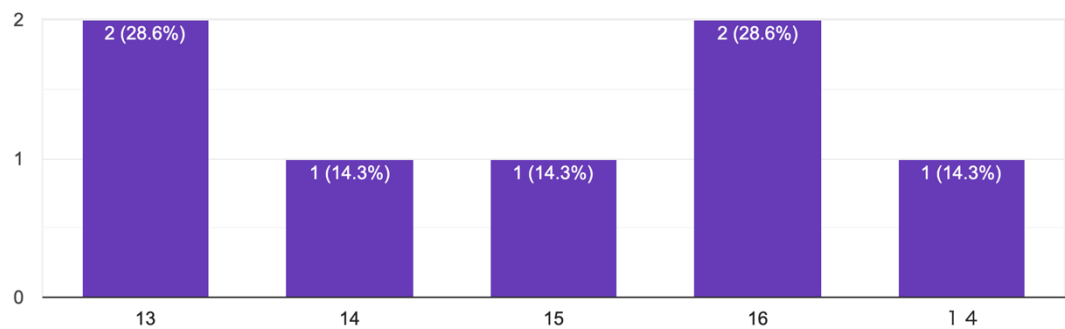
本事業における調査は、こどもおよび支援者のニーズを把握することを目的として実施した。調査はグーグルアンケートを用いて行い、こどもたちやスタッフが感じている課題や要望を収集した。

2.2 集計結果

- 件数
 - 7人
 - 初回だけの利用や、こどもの状態をみてアンケートをお願いできる状況でなかったこどももいたため、件数は少なくなっている
- 集計結果

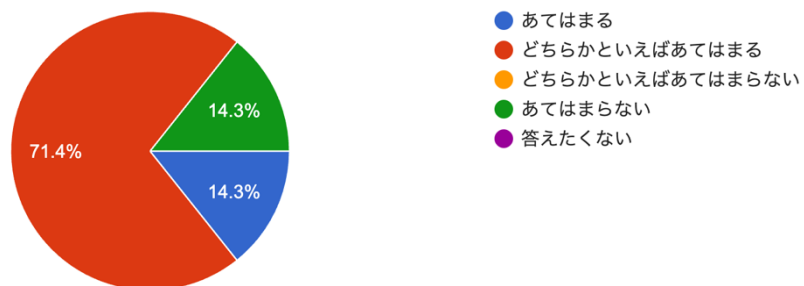
2.年齢

7件の回答

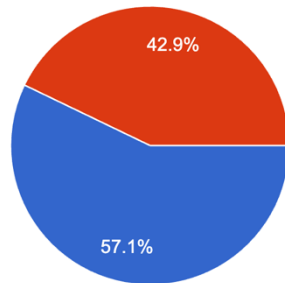


1.あなた自身について次のことがどれくらいあてはまりますか。「自分のことが好きだ」

7件の回答

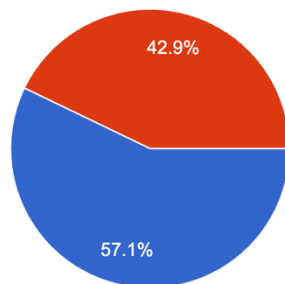


1.気軽な気持ちで利用することができる
7件の回答



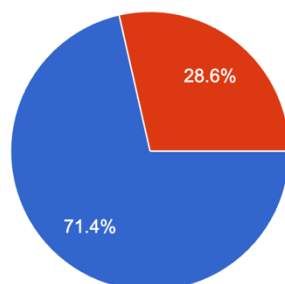
- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

2.信頼できる人、味方になってくれる人がある
7件の回答



- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

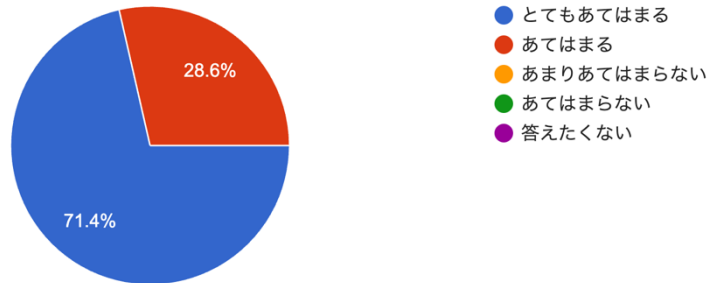
3.過ごし方を選べる
7件の回答



- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

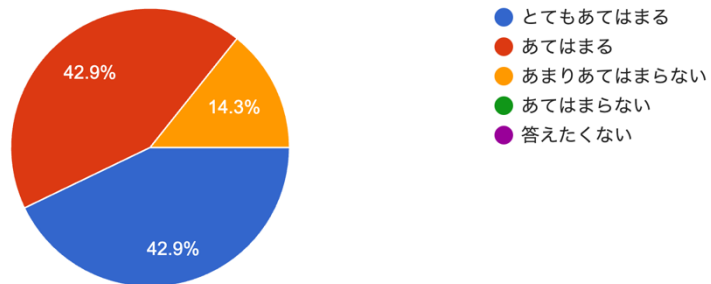
4.ありのまま、素のままでいられる（強制されない、指図されない）

7件の回答



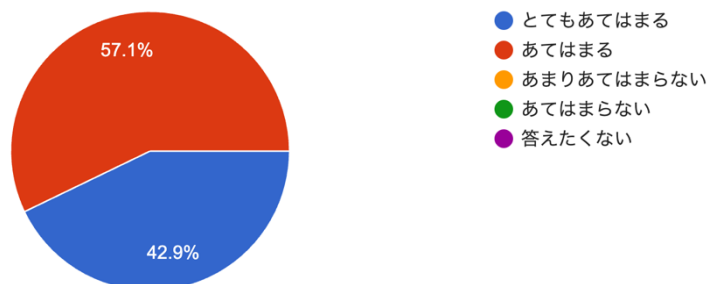
5.誰かと仲良くなれる

7件の回答



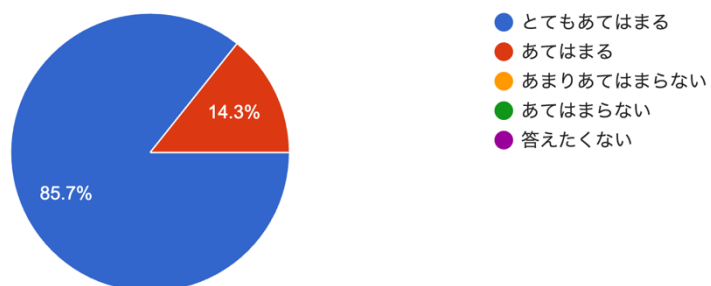
6.気の合う人がいる

7件の回答



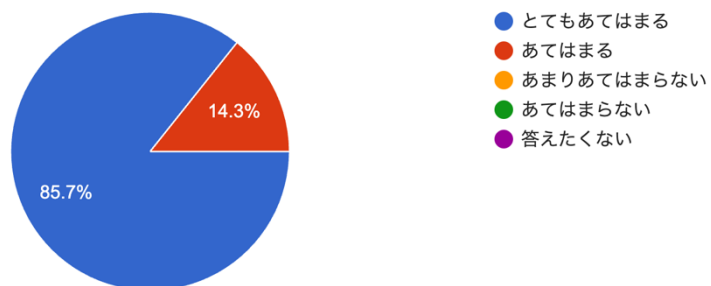
7.安心・安全できる場である

7件の回答



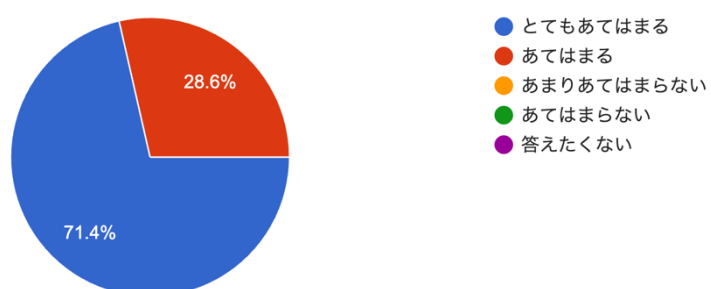
8.くつろげる環境が整っている（キレイである、ゴロゴロできる）

7件の回答

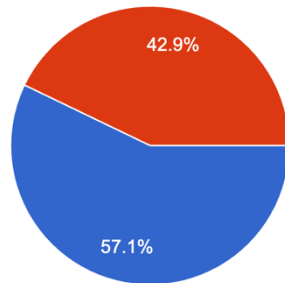


9.居たいだけ居られる

7件の回答

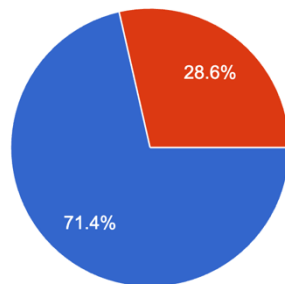


10.助けてほしいときに、助けてくれる人がいる
7件の回答



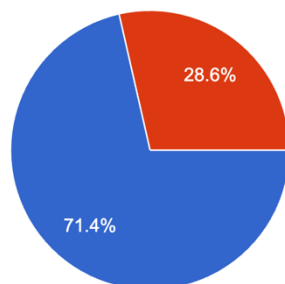
- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

11.誰かとコミュニケーションできる
7件の回答



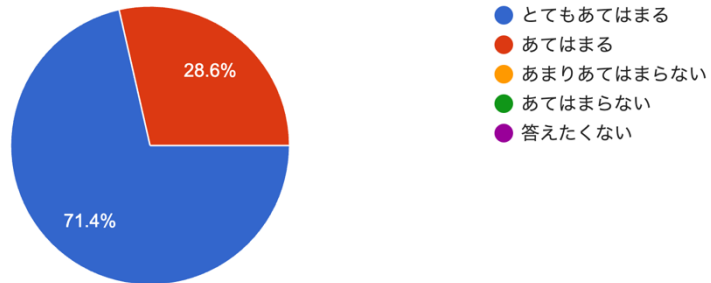
- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

12.話を聴いてくれる
7件の回答

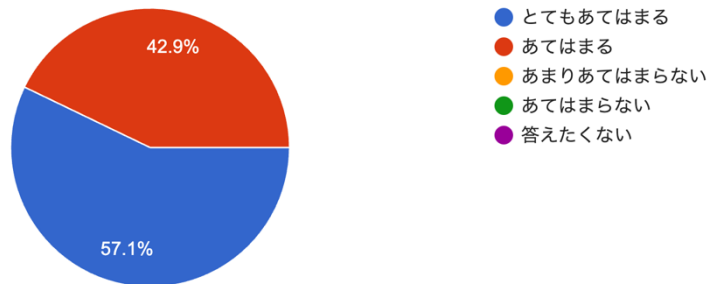


- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

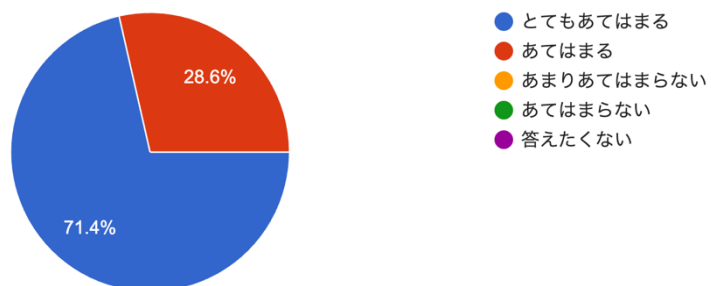
13.別の目的をもった人がいても、同じ空間にいられる
7件の回答



14.一人で居ても気にならない
7件の回答

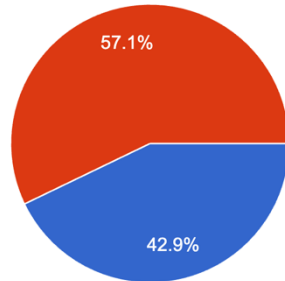


15.自分を受け入れてくれる誰かがいる
7件の回答



16. 身近にある

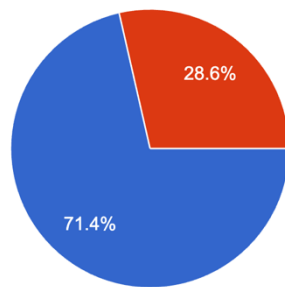
7 件の回答



- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

17. 気軽に行ける、一人でも行ける

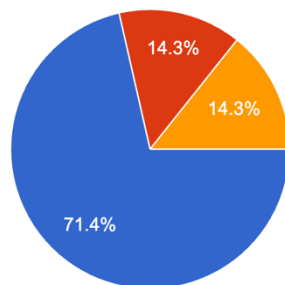
7 件の回答



- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

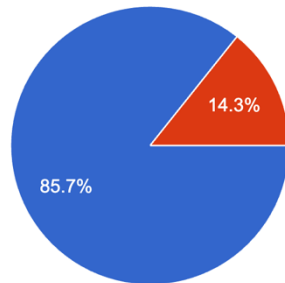
18. お金がかからずに行ける

7 件の回答



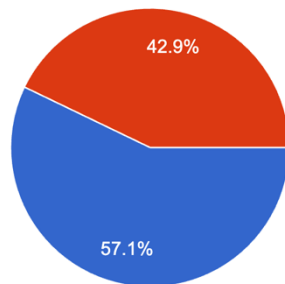
- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

19.誰でも行ける。誰でも利用できる。
7件の回答



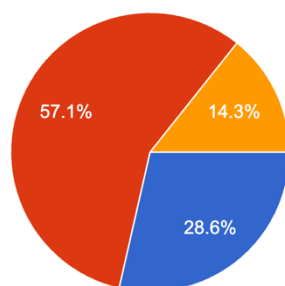
- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

20.行くきっかけがある
7件の回答



- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

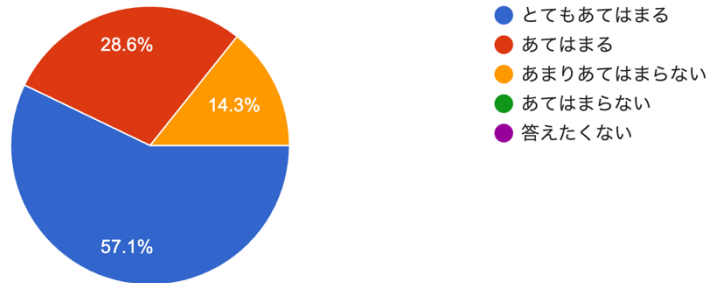
21.自分と同じ境遇や立場の人がいる
7件の回答



- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

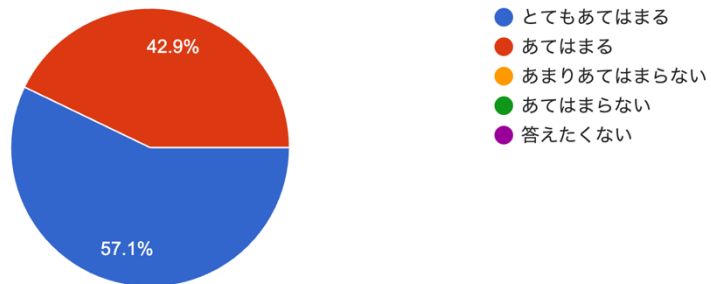
22.いつでも行ける（居場所に行く時間を選べる）

7件の回答



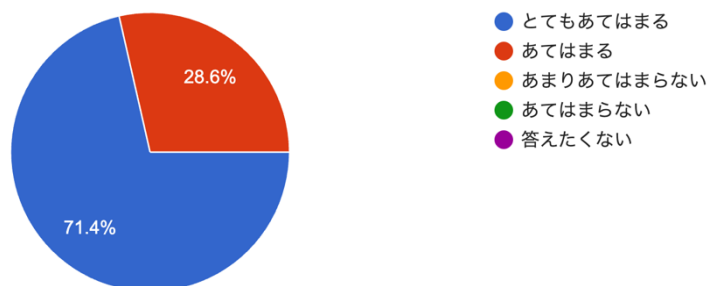
23.いろんな人と出会える

7件の回答

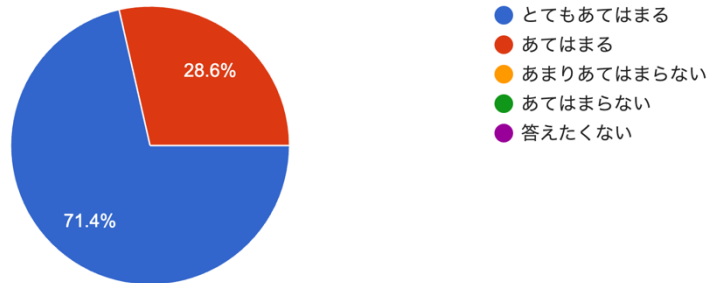


24.好きなこと、やりたいことができる

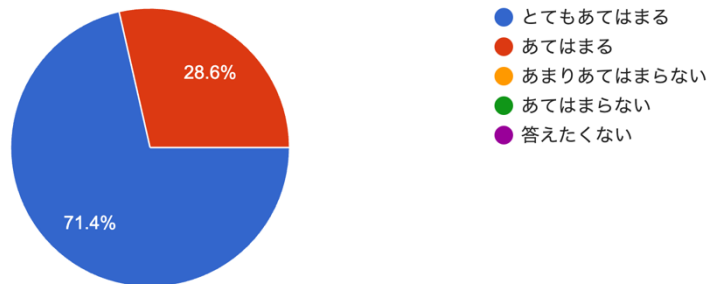
7件の回答



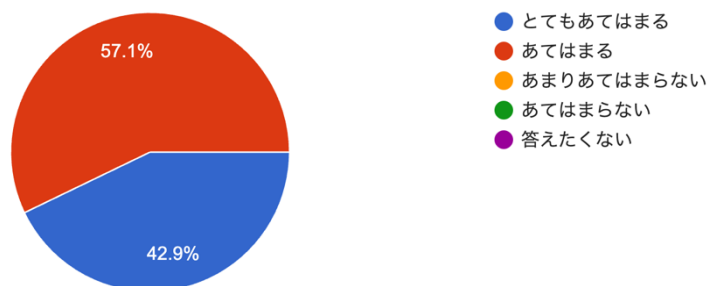
25.自分の意見を言える、聴いてもらえる
7件の回答



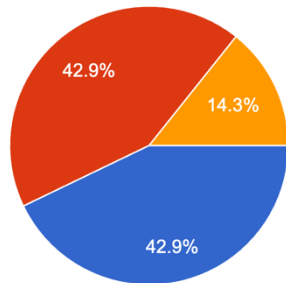
26.一緒に学ぶ人、学びをサポートしてくれる人がある
7件の回答



27.いろんな機会がある（興味や希望に沿ったイベントがある）
7件の回答

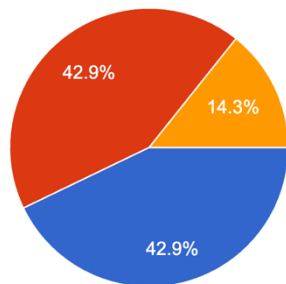


28.未来や進路を考えるきっかけがある
7件の回答



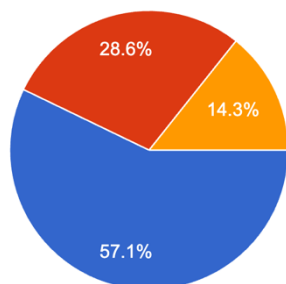
- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

29.あこがれを抱ける人がいる
7件の回答



- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

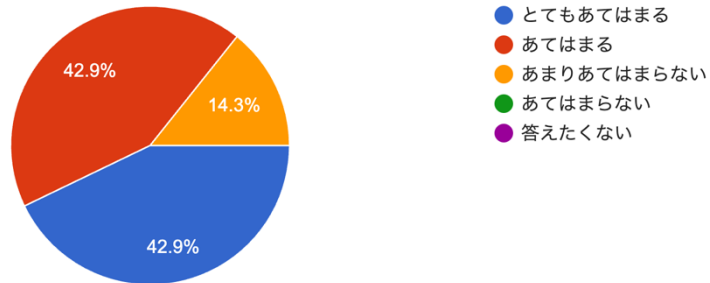
30.新しいことを学べる
7件の回答



- とてもあてはまる
- あてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない
- 答えたくない

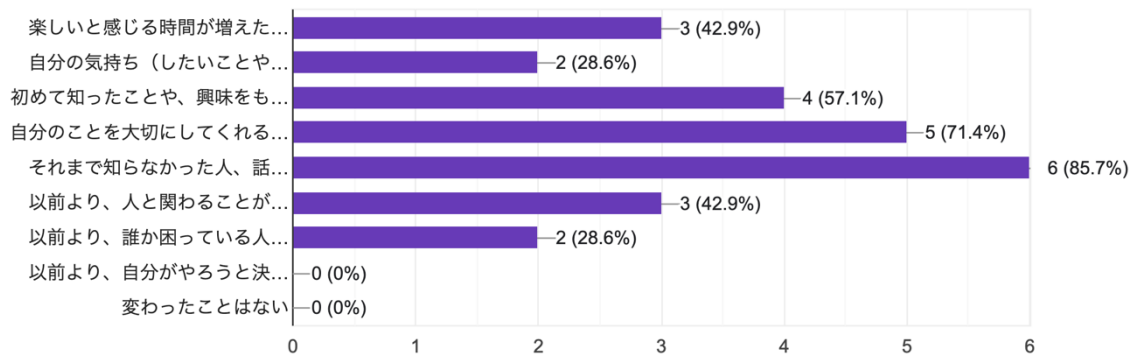
31.自分の役割がある。

7件の回答



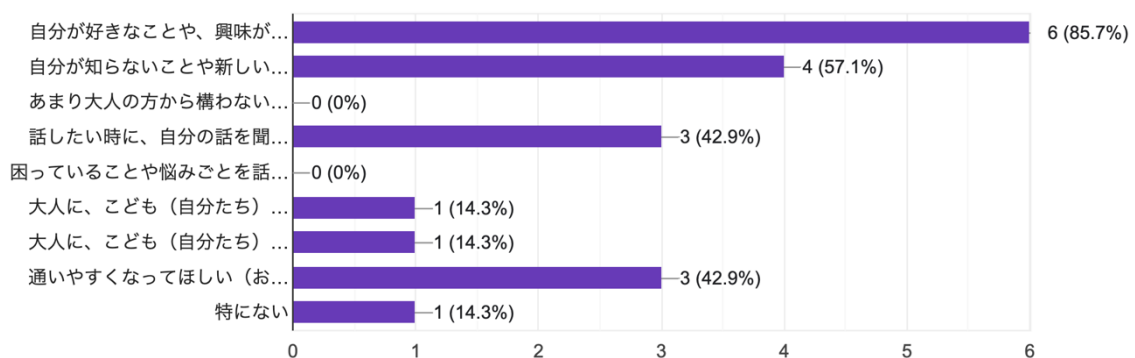
32.居場所cafeに行くようになって、変わったことがありますか。

7件の回答

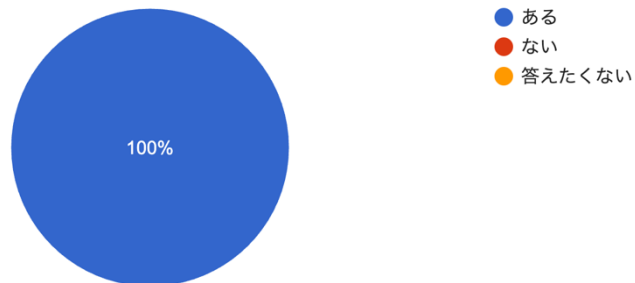


33.あなたが、居場所cafeでやってみたいこと...っとうございましたらいいのと思うことはありますか。

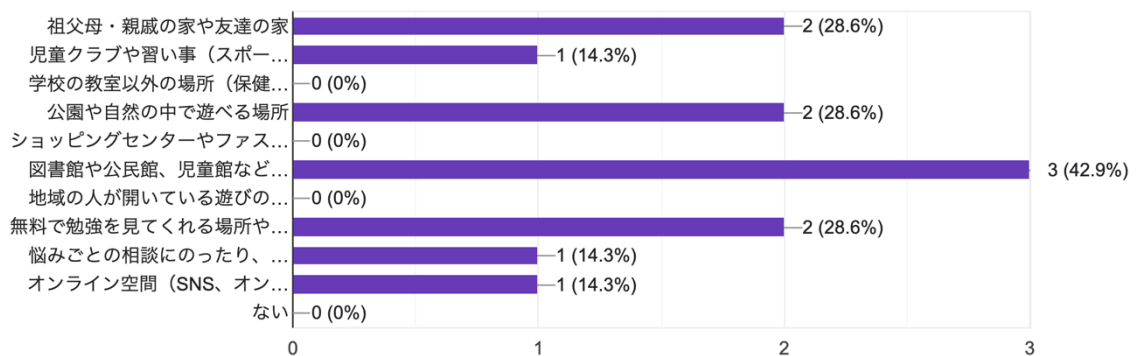
7件の回答



34.あなたは、家（普段寝起きをしている場所）や学...る居場所がありますか。（居場所cafe」を含む）
7件の回答



そこは、どのような場所ですか。
7件の回答



● アンケートから見てきたこと

今回のアンケート結果から、居場所 cafe は 10 代のこどもたちにとって、安心して過ごせる場であるとともに、新しいことを学び、仲間を作り、自分を表現できる貴重な場所となっていることが分かった。多くのこどもたちが「気軽に利用できる」「信頼できる人がいる」「自由に過ごせる」と感じていた。

一方で、さらにやってみたいことや要望としては、好きなことにもっと挑戦したい、興味ある分野を広げたいという声があり、継続的なプログラムの充実や多様な体験機会の提供が求められていることがわかる。

また、家庭や学校以外での「居場所」を持っていると答えたこどもも多く、その場所として祖父母宅や公共施設、習い事、さらにはオンライン空間も含まれていた。これらはこどもたちの生活環境やコミュニティの広がり示唆している。

ただし、実際運営していく中で、「居場所がない」と感じているこどももあり、月 2 回の開催では十分に支えきれない部分もあることが課題として浮かび上がった。今後は、より頻度を高めた活動や、個別支援体制の充実が必要である。

3. 把握した課題に係る分析・考察等（検討の経過等含む）

3.1 課題の整理

- 支援対象者の現状と課題（学習の遅れ、居場所の必要性など）

居場所活動を通じて、様々な子どもたちと出会う中で、経済的困窮、不登校、親との不仲、自信の欠如、親の体調不調、外国籍による言語面での課題など、多様な背景を持つケースが見られた。例えば、シングル家庭でおばあちゃんの家で生活している高校生女子は、家庭の事情により十分な食事が取れない状況があった。また、親からの強い教育方針に悩む子どもや、友達がいないことで孤立し相談できずにいる中学生、さらに韓国から来日し日本語で苦勞している子ども、家庭内で毎日のように喧嘩が起こる環境で過ごす子などの存在が確認された。

これらのケースから、経済的な問題に加えて、親子関係や言語の壁によって学校や家庭で「居場所がない」と感じている子どもたちが一定数存在していることが分かる。しかし、こうした課題は非常に見えにくく、子どもたち自身の言葉や関わりの中でようやく表面化してくることも少なくなかった。

- 連携面および居場所運営に関する課題

集客において、思春期の子どもたちに対しての最初の集客に苦勞し、当初はわずか2～3人からのスタートとなった。居場所という言葉そのものに対する警戒心や、子どもたち自身の忙しさも要因として考えられる。その中で、学校を通じてのチラシ配布や教育委員会の協力を得て情報を届けることができたこと、さらに初回のハードルを下げるイベントを開催したことで、参加者が徐々に増加した。また、クチコミを通じて少しずつ地域に広がりを見せたことは一定の成果であるといえる。

今回、学校へのチラシ配布にあたっては県の委託事業であることが後押しとなり、徳島市教育委員会が積極的に協力してくれたことは大きな前進であり、非常にありがたい支援であった。

しかし、月2回という開催頻度では、子どもたちへの継続的な関わりや家庭へのアプローチが十分に行えない現状も見られた。また、登録制の場ではないため、来なくなった子どもへの対応は限られ、声掛け程度に留まってしまう点も課題として浮かび上がった。今後は、地域や行政とより綿密に連携を図り、継続的な支援体制の構築が必要である。

3.2 今後の提言

中高生向けの居場所不足は依然として大きな課題である。ただ場所を用意するだけでなく、その存在を必要としている中高生へ情報を届けることが難しい現状もある。これに対し、行政や学校といった既に子どもたちと接点を持つ機関との連携を一層強化することが有効である。

また、今後は中高生が自然と集まっている場や機関において出張的に居場所活動を実施するなど、支援と日常を結びつける接点をつくることも重要である。

さらに、相談機関との協力や連携を進め、必要な子どもたちへ間接的にでも支援が届く体制づくりが求められる。

本当に支援を必要とする子どもたちは、自分から SOS を発信しにくい年代であるため、学校生活や日常のなかに支援や情報への接点を用意していくことが大切である。

4. まとめ

本事業を通じて、10 代の子どもたちにとって安心して過ごせる居場所を提供するとともに、大学生が関わることにより、新しいロールモデルやつながりを生み出す場を作ることができた。活動を継続する中で、多様な背景や課題を抱える子どもたちが集まり、居場所の重要性を再認識する結果となった。

一方で、限られた頻度や人材、資金面における課題も浮かび上がった。これらを解決するためには、行政や学校、地域とのさらなる連携強化と、持続可能な運営体制の構築が不可欠である。特に中高生への情報発信やアクセス手段を広げ、日常の中で支援に出会える仕組みを整えることが求められる。

今後も、地域のネットワークを活かしながら子どもたちの声を丁寧に拾い上げ、柔軟かつ継続的な支援モデルを構築していくことで、より多くの子どもたちが自分らしく生きていける社会の実現に貢献していきたい。

5. 活動の写真・記録



別添 8

令和 6 年度徳島県「こどもの居場所づくり」支援体制強化事業
（「こどもの居場所」支援ニーズ調査事業）報告書

一般社団法人 ひとみ学舎

目次

- I 「居場所の会」の実践からみえてくる「既存の学校に行かない または馴染みにくいこどもの居場所」 1
- II デコボコポン（既存の学校に馴染みにくいこどものソーシャルスキルトレーニングの場）からみえてくる「既存の学校に行かない または馴染みにくいこどもの居場所」 10
- III 「ひとみ学舎の相談事業」の実践からみえてくる「既存の学校に行かない または馴染みにくいこどもの子育ての相談の場」 19

I 「居場所の会」の実践からみえてくる「既存の学校に行かない または馴染みにくいこどもの居場所」

1. 「居場所の会」の運営

- (1) 目標：既存の学校に通えない子どもや馴染みにくい子どもとその保護者が、安心して過ごせる場所を提供することにより、人とのかかわる楽しさを感じる。
- (2) 方針：①安心・安全な場をつくること
 ②一人ひとりにとって楽しい活動を探すこと
 ③ルールや活動の枠はあるが、強制的な要求にならないようにすること
 ④活動前後にスタッフミーティングの時間を必ずもち、参加者への理解を深めたり、活動内容や方法について振り返ったりすることで子どもや保護者一人一人に合った支援を探すこと
- (3) 対象：既存の学校に馴染みにくい子どもとその保護者
 小学生～高校生
- (4) 工夫：①開催日の固定化：毎月第3土曜日 13：00～16：00
 夏休み（7月末の10日間）10:00～12:00
 ②子どもたちが「楽しい」と思うものは一人ひとり異なっているので、興味を持ってもらえるように毎回の活動内容をバラエティに富んだものにする（外遊び・室内遊び・絵を描く等）。
 ③こどものみの参加、保護者と一緒の参加等どちらでも可とする。

(5) 「居場所の会」実施の実際

徳島県から委託を受けた期間（2024年7月～2025年3月）の「居場所の会」実施状況は次のとおりである。

実施月	実施回数	実施日	参加者（初）	参加者（継続）	参加者合計	活動内容
7月	11	2024/7/20	2	2	4	ゲームをしよう
		2024/7/20	2	3	5	絵をかいてみよう
		2024/7/21	4	2	6	絵をかいてみよう
		2024/7/22		6	6	絵をかいてみよう
		2024/7/24	2	3	5	絵をかいてみよう
		2024/7/25		6	6	絵をかいてみよう
		2024/7/26		6	6	絵をかいてみよう
		2024/7/27	4	1	5	絵をかいてみよう
		2024/7/29	2	3	5	絵をかいてみよう
		2024/7/30		5	5	絵をかいてみよう
		2024/7/31		5	5	絵をかいてみよう
8月	1	2024/8/17	2	5	7	流しそうめんをしよう
9月	1	2024/9/21	3	6	9	バーベキューを楽しもう
10月	1	2024/10/19	6	5	11	秋を楽しもう
11月	1	2024/11/16		10	10	運動会をしよう
12月	1	2024/12/14	2	8	10	クリスマスパーティーをしよう
1月	1	2025/1/18	2	7	9	凧を作ってあげよう
2月	1	2025/2/15	5	6	11	味噌をつくってみよう
3月	1	2025/3/15		4	4	サイクリングをしよう
合計	19		36	93	129	

(5) 課題：・「居場所の会」の活動を広く周知していくこと

- ・子どもたちのモデルとなるような、子どもと年の近いスタッフを探すこと
- ・会を運営していく資金を確保すること

2.「居場所の会」アンケート結果

(1) アンケート実施方法

「居場所の会」には、複数回参加してくれる人は多いが、1回のみの参加の人もいた。それゆえ、最初に参加した時と、最後に参加した時との変化を追うことは難しかった。できるだけ複数回参加してからアンケートに回答してもらうようにした。アンケートに答えた人は重複していない。

(2) アンケート（こども用）集計結果

① アンケート（こども用）集計結果

アンケート（こども用）配布者数：39名

アンケート（こども用）回収者数：24名

あなたについて

問1 年齢

		割合（％）
1	～9歳	12 50.0
2	10～12歳	5 20.8
3	13～15歳	2 8.3
4	16～18歳	1 4.2
5	19歳以上（おおむね30歳まで）	4 16.7
	合計	24

問2 あなたはどのくらい「今の自分が好きだ」が当てはまるか

		割合（％）
1	あてはまる	7 29.2
2	どちらかといえばあてはまる	11 45.8
3	どちらかといえばあてはまらない	6 25.0
4	あてはまらない	0 0.0
	合計	24

問3 将来も今の地域に住んでいたい

		割合（％）
1	住んでいたい	7 29.2
2	どちらかといえば住んでいたい	7 29.2
3	どちらかといえば移りたい	4 16.7
4	移りたい	2 8.3
5	移る予定があるが将来的には戻ってきたい	1 4.2
6	わからない	3 12.5
	合計	24

居場所について

問1 あなたにとって「居場所の会」はどのような場所か

有効回答数：18/24

集計方法 ①各項目を得点化する

とてもあてはまる・・・4点 あてはまる・・・3点

あまりあてはまらない・2点 あてはまらない・・・1点

②合計点を算出する

③各項目の平均得点を算出する（有効回答数18）

4点満点中

		合計	平均点
(1) 居たい			
1	居ることの意味を問われない（変化を求めない評価しないこと）	58	3.2
2	信頼できる人、味方になってくれる人がいる	61	3.4
3	過ごし方を選べる	55	3.1
4	ありのまま、素のままでいられる（強制されない、指図されない）	60	3.3
5	誰かとつながれる	60	3.3
6	気の合う人がいる	57	3.2
7	安心・安全な場である	66	3.7
8	くつろげる環境が整っている（きれいである、ゴロゴロできる）	56	3.1
9	居ただけいられる	59	3.3
10	助けてほしいときに、助けてくれる人がいる	64	3.6
11	誰かとコミュニケーションできる	58	3.2
12	話を聞いてくれる	64	3.6
13	別の目的をもった人がいても同じ空間にいられる	59	3.3
14	一人でいても気にならない	58	3.2
(2) 行きたい			
1	自分を受け入れてくれる誰かがいる	61	3.4
2	身近にある	55	3.1
3	気軽に行ける、一人でも行ける	55	3.1
4	お金がかからずに行ける	50	2.8
5	誰でも行ける	57	3.2
6	行くきっかけがある	58	3.2
7	自分と同じ境遇や立場の人がいる	50	2.8
8	いつでも行ける（居場所に行く時間を選べる）	49	2.7
(3) やってみたい			
1	いろんな人と出会える	63	3.5
2	好きなこと、やりたいことができる	60	3.3
3	自分の意見を言える、聴いてもらえる	58	3.2
4	一緒に学ぶ人、学びをサポートしてくれる人がいる	63	3.5
5	いろんな機会がある（興味や希望に沿ったイベントがある）	58	3.2
6	未来や進路を考えるきっかけがある	44	2.4
7	憧れを抱ける人がいる	38	2.1
8	新しいことを学べる	57	3.2
9	自分の役割がある	48	2.7

問2 「居場所の会」に行くようになって変わったこと（複数回答）

1	楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ち込みにくくなった	10
2	自分の気持ち（したいことや嫌なことなど）を伝えてもいいと思うようになった	7
3	初めて知ったことや、興味をもったこと、好きになったことなどがあつた	11
4	自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった	10
5	それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った	14
6	以前より、人と関わるのが好きになった	8
7	以前より、誰か困っている人がいる時、サポートするようになった	3
8	以前より、自分がやろうと決めたことをできるようになった	5
9	変わったことはない	6
10	その他	2

問3 「居場所の会」でやってみたいことや、もっとこうだったらいいのと思うこと（複数回答）

1	自分が好きなことや、興味があることをしたい	9
2	自分が知らないことや新しいことに取り組んでみたい	11
3	あまり大人の方から構わないでほしい	3
4	話したい時に、自分の話を聞いてほしい	7
5	困っていることや悩みごとを話した時に、味方になってほしい	5
6	大人に、こども（自分たち）がどうしたいかを聞いてほしい	3
7	大人に、こども（自分たち）が取り組んでみたいことを応援してほしい	4
8	通いやすくなってほしい（お金がかからない、長く開いている、近所にある）	5
9	特にない	5
10	その他	1

問4 家や学校以外に「ここに居たい」と感じる居場所がありますか

割合%

1	ある	19	79.2
2	ない	5	20.8

問5 居場所がある人は、そこはどのような場所か（複数回答）

1	祖父母・親戚の家や友達の家	17
2	児童クラブや習い事（スポーツ少年団等含む）や塾などの場所	3
3	学校の教室以外の場所（保健室、図書館、校内カフェなど）	4
4	公園や自然の中で遊べる場所	7
5	ショッピングセンターやファストフードなどのお店	3
6	図書館や公民館、児童館などの施設	4
7	地域の人が開いている遊びの場所（プレイパークなど）	7
8	無料で勉強を見てくれる場所や、食事や軽食を無料か安く食べることができる場所	2
9	悩みごとの相談にのったり、サポートしてくれる場所	2
10	オンライン空間（SNS、オンラインゲームなど）	1
11	その他	1
	・ひとみ学舎	

問6 ここに居たいと感じる場所がない理由（記述）

1 家が好きだから

問7 どのような居場所なら行ってみたいか（記述）

1 ぼーっといられる場所

2 静かな場所

3 わからない

② アンケート（保護者用）集計結果

アンケート（保護者用）配布者数：25 家族

アンケート（保護者用）回収者数：21 家族

問1 こどもが「居場所の会」に行くようになってあった保護者の変化（複数回答）

1	家事負担が減った	2
2	時間的な余裕ができた	10
3	精神的な負担、ストレスが減った	10
4	こどもの将来についての不安が減った	3
5	変化はない	1
6	その他	3

問2 こどもが「居場所の会」に行くようになって感じられるこどもの変化（複数回答）

1	楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ち込みにくくなった	7
2	自分の気持ち（したいことや嫌なことなど）を伝えてもいいと思うようになった	5
3	初めて知ったことや、興味をもったこと、好きになったことなどがあつた	8
4	自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった	10
5	それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った	8
6	以前より、人と関わるのが好きになった	2
7	以前より、誰か困っている人がいる時、サポートするようになった	1
8	以前より、自分がやろうと決めたことをできるようになった	0
9	変化はない	6
10	その他	1

問3 保護者が「居場所の会」に望むこと（複数回答）

1	こどもが好きなことや、興味があることが取り組めるようにしてほしい	14
2	こどもが知らないこと、新しいことに取り組めるようにしてほしい	18
3	あまり大人が構わないでほしい	2
4	地域の大人と関わる機会を増やしてほしい	2
5	こどもに勉強を教えてほしい	5
6	保護者の相談にのってほしい	3
7	利用しやすくなしてほしい（費用負担、開所時間、場所等）	7
8	特になし	2
9	その他	2

問4 「子どもの居場所」の利用状況

(1) 利用している・利用したことがある（複数回答）

①放課後児童クラブ	13
②児童館	7
③こども食堂	11
④無料学習支援	0
⑤フリースクール等	8
⑥プレイパーク	2
⑦親子サークル	5

(2) 利用している・利用した理由（複数回答）

①保護者が仕事で不在の時など、こどもが心配	19
②子どもを様々な人と関わる機会や体験をさせたい	26
③無料または低額で食事や学習支援を提供してくれる	10
④家事や子育ての負担軽減	16
⑤その他	

(3) 利用した理由（「子どもの居場所」ごと）（複数回答）

	放課後児童クラブ	児童館	こども食堂	無料学習支援	フリースクール等	プレイパーク	親子サークル
①保護者が仕事で不在の時など、こどもが心配	11	3	3		2		
②子どもを様々な人と関わる機会や体験をさせたい	4	2	5		8		5
③無料または低額で食事や学習支援を提供してくれる	3		6				
④家事や子育ての負担軽減	3	3	2			2	2
⑤その他							

(4) 利用したことがない（複数回答）

①放課後児童クラブ	6
②児童館	5
③こども食堂	5
④無料学習支援	11
⑤フリースクール等	5
⑥プレイパーク	6
⑦親子サークル	6

(5) 利用していない理由（複数回答）

①どういうところか知らないから	5
②必要性を感じないから	23
③参加することで貧困だと思われたりいじめられたりしないか心配	
④知らない人とかかわってほしくない	
⑤どんな食事が提供されるかわからず心配（衛生面やアレルギー）	
⑥利用したいが開催日時等が都合と合わない	4
⑦利用したいが近くにない、どこにあるかわからない	11
⑧利用したいが経済的負担が大きい	
⑨その他	

(6) 利用していない理由（「子どもの居場所」ごと）（複数回答）

	放課後児童クラブ	児童館	こども食堂	無料学習支援	フリースクール等	プレイパーク	親子サークル
①どういうところか知らないから				2	1	1	1
②必要性を感じないから	4	4	4	3	4		2
③参加することで貧困だと思われたりいじめられたりしないか心配							
④知らない人とかかわってほしくない							
⑤どんな食事が提供されるかわからず心配（衛生面やアレルギー）							
⑥利用したいが開催日時等が都合と合わない			1	1		1	1
⑦利用したいが近くにない、どこにあるかわからない				6		4	
⑧利用したいが経済的負担が大きい							
⑨その他		⑦					①
⑦こどもが行きたがらない							
⑧こどもが行きたがらない							

問5 どのような場所であれば「子どもの居場所」を利用させたいか（複数回答）

1	こどもがいつでも行きたい時に行ける	9
2	こどもが一人で過ごせたり、何もせずのんびりできる	7
3	こどもがありのままでいられる、否定されない	12
4	こどもが好きなことをして自由に過ごせる	10
5	こどもが自分の意見や希望を受け入れてもらえる	13
6	こどもが新しいことを学べたり、やりたいことにチャレンジできる	15
7	こどもが悩みごとの相談にのってもらったり、一緒に遊んでくれる大人がいる	10
8	こどもがいろんな人と出会える、友人と一緒に過ごせる	14
9	こどもが勉強を教えてもらうことができる	8
10	無料又は低額で食事の提供を受けることができる	5
11	保護者が相談を受けることができる	5
12	費用負担がない	7
13	利用する必要性を感じない	0
14	その他	1

(3) アンケート結果

① アンケート（こども用）の結果

- ・「居場所の会」を利用しているこどもは（以下こどもと表記する）、小学生までが約80%を占めている。中学生や高校生は少ないが、19歳以上の参加者が想定以上に多かった。
- ・85%のこどもが自分のことが好き、またはどちらかといえば好きだと回答している。
- ・58.4%のこどもが、今住んでいる地域で暮らしたい、またはどちらかといえば暮らしたいと思っている。
- ・「居場所の会」については、「安心・安全な場」（3.7点）であり、「助けてほしいときに、助けてくれる人が」いて（3.6点）、「話を聞いてくれる」（3.6点）場であり、「自分を受け入れてくれる誰かがいる」（3.4点）場ではあるが、「お金がかからずに行ける」（2.8点）「自分と同じ境遇や立場の人がいる」（2.7点）「いつでも行ける（居場所に行く時間を選べる）」（2.7点）という点においては評価が低い。さらに、「居場所の会」では、「いろんな人と出会え」たり（3.5点）、「一緒に学ぶ人、学びをサポートしてくれる人」がいたりする（3.5点）反面、「未来や進路を考えるきっかけ」（2.4点）や「憧れを抱ける人」（2.1点）あるいは「自分の役割」（2.7点）という点については十分な場ではないことがわかる。
- ・「居場所の会」に行くようになって感じられる変化については、「それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った」（14人）「初めて知ったことや、興味をもったこと、好きになったことなどがあつた」（11人）「楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ち込みにくくなった」（10人）「自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった」（10人）というこどもが多かった。
- ・「居場所の会」でやってみたいことやこうだったらいいのにという要望には、「自分が知らないことや新しいことに取り組んでみたい」（11人）「自分が好きなことや、興味があることをしたい」（9人）「話し

たい時に、自分の話を聞いてほしい」(7人)「困っていることや悩みごとを話した時に、味方になってほしい」(5人)があげられた。

・家や学校以外に居場所があるこどもたちは79.2%で、20.8%のこどもたちが居場所はないと答えている。居場所があると答えたこどもたちがあげた居場所でも多かったのが「祖父母・親戚の家や友達の家」(17人)「公園や自然の中で遊べる場所」(7人)「地域の人が開いている遊びの場所(プレイパークなど)」(7人)であった。「オンライン空間(SNS、オンラインゲームなど)」(1人)は少なかった。居場所はないと答えたこどもは、理由をこたえることはできない子がほとんどであったが、「家が好きだから」と答えたこどもがいた。行ってみたい居場所には「静かな場所」「ぼーっとできる場所」と回答があった。

これらのことから「居場所の会」に参加しているこどもは小学生までのこどもが多く、彼らは自分のことがどちらかといえば好きなこどもたちであることがわかる。「居場所の会」は、こどもたちにとって、自分を守り、受け入れてくれる大人がいる安心・安全な場であり、そこで新しいことや人に出会い、人への信頼感をはぐくみ、精神的な落ち着きを取り戻していることがうかがえる。「居場所の会」で出会う人はスタッフだけではなく、参加者同士でもあり、異年齢の仲間と出会う場にもなっていることがわかる。こどもたちが「居場所の会」に期待することにも、新しいことや人に出会いたいことや、大人に自分を受け入れてもらいたいこと等が挙げられている。彼らのように、既存の学校にない、または馴染みにくいこどもたちの居場所に必要な要素として、①自分を守り、受け入れてくれる大人がいること、②一人一人のこどもに応じた対応がされることが十分保証されたうえで、無理のない範囲で、③新しい人・こと・ものとの出会いがあることが必要なのではないかと考えられる。また、こどもたちの居場所として、祖父母や友人の家の割合は大きいですが、同時に「地域の人が開いている遊びの場所(プレイパークなど)」が多く挙げられていることから、民間の居場所の役割が大きいことがうかがわれる。

③ アンケート(保護者用)の結果

- ・こどもが「居場所の会」に行くようになっておきた保護者の変化には、「時間的な余裕ができた」(10人)「精神的な負担、ストレスが減った」(10人)が挙げられた。
- ・こどもが「居場所の会」にいくようになって起こったこどもの変化には、「自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人があると感じるようになった」(10人)「初めて知ったことや、興味をもったこと、好きになったことなどがあった」(8人)「それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った」(8人)「楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ち込みにくくなった」(8人)が挙げられている。
- ・「居場所の会」に望むことは、「こどもが知らないこと、新しいことに取り組めるようにしてほしい」(18人)「こどもが好きなことや、興味があることが取り組めるようにしてほしい」(14人)「利用しやすくなってほしい(費用負担、開所時間、場所等)」(7人)が挙げられている。
- ・こどもが利用している居場所は「放課後児童クラブ」(13人)「こども食堂」(11人)「フリースクール等」(8人)が多く、その理由は「子どもを様々な人と関わる機会や体験をさせたい」(26人)「保護者が仕事で不在の時など、こどもが心配」(19人)が多く挙げられていた。
- ・居場所を利用しない理由として、「必要性を感じないから」(23人)「利用したいが近くにない、どこにあるかわからない」(11人)が挙げられている。特に、「無料学習支援」(11人)は利用したことがない人が多く、その理由には「利用したいが近くにない、どこにあるかわからない」(6人)となっていた。

・どのような「居場所」を利用させたいかという問いには、「こどもが新しいことを学べたり、やりたいことにチャレンジできる」(15人)「こどもがいろんな人と出会える、友人と一緒に過ごせる」(14人)「こどもが自分の意見や希望を受け入れてもらえる」(13人)「こどもがありのままでいられる、否定されない」(12人)「こどもが好きなことをして自由に過ごせる」(10人)「こどもが悩みごとの相談にのってもらったり、一緒に遊んでくれる大人がいる」(10人)が挙げられている。

これらのことから、「居場所の会」にこどもが参加するようになり、保護者に精神的、時間的余裕が生まれていることがわかる。このような保護者の変化は、こどもが、信頼できる人に出会ったり、新しいことに挑戦したりして、楽しんでいる様子を見たり感じたりすることに起因していると推察される。既存の学校に行かない、または馴染みにくいこどもが家庭でSNS中心の生活をしているのを目の当たりにする時間が長い保護者にとって、家庭外で、家族以外の人たちと普段しない活動をしている姿に、ほっとすることは十分に推察される。保護者は、安心・安全な場で、新しいことにこどもが関わるができる場が提供されることが望まれている。

3.既存の学校に行かない、または馴染みにくいこどもたちの「居場所」についての考察

こどもの「居場所」が社会に増えてきており、保護者もこどもも必要に応じて利用している様子がうかがえる。しかしながら、「無料学習支援」など、さまざまな「居場所」の情報が十分に行き届いているとはいえない状況があり、地域の居場所についての情報が、こどもや保護者に向けて発信されることが必要であろう。さらに、今後地域に、既存の学校に行かない、または馴染みにくいこどもたちの居場所を作っていく際には、まず、①いろいろな種類の活動をこどもたちに提案することによって、こどもたちが「出かけてもいいかな」と思える場を準備すること、そして、出かけてきてくれたこどもたちにとって、②精神的にも身体的にも安心・安全な場にすることが重要である。やっとの思いで家庭から出てきたこどもたちにさらにしんどいことが起こらないように配慮することはいうまでもない。そのうえで、②こどもが人・もの・コトと「その子なり」に関わっていくことを保証する場である必要がある。このことを保証するためには、スタッフの役割は重要である。スタッフがこどもたちの様子を見取り、一人一人のこどもに応じた支援が十分に行き届くような場にしていくことが重要であると考えられる。

II デコボコボン（既存の学校に馴染みにくいこどものソーシャルスキル・トレーニングの場）からみえてくる「既存の学校に行かない または馴染みにくいこどもの居場所」

1. 居場所支援の意義と目的

1-1. 現代における「居場所」の必要性

デコボコボンの居場所づくりは、ある一人の子どもとの出会いから始まった。不登校状態だった小学生が、フリースクールを経て中学校への進学を決意したとき、学校や家庭だけでなく、もうひとつ信頼できる大人や支援資源とつながっておくことが必要ではないかと考え、週に1回60分、その子だけのための時間枠を新たに設けたのが出発点である。

この時間枠では、「どんな授業があった?」「友達と何かあった?」といった問いを通じて、本人に中学校での生活を語ってもらい、生活を自分の言葉で整理したり、確認したりすることが目的とされた。だが、その語りは突然には始まらない。まず必要だったのは、「何を話しても否定されない」「何もしない時間があっても許される」そんな静けさや余白のある空間をつくることだった。

デコボコボンは当初から、「支援をする場所」として設計されたのではなく、子どもが安心して過ごせる場所を提供することが先にあった。子ども自身が「話してみようかな」「ちょっとやってみようかな」と思えたときに、初めて支援が動き出す。それが、デコボコボンの設計思想である。

この実践は、今の日本社会が抱える子ども・若者の課題とも重なる。不登校児童生徒の背景には、学校環境への不適応、学習のつまずき、対人関係の困難、家庭環境の問題などが複雑に絡んでいる。また、学校に通い続けている子どもたちの中にも、見えにくい孤立や強いストレスを抱えているケースは少なくない。こうした中で、家庭や学校とは異なる「第三の場所」、すなわち誰かとつながりながら、安心して過ごせる場が求められている。デコボコボンでは、そのニーズに応える形で、以下のような支援の軸を大切にしている。

- ・学びを止めない（学校に行けなくても学び続けられること）
- ・社会とのつながりを保つ（孤立しない関係の継続）
- ・困ったときに頼れる（相談できる安心の場）

しかしこれらの支援の前提には、まず子どもが「自分を整理し、確認できる静かな時間と空間」を持つことが何より重要だと、実践を通してわかってきた。デコボコボンは、「支援者の都合で子どもに何かをさせる場所」ではなく、「子どもが自分で動き出せるときまで待つ場所」として機能する。支援とは、子ども自身がそのタイミングで支援を受け取れるような関係性と空気を育てることから始まるのである。

1-2. 「日常の延長」としての居場所の重要性

子どもにとっての「居場所」とは何か、一般的には、「楽しく遊べる場所」「自由に過ごせる場所」「誰にも叱られない空間」など、比較的ハレの空間として居場所が語られることが多い。テーマパークのような非日常感や、娯楽要素の多いイベントを通じて「来てくれてありがとう」と歓迎される空気が、子どもにとっての安心感になるという考え方である。

しかし、デコボコボンが目指してきたのは、むしろケの空間、つまり日常の延長としての居場所である。日常とは、必ずしも楽しいことばかりではない。やる気が出ない日もあれば、何も話したくない日もある。それでも、人は生活を続けていく。子どもにとっても、そうした「特別なことはないけれど、なんとなく落ち着く」「別に何をしなくてもいいけれど、ここに来ていいと思える」空間が必要である。デコボコボンでは、「毎回なにかをしなければならない」「意味のある時間にしなければならない」といったプレッシャーを、極力与えないようにしている。空間の使い方を決めるのは、子ども自身である。そして、「今日は何も話したくない」と感じている子どもにも、何も強いられない時間があるということが、信頼形成

の大前提となっている。実際に、支援が軌道に乗っていくきっかけの多くは、「話したくなったから話す」「遊んでいたら自然と会話が生まれた」といった、準備されていないやりとりから始まっている。それは、日常の延長にあるささやかな関わりでありながら、子どもが「自分はこの場所で受け入れられている」という実感を得るための大きな一歩でもある。また、家庭内の多忙さや、地域コミュニティの希薄化、祖父母の役割の変化などにより、子どもを静かに見守る存在や場所は急速に減少している。昭和の時代であれば、縁側に座った祖父母が黙って孫を見守っていたような、「何かしてくれるわけではないけれど、そこにいるだけで安心できる大人」の存在が、社会の中に機能として組み込まれていた。デコボコポンは、そうした社会インフラとしての見守る居場所を、もう一度子どもの世界に取り戻す実践でもある。ボードゲームをしてもいいし、勉強してもいいし、猫と遊んでもいい。ただ、「何もしないで過ごすこともできる」ことが許される空間であるからこそ、子どもは次の一歩を、自分の意志で踏み出せるようになる。こうした日常の延長としての居場所のあり方が、支援の原点であり、子どもが「自分を取り戻す」ための最初のステップでもあることが分かってきた。

1-3. デコボコポンの居場所が持つ三つの機能

デコボコポンは、単なる「安全な空間の提供」にとどまらず、利用する子どもや若者の状態や背景に応じて、その機能を柔軟に変化・発展させてきた。活動を継続する中で見えてきたのは、この場所が主に以下の三つの機能を果たしているという実感である。

(1) 予防的支援：困る前から安心の場として関わる機能

最も大切な機能のひとつが、「まだ問題が表面化していない段階での関わり」である。これはいわば0次予防としての機能である。たとえば、ある小学生が中学校進学にあたり、「学校が合わなかったときに備えて、あらかじめ居場所とつながっておく」という目的でデコボコポンの利用を始めた。問題が起きてから動き出すのではなく、問題が起きても大丈夫だと思える逃げ道や避難先を事前に確保しておくという視点である。このように、「困ったときに、あそこに行けば何とかなる」という予感や経験をあらかじめ持っていることが、子どもの心理的な安定につながる。これは、支援という言葉が必要になる前段階での安心資源の提供であり、地域における重要なセーフティネット機能を果たしている。

(2) 生活・学習支援：学習や日常生活を通じて、社会性を回復する機能

学校に行けない、あるいは行かない選択をしている子どもたちにとって、学校でも家庭でもない第三の場が必要である。家庭は安心できる空間である一方、家族との関係性が常に安定しているとは限らない。学校に行かないことへの葛藤や、将来への不安を抱えている中で、「家では話せない」「家庭内での居場所がうまく確保できない」子どもは少なくない。デコボコポンは、そうした子どもたちにとっての「ちょうどいい距離感の大人と話せる場所」「何もしないでいても咎められない場所」「生徒や家族ではない個人として存在してもよい場所」として機能している。

この機能が強く働くことで、子どもは学校や家庭とは異なる視点から自分を見つめ直すことができ、また、他者との関係を築くことに再チャレンジできる機会が生まれる。

(3) 進路・社会再接続支援：進学や復学、社会との接続を支援する機能

もうひとつの大きな特徴は、「一度支援が終わったからといって、関係が終わるわけではない」という再訪可能性と調律の場としての機能である。たとえば、高校に進学した後に休学状態になった子が、ふとしたタイミングでデコボコポンに立ち寄り、「復学の作戦会議をしたい」と言ってきた事例がある。あるいは、大学に進学した子が、ゼミ発表前に「英語論文の読み方を教えてほしい」と再び訪れることもある。また、一人暮らしの若者が、希死念慮の高まりを感じて「どうしたらいいかわからない」とSNSを通じて連絡してきたケースもあった。デコボコポンは、そのような緊急時においても「とりあえず連絡しようと思

える場所」として機能している。

これらのケースに共通するのは、「定期的に通う」ことよりも、「必要なときに、また来られる」という安心感である。デコボコポンは、子どもたちや若者の再起動を支える場であり続けることを大切にしている。

1-4. デコボコポンの設計思想

デコボコポンの活動は、「支援を提供する場所」として始まったのではない。そもそもの出発点は、1人の子どもの「つながりを保っておきたい」という願いに応えるために作られた、週に1時間の時間枠だった。そこには、学習指導の計画も、プログラムの介入もなかった。ただ、「話ができるかもしれない」「誰かとつながっていただけるかもしれない」そんな可能性のための場所として用意されたものだった。デコボコポンが居場所として重視しているのは、「支援をする」ことよりも前に、子どもが自分自身の感覚を取り戻せる空間であることである。何かを始める前に「ちょっと静かで」「少し余白があって」「そこにいてもよいと思える場所」そのような空間を確保することが、第一に大切にされている。実際、決して「安心して過ごせる居場所がほしいから来た」わけではない。むしろ、多くの子どもは不登校やひきこもり状態にあり、外との接点を失いつつある中で、保護者が「このままではいけない」と思い立ち、半ば無理に連れてこられたという背景がある。つまり、最初から子ども自身に「ここに来たい」という動機があったわけではなく、「何をされるのだろうか」「早く帰りたい」といった警戒心を抱えながら初回の場面を迎えているケースが非常に多い。だからこそ、「何かをしてもよいし、しなくてもよい」という選択肢の幅が、安心感をもたらす。遊び、沈黙、つぶやき、観察、学びすべての行動が否定されない空間の中で、子どもは少しずつ自分のペースを取り戻していく。

デコボコポンでは、支援は「最初から提供するもの」ではなく、「関係性の中から立ち上がってくるもの」として位置づけられている。たとえば、信頼関係が築かれた後で初めて、学校での悩みを語ってくれたり、学習についてのサポートを求めたりする。そのとき初めて、学習支援やSSTなどの「支援」が機能し始める。このようなプロセスを重視するデコボコポンの居場所は、子どもが自分自身を再構成し、その確認を行える空間として設計されている。静けさと余白は、支援の手前にあるものであり、子どもらの支援の核になっている。

1-5. 関係づくりとしての「遊び」から始まる支援

デコボコポンの支援は、多くの場合、初回は子ども本人の意志というより、保護者の勧めや同行によって始まる。そのため、最初から積極的に関わろうとする子どもは少なく、場に対して警戒心を持っていることが多い。こうした子どもたちに対して、いきなり話を聞こうとしたり、目的を持たせようとしたりするのではなく、まずは「同じ場を共有すること」から関係づくりを始めることが大切になる。そこでデコボコポンでは、ボードゲームを媒介とした関わりを導入している。トランプやUNO、オセロなど、子どもたちにとって馴染みのある遊びをテーブルに用意し、「何する？」と自然に問いかけることで、評価や目的のないただ一緒にいる時間をつくり出している。

この遊びの時間は、「ここでは失敗しても責められない」「勝ち負けにこだわらなくていい」といった感覚を、子ども自身が少しずつ体験できる機会でもある。そこから「この空間では怒られない」「否定されない」といった安心感を、子ども自身が実感できるようになることが期待される。また、ボードゲームのやりとりを通して、ルールを理解度や他者との距離感、感情のコントロール、勝ち負けへの反応など、その子どもの特性や課題が自然と見えてくる。スタッフはこうしたやりとりから、その子に合わせた支援の方向性を見立てていく。デコボコポンでは、「遊び」が支援の準備ではなく、それ自体が関係づくりの核であり、支援の入口として重要な役割を果たしている。子どもが少しずつ空間に慣れ、遊びながら対話が生ま

れる中で、生活や学習、進路といった話題にも自然と広がっていく構造が、デコボコポンの支援の特徴である。

1-6. デコボコポンの意義と目的

子どもは日々、学校や家庭といった社会的枠組みの中で、常に何かを求められ、評価され、時に指導される立場に置かれている。特に不登校やひきこもり状態にある子ども・若者たちは、そのような枠組みから一度距離を置いたことで、改めて自分がどこに所属できるのか、誰と関われるのかを模索する状態にある。

こうした子どもたちにとって本当に必要なのは、「何かをがんばる場」や「特別な支援を受ける場所」ではなく、まずは自分の輪郭を取り戻すための、静かで干渉されない余白のある空間である。そして、そこに誰かがいて、必要なときには関わりを持ち、でも強くは踏み込まない、そうした繊細な距離感で保たれる空間こそが、「子どもにとっての居場所」としての本質であると、デコボコポンは考えている。

地域社会において、こうした場所の多くは失われつつある。かつては家庭内の祖父母や近所の人々、町内の「誰か」が見守りを担っていたが、核家族化と社会の分断が進む中で、その役割を果たす「第三の場所」が希少になっている。だからこそ、「何かをする場」ではなく、「何もしなくてもいられる場」を意識的に設けることには大きな意味がある。

そのうえで、本報告における「居場所活動」は、学校や家庭といった既存の枠組みにうまく適応できない子どもや若者に対して、「安心して過ごせる空間」「自分を整理し確認できる時間」「必要なときに頼れるつながり」を提供することを目的としている。中でも、デコボコポンの重視してきたのは、単なる楽しい場所や一時的に逃げ込む場所ではなく、「日常の延長として存在する、静かで余白のある空間」をあえて設けることだった。そこでは、「何もしなくても責められない」ことを出発点とし、子どもがまずは「ただいること」が許される。そのうえで、子ども自身が「自分の状態を確認し、少しだけ何かをやってみる」という内的な動機や選択が大切にされる構造を持っている。

こうした空間の中で、子どもたちはまず他者への警戒心を少しずつ緩めながら、信頼関係を築く手前の距離の取り方を学んでいく。そして、遊びや学習を媒介にした関わりの中で、

- 自分の生活を語ってみる
- わからないことを聞いてみる
- 「これがしたい」と伝えてみる

といった行動を重ねていくうちに、社会との接点を持ち直すための予行練習が始まっていく。このような実践を通じて、デコボコポンの居場所活動は次のような目的を持っている：

- 心理的安全性のある「もうひとつの空間」を提供すること
- 「自分を語ること」「整理すること」が可能になる環境をつくること
- 学習支援や対人スキル支援を通じて、小さな成功体験を積み重ねること
- 将来的に学校・社会との接点を柔軟に再構築できる調律の場となること

本活動は、単なる「避難所」や「支援機関」ではなく、子どもが自らのペースで社会と再びつながるための足場として、持続的に機能し続けることを目指している。

2. 居場所支援の実績と成果（2024 年度）

デコボコボンでは、子どもや若者が居場所を「そのときの課題を解決する場」としてだけではなく、「継続的に関わりながら、成長や変化を積み重ねていく場」として利用している。2024 年度の代表的なケースごとに、利用開始時の状況・経過・支援内容・変化と効果を報告する。

2-1.デコボコポンの実施状況

表 1. 2024 年 7 月から 2025 年 3 月までの利用数

実施月	実施回数	参加人数	～小学生	中学生	高校生～	大学生～
7月	2回	3			3	
8月	0回	0				
9月	2回	7	2	2	3	
10月	2回	9	4	1	3	1
11月	2回	7	4	1	2	
12月	2回	4	1	2	1	
1月	1回	2		1	1	
2月	2回	7	4	1	1	1
3月	2回	7	2	2	2	1
合計	15回	46				

2-2. ケースの分類と支援の特徴

2024 年度の支援実績では、利用者一人ひとりの状況や課題の特性に応じて、多様な支援が展開された。それらの支援内容は大きく以下の 3 つに分類することができる。

・ **A. 予防的支援**：まだ明確な問題が表面化する前の段階で、子ども自身が安心できる場所と関係性を確保することを目的とする支援。

・ **B. 生活・学習支援（SST）**：学習の継続支援や、対人関係のトレーニング（SST）などを通じて、生活のリズムや社会的スキルの獲得を図る支援。

・ **C. 進路・社会再接続支援**：進路に関する相談や、社会に出る段階での不安・困難への対応など、よりライフステージが進んだ若者への支援。

3-1. 0 次予防としての利用

問題が深刻化する前に、居場所を確保しておくことが心理的な安定につながることを確認された。例えば、小学生は、中学校進学に備えてデコボコポンを利用し始めた。進学後、学校が合わなかった場合に備え、あらかじめ「避難先」としての居場所を持つことで、万が一の際に孤立しない環境を作ることができた。また、普段から自習をしながらスタッフと話す時間を持つことで、学習習慣を維持しつつ、学校以外にも安心できる場があるという実感を得ていた。

また、週末に宿題が難しく不安を抱えた小学生が、デコボコポンでスタッフと一緒に宿題に取り組んだ事例もある。学校では相談できず、週明けの提出が心配になっていたが、デコボコポンで宿題を進められたことで「困ったときに相談できる場所がある」という成功体験を得た。その後も継続的に利用し、必要なときに助けを求めることができるという意識を持てるようになった。

3-2. SST（ソーシャルスキルトレーニング）の成果

対人関係に不安を持つ子どもが、SST を通じて少しずつ社会的スキルを獲得し、日常生活に活かせるようになった。人と話すことが苦手な高校生が、猫を介することでスタッフと自然に会話できるようになった事例がある。彼は、人との直接的な対話に緊張を感じるが、猫がいることで会話が始まりやすくなった。最初は短い受け答えのみだったが、徐々に自分から話題を提供したり、実習や学校のことを話したりできるようになった。実習で困ったことがあった際には、デコボコポンで相談しながら対応策を考え、自分なりの解決策を見つけることができた。

また、不登校状態にある中学生が、「30 分の学習＋ボードゲーム」という形でデコボコポンを利用する

中で、SST の効果が見られた。最初は学習そのものに抵抗があったが、「わからないところは飛ばしてよい」というルールのもとで学習を進めることで、少しずつ学習の負担が軽減された。さらに、ボードゲームを通じてスタッフとの対話が増え、学習計画を相談できるようになった。結果として、フリースクール用ノートや自習ノートを作成し、計画的に学習を進める習慣が身についた。

3-3. 進学・復学・社会適応支援の実績

進学・復学・社会適応において、デコボコボンが「調律の場」として機能し、自分の状態を整えるために活用されていることが確認された。ある高校生は、不登校状態から高校進学を果たしたものの、部活動や委員会活動への適応に苦しみ、結果として2学期から休学することになった。休学後、デコボコボンを訪れることで、自分の現状を整理し、どのように復学すべきかを考える場として活用した。スタッフとともに「復学の作戦会議」を行い、焦らずに段階的に学校生活へ戻る方法を検討した。

また、大学生の事例では、フリースクールを経て高校を卒業し、大学へ進学した学生が、単位不足による留年の危機に直面し、デコボコボンを訪れた。彼は普段は利用していなかったが、「なんとなくヤバいな」と感じたタイミングで訪れ、次の行動を考える場として活用した。スタッフと共に、講義担当の教授への相談メールを作成し、大学の学生相談室を利用する方法を学んだ。

さらに、一人暮らしを始めた若者が、強い希死念慮に襲われた際にデコボコボンへ連絡をした事例がある。彼は、状況をどうにかしたいと思いながらも、どこに相談すればよいのか分からなかった。デコボコボンのスタッフが迅速に対応し、行政や福祉支援事業者と連携して支援につなげた。この若者は、心理検査を受けた際や、仕事内容が変わったとき、職場で良いことがあったときなど、日常生活の中で新たな刺激を受けた際に「話せる場所がある」という安全性の担保を求めてデコボコボンを訪れている。人は、困ったときだけでなく、何か大きな変化があった際にも、自分の気持ちを整理したり、誰かに話したくなったりするものである。デコボコボンがこのような場として機能していることは、「困ったときに駆け込む場所」ではなく、「日常の変化を受け止める場」としての役割を果たしていることを示している。

3-4. 今後の課題と展望

デコボコボンの支援は、単なる一時的な介入ではなく、子どもたちや若者が社会との接点を持ち続けることを可能にする、長期的な居場所としての機能を持っている。特に今年度の利用実態を振り返ると、多くの利用者が「特別な支援を受ける場」としてではなく、「自分のペースで立ち寄り、必要なときに調律する場」としてデコボコボンを利用していることが明らかになった。デコボコボンが目指すのはそのような「非日常の楽しさ」ではなく、「日常の延長としての安定した空間」、つまり「ケ（普段の生活の延長）」としての居場所の提供である。この「ケ」としての居場所の重要性は、今年度の利用実態からも裏付けられる。利用者の多くは、明確な支援を求めて訪れるというよりも、「ちょっと話をしたい」「何となく立ち寄りたい」「普段の生活の中で気持ちを整理する場がほしい」という理由で訪れている。

たとえば、学校に通いながらも不安を抱えている子どもが、「何かあったときに相談できる場所」としてデコボコボンを認識し、いざ困ったときに駆け込むことができるという安心感を持てるようになった。また、一人暮らしをしている若者が、心理検査を受けた後や職場での変化があった際に、「ふと話したくなった」としてデコボコボンを訪れた事例もある。このことは、デコボコボンが「危機に陥ったときの緊急避難場所」ではなく、「普段の延長線上にある、安全に話せる場」として機能していることを示している。今後の課題としては、この「ケ」としての居場所を、より多くの子どもたちや若者にとってアクセスしやすいものにすることが求められる。特に、学校や家庭といった既存の枠組みの中でうまく適応できない子どもたちにとって、デコボコボンのような「もう一つの場所」があることを広く認知してもらう必要がある。また、「定期的に通う必要がある場」ではなく、「必要なときに利用できる場」であることを明確に伝

え、利用のハードルをさらに下げる取り組みも重要となる。

さらに、デコボコポンが果たしている「長期的なつながりの場」としての役割を、支援の枠組みの中でより明確に位置づけることも課題である。たとえば、進学・就職後の若者が「定期的なサポートを必要としないが、時折安心できる場として戻れる場所」としてデコボコポンを認識できるようにするための仕組みを整えることが重要となる。「ケ」としての居場所は、日常に埋もれがちでありながら、実は長期的な安定に最も寄与する要素である。今年度の利用実態からも、デコボコポンが提供するこの「ケの空間」が、子どもたちにとって持続可能な支えとなることが確認された。今後も、この長期的な安心感を維持しつつ、より多くの子どもや若者が「いつでも戻れる場所」として活用できるよう、支援の幅を広げていくことが求められる。

4. デコボコポンから見た、「子どもにとっての居場所」

デコボコポンを通じて、多くの子どもや若者がそれぞれの形で「居場所」としての機能を求め、利用していることが明らかになった。だが、「居場所」と一口に言っても、その意味や役割は様々ではない。単に「安心できる場所がある」ということにとどまらず、それぞれの子どもにとって異なる意味を持つ場になっている。

4-1. 「居場所」は一人ひとり異なる意味を持つ

デコボコポンを利用する子どもたちの中には、「話をするために来る子」もいれば、「何かに集中するために来る子」もいる。時には、「ただ静かに過ごしたいだけの子」もいる。ある子は、学校に適応しづらくなったときに頼れる保険としてデコボコポンを利用する。ある子は、「勉強はしないといけない」とわかりつつも、家では気が散るので学習の場として使う。またある子は、学校や家庭とは違う場所で、「特に目的はないけれど、なんとなく立ち寄り場所」として活用する。「居場所」という言葉が示すものは、単なる物理的な空間ではなく、「その子が安心して、自分のペースで存在できる場」であることが重要である。

4-2. 「居場所」は、安心して試行錯誤ができる場所である

デコボコポンに来る子どもたちの中には、「何かができるようになりたい」「今の状況を少し変えたい」と思っている子もいる。しかし、その過程は、常に成功ばかりではない。負ける経験が苦手な子が、ボードゲームを通して「負けても大丈夫」という感覚を身につける。学習が苦手な子が、「わからなかったところを飛ばしていい」と言われ、少しずつ学習の習慣を作る。人と話すことが苦手な子が、「まずは猫に話しかける」ことから始めて、徐々に人との会話ができるようになる。

どの子どもも、デコボコポンの中で、少しずつ「やってみよう」「挑戦してみよう」と思えるようになっていく。失敗しても怒られることはなく、「もう一度やってみてもいい」と思えることが、居場所の役割の一つであると考えられる。

4-3. 「居場所」は、日常の延長としてあるべきもの

一般的に、「居場所」というと、特別な体験ができる場、楽しいイベントがある場、というイメージを持たれることが多い。しかし、デコボコポンが提供する居場所は、「特別な何かがある場所」ではなく、「日常の延長として存在する場」である。「イベントがあるから行く」のではなく、「今日もなんとなく寄ってみよう」と思える場所。「何かをしなければならぬ」のではなく、「やりたいことがあるときにやる、ないときはただいだけでいい」場所。「何か特別な支援を受ける場」ではなく、「必要なときに必要な分だけ関わることができる」場所。このような場があることで、子どもたちは、学校や家庭という枠組みの中でうまく適応できなかったとしても、社会とのつながりを保ち続けることができる。

4-4. 「居場所」は、必要なきに帰れる場所である

デコボコポンを利用する子どもたちの中には、不定期に訪れる子が少なくない。

- ・休学後の復学を考えるために、しばらく利用する子。
- ・大学に進学したあと、単位不足で困ったときに助言を求めに来る子。
- ・一人暮らしを始めたものの、ふと不安になったときに、話をしに来る子。

このように、デコボコポンは「通い続けなければならない場所」ではなく、「必要なきに帰れる場所」として機能している。これが、デコボコポンが「居場所」として長く続いている理由の一つである。

4-5. まとめ：「居場所」は、その子がその子らしくいられる場所

デコボコポンの支援を通して見えてきたことは、「居場所」というのは、一律のものではなく、一人ひとりにとって異なる意味を持つものであるということだ。

ある子にとっては、「静かに過ごせる場所」であり、ある子にとっては「挑戦してみる場所」でもある。ただし、共通して言えるのは、どの子どもにとっても、「無理をせず、自然体でいられる場所」であるということだ。子どもたちは、成長の過程で様々な困難に直面する。そのとき、学校や家庭だけではない「第三の居場所」があることが、その子の選択肢を広げる助けになる。デコボコポンが果たす役割は、「特別なことをする場所」ではなく、「その子がその子らしくいられる場所」であり続けることである。

5. 子ども居場所活動における居場所観への提言

子ども・若者にとっての「居場所」とは、単に物理的な空間の提供にとどまらず、自分の存在が認められ、無理をしなくてもよいと感じられる場であるべきだということが、私たちの実践を通して明らかになってきた。その本質は、「ここにいてもよい」と自分で思えること。そして「何もしない時間」さえも許されること。そうした余白が、かえって子どもたちの内側にある動機や意思を目覚めさせ、「少しだけやってみる」「話してみる」「動いてみる」という選択を支える土壌になる。特に、不登校やひきこもり状態の子ども・若者に対する支援において、しばしば見落とされがちなのがこの「何もしないことを許される空間」の価値である。現行の支援制度は、多くの場合、「学習支援」や「就労支援」といった何かをすることを前提に設計されている。しかし、実際にはそこに至る前の段階、つまり「何かをしようと思えるまでの時間」を必要としている子どもが数多く存在する。

デコボコポンで出会ってきた子どもたちは、そのほとんどが信頼関係ゼロあるいはマイナスの状態から関わりを始めている。最初から「居場所を求めてやってきた」わけではなく、むしろ連れてこられた、仕方なく来たというケースが多い。それでも、関係性のなかで徐々に「いてもいい」と思える空間に変化していくプロセスこそが、支援の本質だと考えている。また、デコボコポンは「一度離れても、また戻って来られる場」としても機能している。これは「再訪可能性」とも言えるが、一時的に安定したとしても、その後また不安定になることがある子ども・若者にとって、この帰れる場所があるという前提は、人生の安心基盤のひとつになる。国として、こうした居場所の価値を正しく評価し、「支援の成果は何かを達成したことだけではなく、そこにいられるようになったこと自体にも意味がある」という視点を持つことが求められる。

【提言】

1. 「支援」以前の段階を保障する空間の整備を 静けさ、余白、安心感のある場にただ「いる」ことを許される場所は、子どもの内発的な回復力や行動意欲を支える土台となる。何かをする支援の前に、「ただいていい」と思える空間の意義を制度の中で明確に位置づけてほしい。
2. 「再訪可能性」を担保する仕組みの導入 一度関係が途切れても、また戻れる、つながり直せるという仕組みを公式に保障することで、長期的に子ども・若者の孤立を防ぐことができる。支援の出口ではなく、循環として位置づける発想が必要である。
3. 「居場所」の柔軟な運営と評価指標の見直し 居場所の効果や成果を、「就学率」や「就労率」などの定量的なアウトカムだけで測るのではなく、「本人がどれだけ自分らしくいられているか」「安心できる関係ができたか」といった質的な変化にも着目し、評価・支援を行ってほしい。
4. 地域社会における見守る場の再構築 祖父母や地域の大人が子どもを見守るという社会インフラが崩れた今、その代替となる居場所機能を公的に保障していくことが求められる。地域ごとに、子どもたちのための「何もしなくていいけれど、誰かがいる」空間が確保される仕組みを。

デコボコポンがこれまで行ってきたことは、小さな実践の積み重ねである。しかし、その中から浮かび上がった「子どもにとって本当に必要な支援のあり方」は、今後の子ども・若者支援政策において、確実に活かすべきヒントであると考えている。

子どもが子どもでいられる空間を、社会の中に。

それが、私たちの居場所観であり、未来への投資としての価値である。

Ⅲ 「ひとみ学舎の相談事業」の実践からみえてくる「既存の学校に行かない または馴染みにくいこどもの子育ての相談の場」

1. 「ひとみ学舎の相談事業」の運営について

(1) 目標：保護者、教員、専門機関職員等こどもに関わる人（以下大人と記す）が、自分の抱えている悩みを誰かと分かち合うことで、ホッとする。

大人が、自分自身の状態や思い、考えていることに気づき、整理できる。

大人が、子どもの自立ひいては親の自立に向けて自分がすべきことやできることについて自分で考えたり実行したりしようとする。

大人が、自分の悩みを誰かに明るく前向きに相談することができる。

(2) 対象者：既存の学校に行かない または馴染みにくいこどもの子育てのことで悩みを抱えている大人

(3) 方法：事前予約（メール・line・電話にて）後、ひとみ学舎（徳島県鳴門市大津町吉永 130-2）や依頼のあった場所にて面談、LINE や ZOOM による相談

(4) 工夫：①可能な限り時間を割いて、依頼のあった際に即時に相談に応じる

②こどもがよりよく育つために大人が支援できることを一緒に探すという視点で相談に乗るようになる。

(5) 実施状況

徳島県から委託を受けた期間（2024 年 7 月～2025 年 3 月）の「ひとみ学舎の相談事業」実施状況は次のとおりである。

実施月	相談人数	相談件数
7 月	5	10
8 月	5	36
9 月	11	38
10 月	7	33
11 月	10	43
12 月	8	40
1 月	8	35
2 月	6	40
3 月	8	23
合計	68	298

LINE や ZOOM での相談件数も含む

(6) 課題：・こどものことも保護者のこともよく理解しないと、「その家庭」の悩み事に対して的確に相談に乗ることが難しいので、一つの家庭にかかる時間が長くなり、長期にわたって伴走していくことになる。このため、多くの家庭の相談に乗ることが難しい。

2. 「ひとみ学舎の相談事業」アンケート結果

(1) アンケート（保護者用）集計結果

アンケート（保護者用）配布者数：10 名

アンケート（保護者用）回収者数：7 名

問 1 子育ての悩みはあるか

			割合 (%)
1	ある	7	100
2	ない	0	0.0
	合計	7	

問 2 子育ての悩みの内容（複数回答）

①	しつけの仕方		2
②	子どもの健康や発達について		6
③	子どもとの接し方		6
④	子どもの気持ち		3
⑤	子どもの友人関係について		0
⑥	子育て時間について		1
⑦	家族の協力が得られないことについて		0
⑧	家族の方針が合わないことについて		2
⑨	保護者同士の関係について		1
⑩	職場の理解について		0
⑪	経済的な厳しさについて		1
⑫	学校との関りについて		4
⑬	その他		0

問 3 子育ての悩みを相談するか

			割合 (%)
1	する	7	100.0
2	しない	0	0.0
	合計	7	

問 4 子育ての悩みを相談したことがある相手（複数回答）

①	配偶者	5
②	実父	1
③	実母	3
④	養父	0
⑤	義母	0
⑥	自分または配偶者の兄弟姉妹	2
⑦	自分または配偶者の友人	2
⑧	子育てしている仲間	5
⑨	近所の人	0
⑩	保育所・幼稚園・学校の先生	4
⑪	子育てサポーターなど子育て支援者	1
⑫	子育てサークルやNPOなどの民間団体	4
⑬	行政などの公的機関	1
⑭	インターネットの相談webサイト	0
⑮	こどもと話し合って解決する	2
⑯	その他	1

問5 ひとみ学舎の相談事業をどうして知ったか（複数回答）

①	友達の紹介	2
②	ホームページを見て	2
③	保育所・幼稚園・学校の先生の紹介	0
④	チラシを見て	0
⑤	Facebookを見て	1
⑥	家族の紹介	1
⑦	その他	2

問6 ひとみ学舎の相談事業で相談した内容（複数回答）

①	しつけの仕方	1
②	子どもの健康や発達について	6
③	子どもとの接し方	5
④	子どもの気持ち	4
⑤	子どもの友人関係について	1
⑥	子育て時間について	0
⑦	家族の協力が得られないことについて	0
⑧	家族の方針が合わないことについて	3
⑨	保護者同士の関係について	1
⑩	職場の理解について	0
⑪	経済的な厳しさについて	0
⑫	学校との関りについて	3
⑬	その他	1
	・ 配偶者の対応	

問7 ひとみ学舎の相談事業を今年度何回ぐらい受けましたか

A	100
B	10
C	20
D	50
E	20
F	20
G	10
合計	230
平均回数（回）	33

問8 ひとみ学舎の相談事業はどのくらい当てはまるか

有効回答数：7

集計方法 ①各項目を得点化する

とてもあてはまる・・・5点

だいたいあてはまる・・・4点

どちらともいえない・・・3点

あまりあてはまらない・・・2点

あてはまらない・・・1点

②合計点を算出する

③各項目の平均得点を算出する（有効回答数7）

			5点満点中
			平均得点
	合計		
①	知りたい情報が得られる	31	4.4
②	子どものことをよく考えてくれる	33	4.7
③	親（自分）のことをよく考えてくれる	33	4.7
④	自分の家庭あったアドバイスをしてくれる	31	4.4
⑤	困った時に素早く対応してくれる	31	4.4
⑥	継続して相談にのってくれる	33	4.7
⑦	経費が安い（無料）	33	4.7
⑧	気軽に相談できる	33	4.7
⑨	自宅から近い	21	3.0
⑩	いつでも相談に乗ってくれる	33	4.7

問9 ひとみ学舎の相談事業について（自由記述）

雰囲気	・相談しやすい
信頼	・子どもや親をととても大事にしてくれる
専門性	<ul style="list-style-type: none"> ・豊富な知識や経験からの助言 ・病院でいうと総合診療科 ・周囲にわかりづらい困難さをわかってくれる ・それぞれの特性に応じてその子にあうことを考えてくれる ・話を引き出してくれる。整理してくれる
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・親のこどもも理解が深まる ・子育てに前向きになれる
継続性	<ul style="list-style-type: none"> ・長く伴走してくれるので安心感がある ・継続的なかわり
即時性	<ul style="list-style-type: none"> ・いつでも相談できて安心する ・場所は遠いがLINEで相談に乗ってもらえる ・急な困りごとにもできる限り対応してくれる
対象	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもも親もひっくるめて相談に乗ってくれる ・こどもとうまくやってもらえる・相談にも乗ってもらえる ・個々の子どもの状態にあったフォローをしてもらえる ・個々の保護者にあった個別のフォロー

問10 相談の場に望むこと（自由記述）

場づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・相談しやすい雰囲気 ・気軽さ ・気軽に集まれる場所に相談できる人が常駐している ・こどもが遊べるスペースがある ・保育スペースが同じ施設内にある ・子育てに悩み、学びたい保護者、教育に携わる人が集う ・作業をしたり体を動かしたりしながらリラックスして相談
システム	<ul style="list-style-type: none"> ・素早さ ・長期にわたって継続して同じ人と相談できる ・相談料が安い ・土日に相談できる ・LINE等で隙間時間に相談できる ・複数名で構成されている ・大人もこどもも相談可 ・多職種で構成し、必要があれば必要なところへつなぐ ・自助、共助的な役割を持つ ・子育ての講座を行う。交流あり。相談したいときはできる ・こどもと共に過ごす→大人たちがこどもたちの様子をシェア
専門性	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもや親の気持ちを理解してくれる ・親に子育ての助言ができる ・こどものことをよく理解していて、こどもが信頼している人 ・こどもと親の間に入れる人 ・カウンセリングマインドのある人

(2) アンケート結果

- ・子育ての悩みがある保護者は 100%だった。
- ・子育ての悩みとして多く挙げられたのが、「子どもの健康や発達について」(6人)「子どもとの接し方について」(6人)「学校との関りについて」(4人)だった。
- ・子育てについては 100%の人が誰かに相談している、または相談したことがあった。
- ・相談相手として挙げられたのは「配偶者」(5人)や「子育てしている仲間」(5人)が最も多く、次いで「保育所・幼稚園・学校の先生」(4人)「子育てサークルや NPO などの民間団体」(4人)が挙げられた。
- ・「ひとみ学舎の相談事業」で相談した内容は、「子どもの健康や発達について」(6人)「子どもとの接し方について」(5人)「子どもの気持ち」(4人)「家族の方針が合わないことについて」(3人)「学校との関りについて」(3人)となっている。
- ・アンケートに回答した保護者の相談平均回数は 33 回で、少ない人で 10 回、多い人は 100 回に及ぶ。
- ・「ひとみ学舎の相談事業」はアンケートで尋ねている内容については、おおむね満足されていることがわかる。特に「こどものことをよく考えてくれる」「親(自分)のことをよく考えてくれる」「継続して相談にのってくれる」「経費が安い(無料)」「気軽に相談できる」「いつでも相談に乗ってくれる」という項目において得点が高かった(4.7 点)。一方「自宅から近い」(3.0 点)という項目は得点が低い。
- ・「ひとみ学舎の相談事業」についての記述からは、①相談しやすい雰囲気、②こどもを大事にしてくれることへの信頼、③相談内容に対する専門性の高さ、④子育てに関する前向きな内容、⑤相談の継続性、⑥相談の即時性、⑦個々のこどもや親に対する個別性の高さについて評価されていることがうかがわれた。
- ・「相談事業」に期待することの記述からは、①雰囲気や施設、相談方法など相談しやすい場づくり、②利用しやすく、複数人や多職種で構成される等こどもの課題解決に結びつきやすいシステム、③相談員の専門性の高さが求められていることがうかがわれた。

3 「既存の学校に行かない または馴染みにくいこどもの子育ての相談の場」についての考察

これらのことから、既存の学校に行かない、または馴染みにくいこどもの保護者は、全員子育ての悩みを抱えており、身近な誰かに相談している、またはしようとしていた。このことから、保護者にとって、我が子が、既存の学校に行かないまたは馴染みにくいことが、大きな悩みであることが容易に推測される。保護者が悩んでいる内容は、相談したい内容という問いにあらわれており、それは、こどもの健康や発達、こどもへの接し方、学校とのかかわりなど、我が子について現状の自分(保護者)ではどうしていいか分からない心配な内容である。相談相手は、配偶者や子育て仲間、あるいは先生など、我が子に接し、我が子を理解していると思われる人たちである。これらのことから、保護者が求めている「相談」の場とは、「子育て」の一般論をアドバイスしてくれる場ではなく、目の前の「我が子」について悩んでいる事柄に対して、「我が子」と自分(保護者)についてのアドバイスをしてくれる場を求めているのである。既存の学校に行かない または馴染みにくいこどもの保護者にとって「子育て」は喫緊の課題であり、切羽詰まっている大変大きな問題となっていることがうかがえる。

しかしながら、「子育て」は短期間で終わるものではない。「ひとみ学舎の相談事業」に一人が平均 33 回相談していることや多い人で 100 回を超えていること、あるいは「ひとみ学舎の相談事業」や「相談事業」についての記述から、継続した一貫性のある指導を求めていることがわかる。また、信頼関係のある専門性の高い個人やチーム、さらに、様々な方向から解決策を導いたり、必要があればスピーディーに

専門機関につながれたりするように複数の人や多職種職種の人でチームが構成されることができるよう、継続して総合的に支援が受けられる相談の場があれば、安心して保護者は相談を受けることができるように思われる。

また、保護者アンケートで相談の場に望むこととして、「子育てに悩み、学びたい保護者、教育に携わる人が集う」場であること、「相談の場で自助、共助的な役割を持つ」、「子育ての講座を行う。交流あり。相談したいときはできる」、「こどもと共に過ごす→大人たちがこどもたちの様子をシェア」が挙げられていることから、保護者の望む「相談」の場は、単に悩みを聞いてもらったり、アドバイスをもらったりする場にとどまらず、子育てについて学んだり、考えたり、話し合ったりする保護者の仲間づくりの場、すなわち「保護者の居場所」という側面もあることがうかがわれる。子育てが、毎日の生活であり、先の見えない不確定な行為であることを考えると保護者が「子育てに関する居場所」を求めることは当然のことであり、このよう場を整備していくことは重要なことであろうと考えられる。

『こどもの居場所づくり』 支援体制強化事業

特定非営利活動法人チルドリン





事業の概要



事業の目的

本事業は、貧困や児童虐待、不登校など複合化する課題に対応するため、「こどもの居場所」を核として、多様なアプローチによる支援をモデル的に実施し、支援ニーズの把握や課題を検証するとともに、取組の横展開により県内の「こどもの居場所」の質的向上を図ることを目的とする。



調査対象

6歳から30歳までのこどもとその保護者



調査実施日時

2024年8月8日 第1,2回目 子ども調査、保護者調査 実施

2024年8月16日 第3,4回目 子ども調査、保護者調査 実施

2024年12月21日 第5,6回目 子ども調査、保護者調査 実施



総回答者数

子ども31人、保護者22人

ニーズ調査結果

- 徳島県指定ニーズ調査

県指定調査はアンケートまとめの設計を内部で行い、共通項目に抽出して集計をしています。

- 独自調査(Web)

目次



夏休みお仕事をしよう

第1,2回目

実施概要

運営上の工夫及び課題

子どもアンケート調査結果

保護者アンケート調査結果

夏休みお仕事をしよう

第3,4回目

実施概要

運営上の工夫及び課題

子どもアンケート調査結果

保護者アンケート調査結果

クリスマス家族で作ろう！

第5,6回目

実施概要

運営上の工夫及び課題

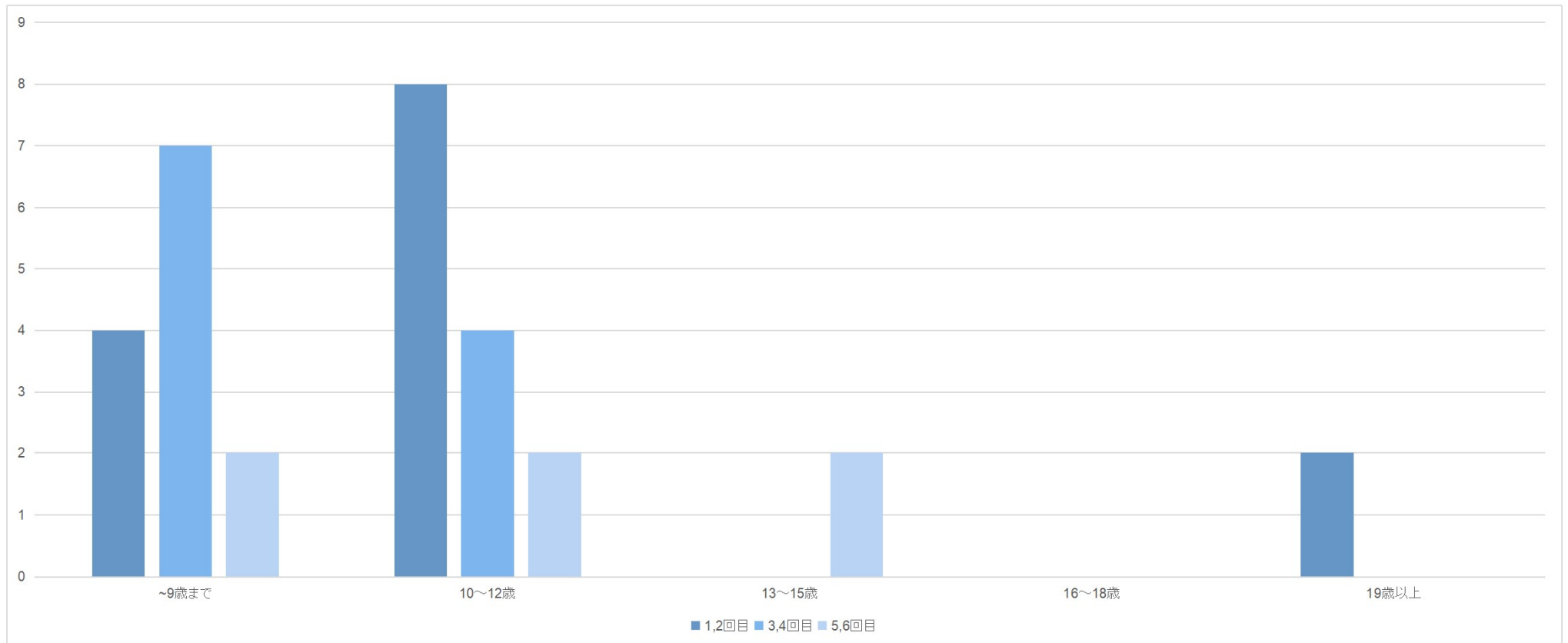
子どもアンケート調査結果

保護者アンケート調査結果

○WEBアンケート（独自調査）

○把握した課題に係る分析・考察等（検討の経過等含む）

ニーズ調査回答年齢



本回答では~9歳まで、10~12歳までの子どもたちの回答を主としている。

夏休みお仕事を知ろう

2024年 8月8日木曜日

第1回目 10時～11時

第2回目 13時30分～14時30分

アンケート回収数 子ども 14枚
保護者 4枚



運営上の工夫及び課題

夏休みの子どもたちの居場所のひとつ、「児童館」での開催を行いました。

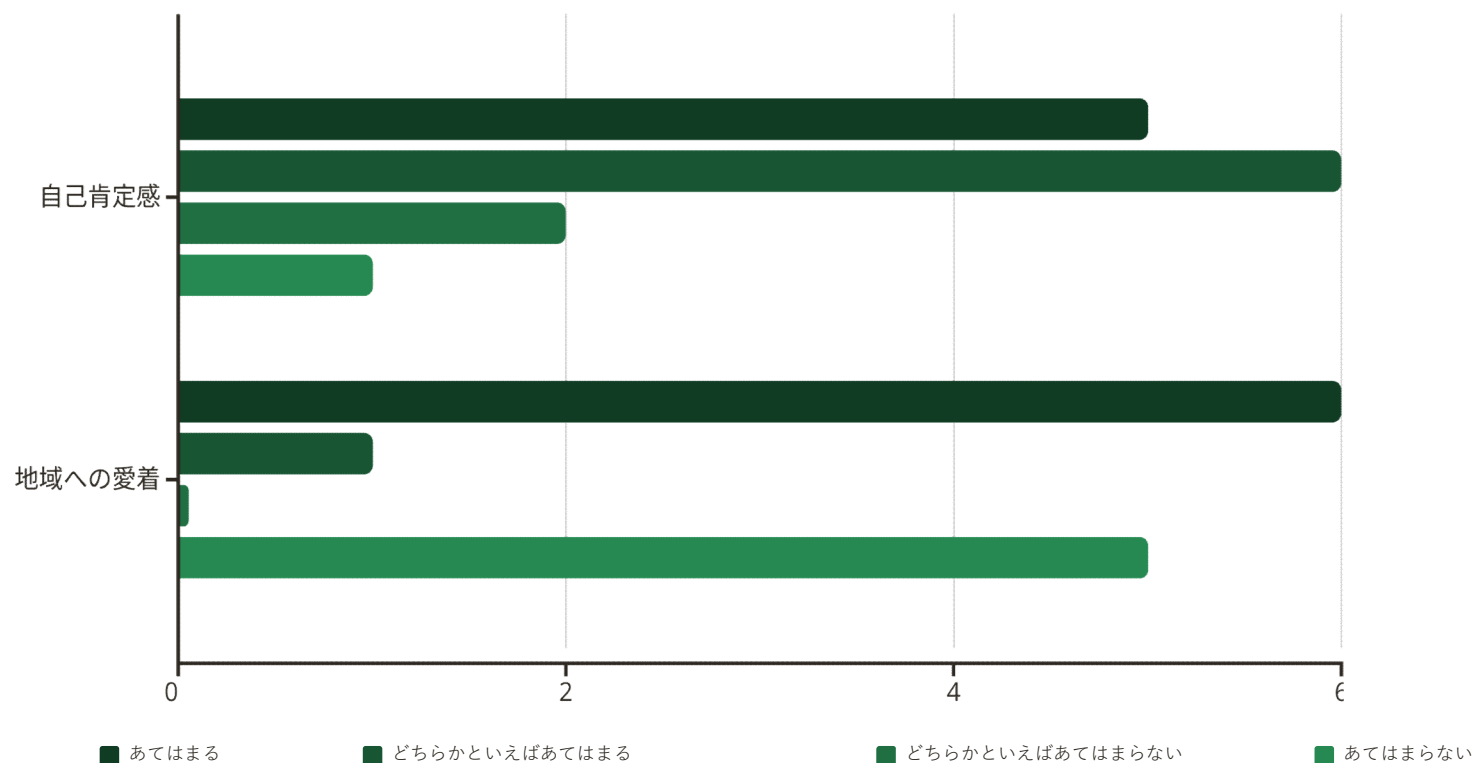
お盆を前に、両親ともに、働きに行っている子どもたちが集まりました。イベント内容は、子どもたちの将来のお仕事が夢になるよう、徳島県出身のバイクのプロライダーに講師をお願いし、どのような経緯で、プロライダーになったのか、子どもの頃のお話、また、今のトレーニングやレースのお話してもらいました。参加者は、男子女子問わず。興味をもっていました。課題としては、周知のために、夏休み前に行うことができれば、より多くの子どもたちに、お話を聞いてもらえました。



第1, 2回目調査

こどもの自己肯定感と地域への愛着

アンケート調査では、こどもたちの自己肯定感と将来の居住意向について質問しました。以下のグラフは回答結果をまとめたものです。



こどもが求める居場所の特徴

居たい 14項目 149件

くつろげる場所・居ただけ居れるなど居場所に対して安心感を求める回答が多くみられました。

行きたい 8項目 80件

自分を受け入れてくれる・身近にあり、誰でも行けるような敷居の低さ・自分と同じような子たちが集う場所がいいとの回答も。

やってみたい 9項目 83件

学習や体験機会があることを期待していることが回答で多く見受けられています。



居場所での影響

安心感
心理的安全性
20件
楽しいと感じる時間や気持ちが落ち込みにくくなった・自分の気持ちを伝えてもいいと思える・自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった等

変化なし・その他 4件
居場所に通い始めて変化がないという回答もあった



交流の広がり

社会性

19件

それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った・以前より人と関わるのが好きになった・以前より誰か困っている人がいる時サポートするようになった

自己成長

8件

以前より自分がやろうと決めたことをできるようになった

学びに対する姿勢

8件

初めて知ったことや、興味をもったこと好きになったことなどがあった

10

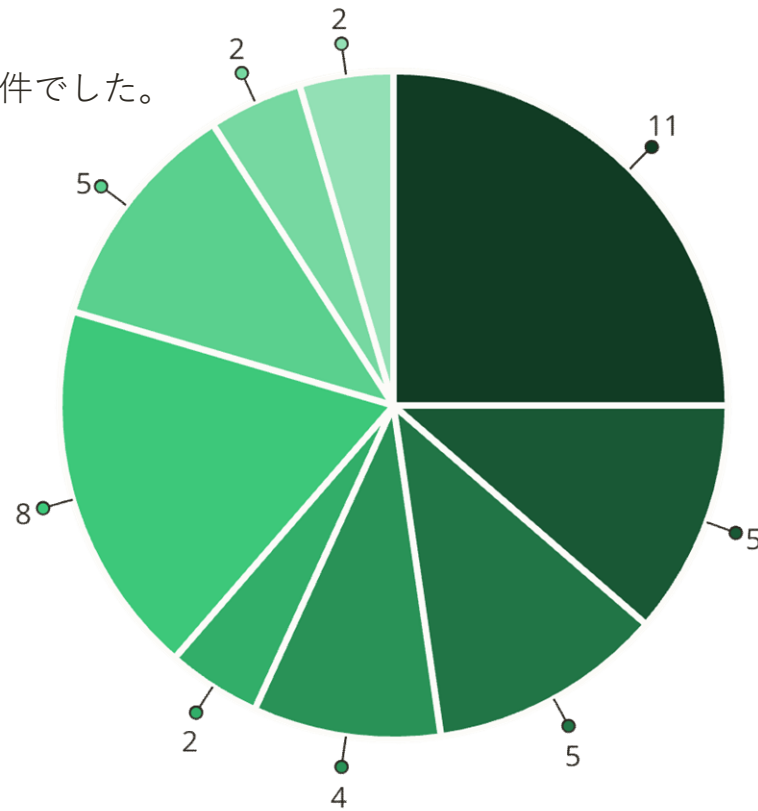
居場所に望むこと



学びの提供を多く求める回答や・大人との関わり方に多く要望がありました。

居場所の種類

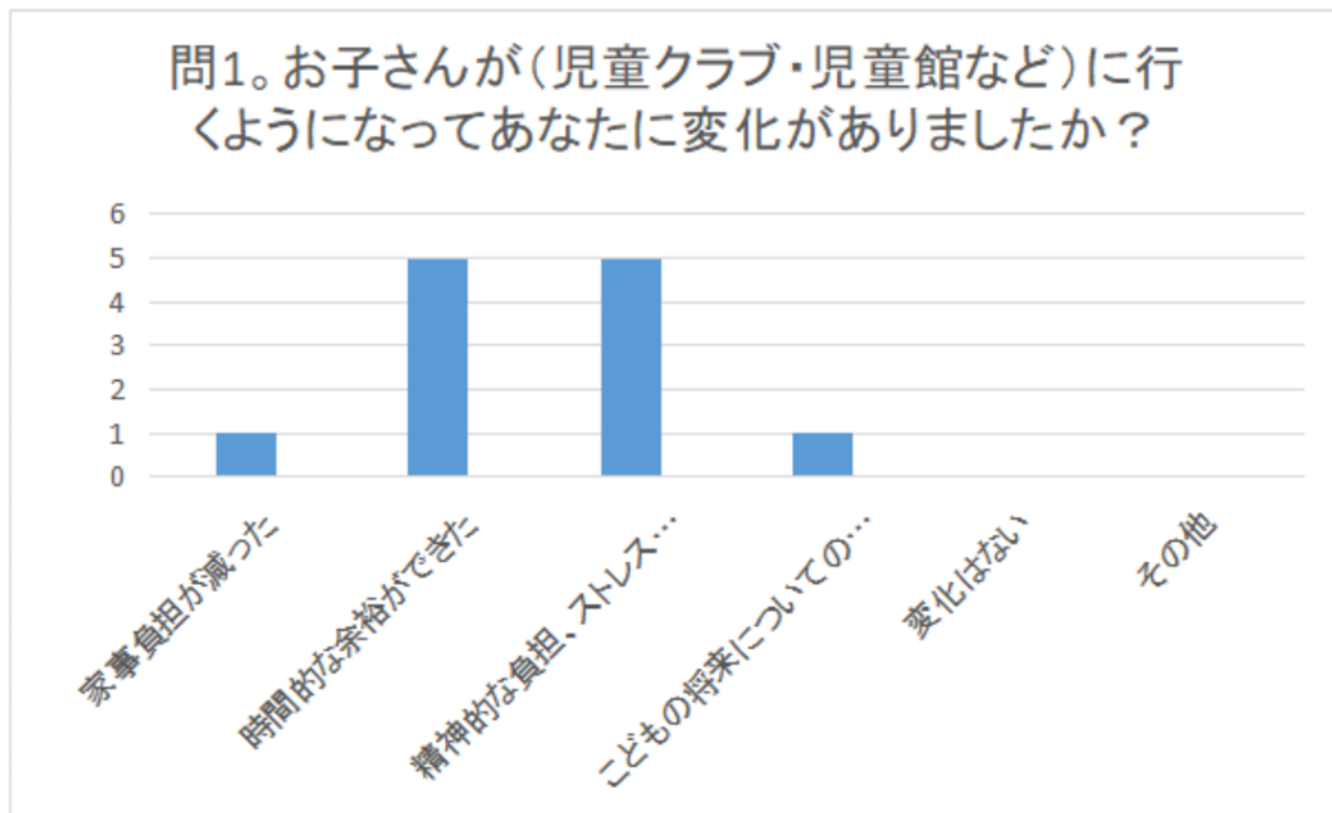
居場所があるとの回答は13件・ないが1件でした。



■ 児童クラブや習い事・塾など
■ 祖父母・親戚・友達の家
■ 学校の教室以外の場所
■ 地域の公共施設(図書館・児童館など)
■ プレイパークなど
■ 公園など自然の中で遊べる場所
■ ショッピングセンターや飲食店
■ 悩みごとなどを聞い
てくれる場所
■ オンライン空間

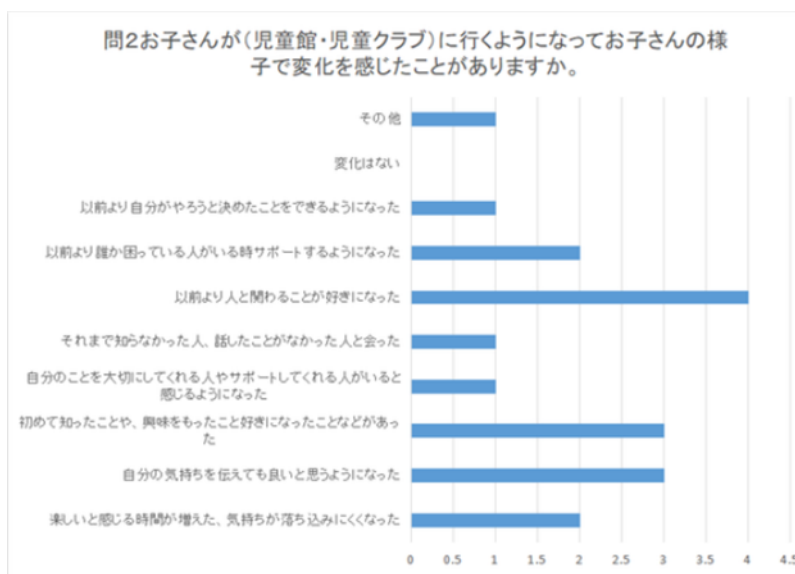
児童クラブや習い事・塾が居場所だと感じる回答・公園などの場所を居場所だと感じる回答が多くみられました。

第1, 2回 保護者対象アンケート調査結果



時間的な余裕・精神的な負担やストレスが低減されたという回答が多くみられました。

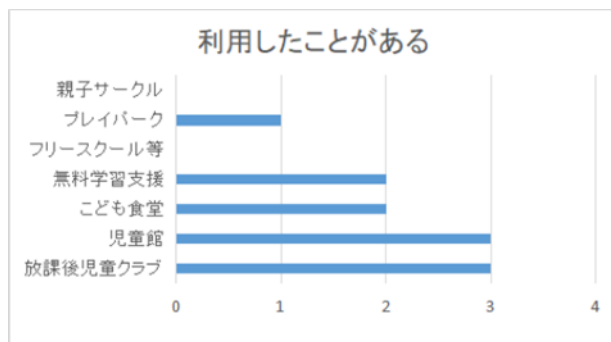
児童館に行くようになってからの変化 と今後期待すること



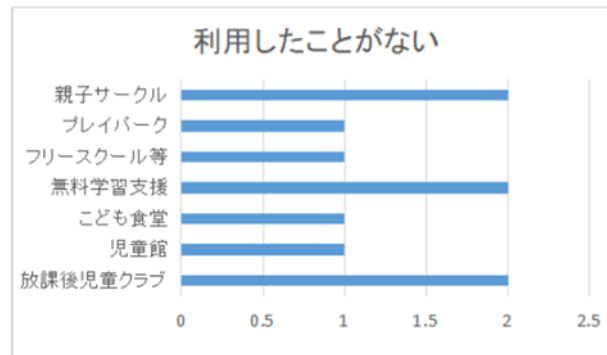
初めて知ったことや、興味をもったこと好きになったことなどがあつた の回答が一番多くみられた

保護者としては、子どもの新しい知見が広がることを期待している声が上がっている。

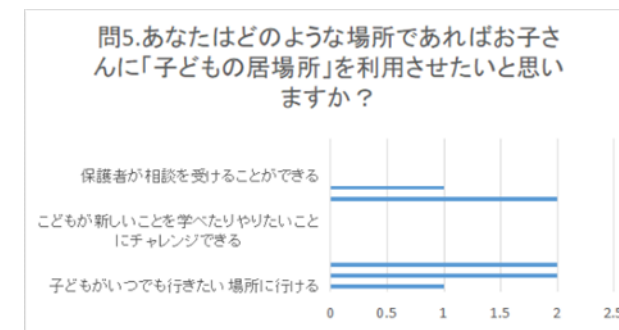
こどもの居場所について



保護者が仕事で不在の時などお子さんだけでは心配だから
値段が安い・または無料であることが利用の主な理由となっている



利用しない理由として
必要だと感じないとの回答が多く、
あまり認知されていないことが伺える



子どもがいつでも行けるなど自由度が高い場所が求められている



第3, 4回目

夏休み お仕事を知ろう

2024年8月16日

第3回目 10時~11時

第4回目 13時30分~14時30分

沖洲児童館

アンケート回収数

子ども 11枚

保護者 8枚



運営上の工夫及び課題

3回目

夏休みの子どもたちの居場所のひとつ「児童館」での開催を行いました。お盆を前に、両親ともに、働きに行っている子どもたちと、子どもたちに着物を着せてみたいという保護者の方に、集まってもらいました。子どもたちには、アニメ「鬼滅の刃」のお話をして、着物のお話に入っていました。そして、着物の関連のお仕事について、お話をし、子どもたちに、着物の着てもらいました。課題としては、男の子が、あまり着物を着なかったもので、その工夫を考えていきたいと思います。

4回目

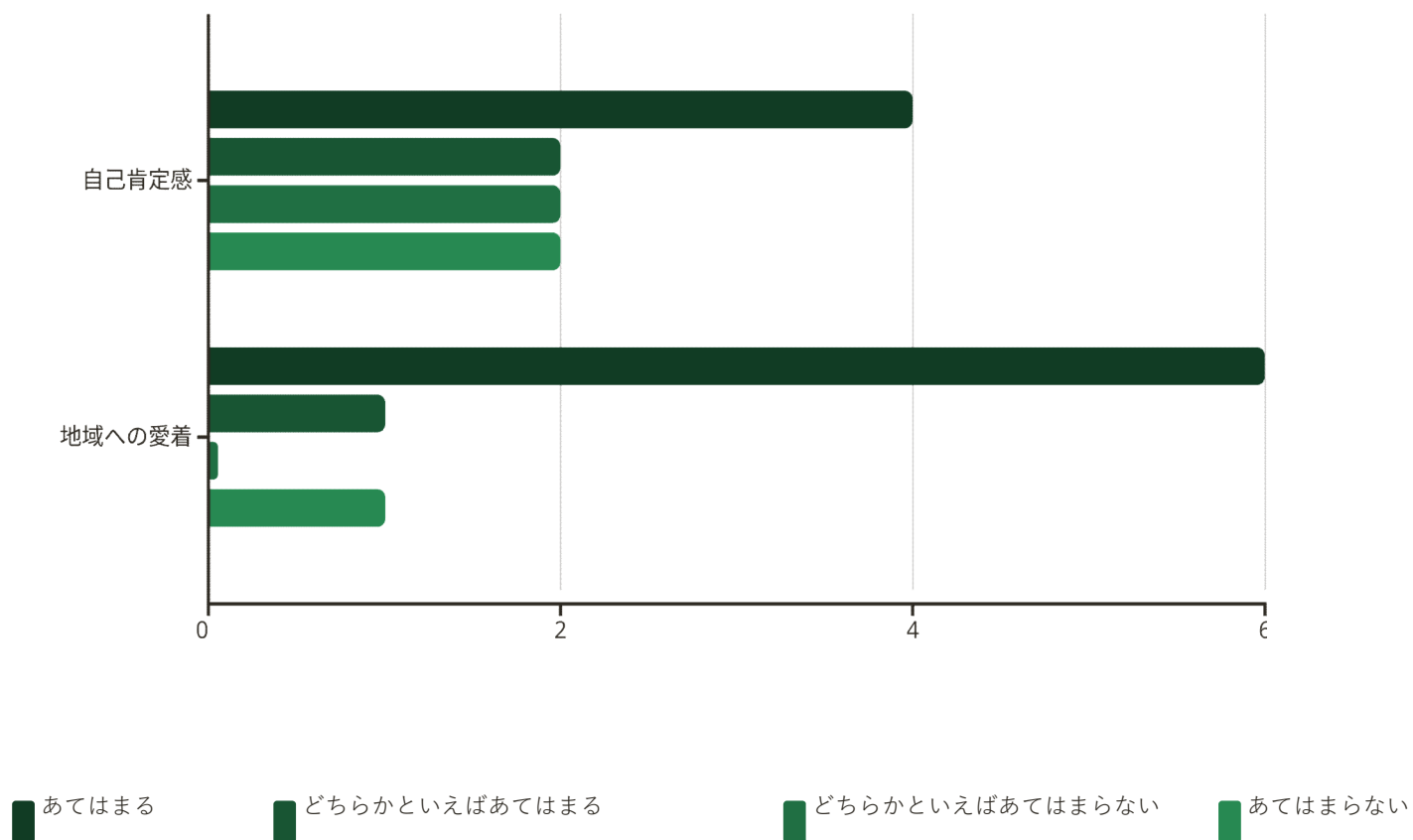
夏休みの子どもたちの居場所のひとつ「児童館」での開催を行いました。お盆を前に、両親ともに、働きに行っている子どもたちと、保護者でも興味のある方が参加しました。徳島県警本部より、お仕事の出前講座をお願いしました。クイズ形式で、警察のお仕事を知ることができました。たくさんの保護者と子どもたちが参加してくれました。課題としては、とてもよい内容だったので、これから児童館で、定期的に、このような取組みをレギュラー化できれば、地域の学びの場になると感じました。



第3, 4回目調査

こどもの自己肯定感と地域への愛着

アンケート調査では、こどもたちの自己肯定感と将来の居住意向について質問しました。以下のグラフは回答結果をまとめたものです。



こどもが求める居場所の特徴

居たい 14項目 101件

居ただけ居られる・助けてほしい時に助けてくれる人がいるなど居場所に対して安心感を求める回答が多くみられました。

行きたい 8項目 48件

自分を受け入れてくれる誰かがいる・いつでも行ける・自分と同じ境遇や立場の人がいるなどの回答が多くみられました

やってみたい 9項目 47件

色々な体験機会があること・学びのサポートがあるなどを期待していることが回答で多く見受けられています。



居場所での影響

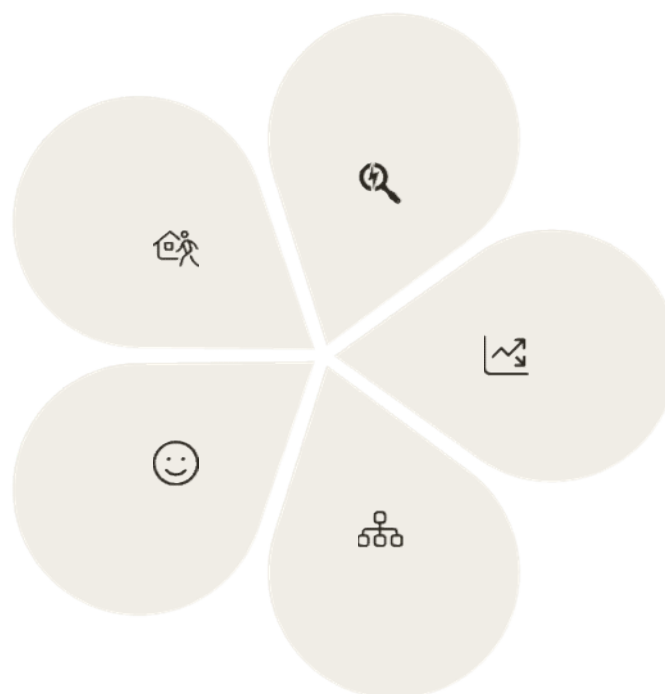
安心感 心理的安全性

14件

楽しいと感じる時間や気持ちが落ち込みにくくなった・自分の気持ちを伝えてもいいと思える・自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった等

変化なし・その他 5件

居場所に通い始めて変化がないという回答もあった



交流の広がり

社会性

12件

それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った・以前より人と関わるのが好きになった・以前より誰か困っている人がいる時サポートするようになった

自己成長

6件

以前より自分がやろうと決めたことをできるようになった

学びに対する姿勢 6件

初めて知ったことや、興味をもったこと好きになったことなどがあった

20

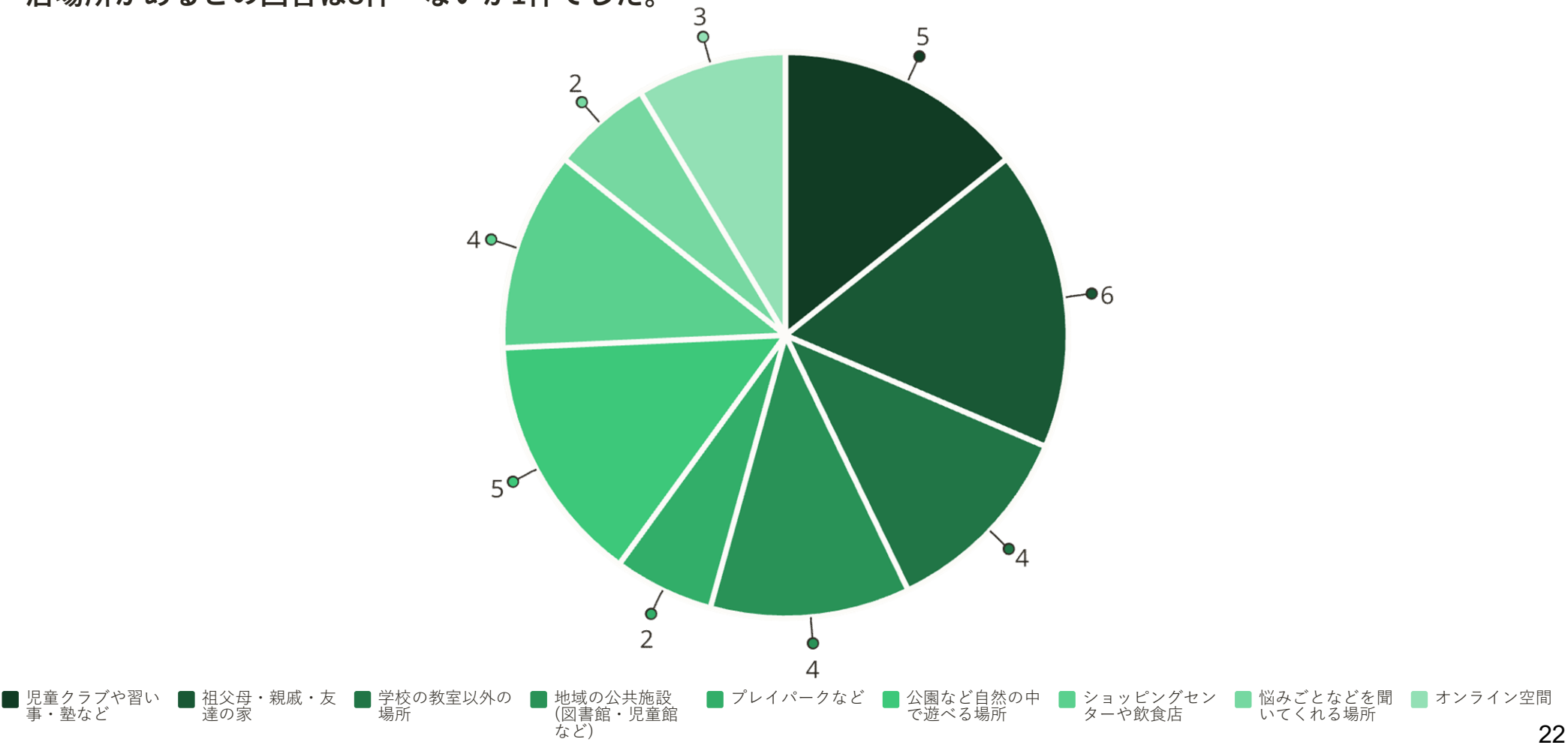
居場所に望むこと



学びの提供を多く求める回答や・大人との関わり方(傾聴してほしいこと等)に多く要望がありました。

居場所の種類

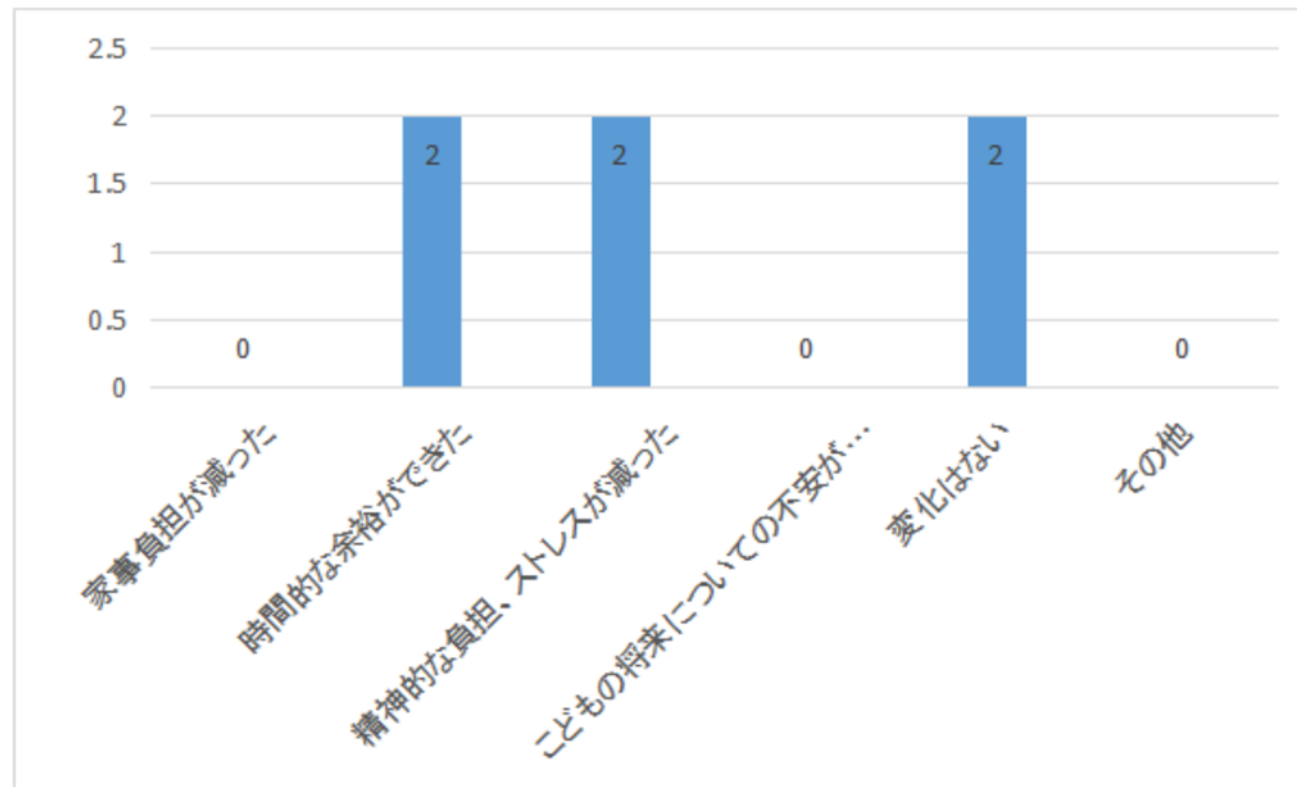
居場所があるとの回答は8件・ないが1件でした。



祖父母・親戚・友達の家が自分の居場所だと感じる回答・児童クラブや公園などの場所を居場所だと感じる回答が多くみられました。

第3,4回 保護者対象アンケート調査結果

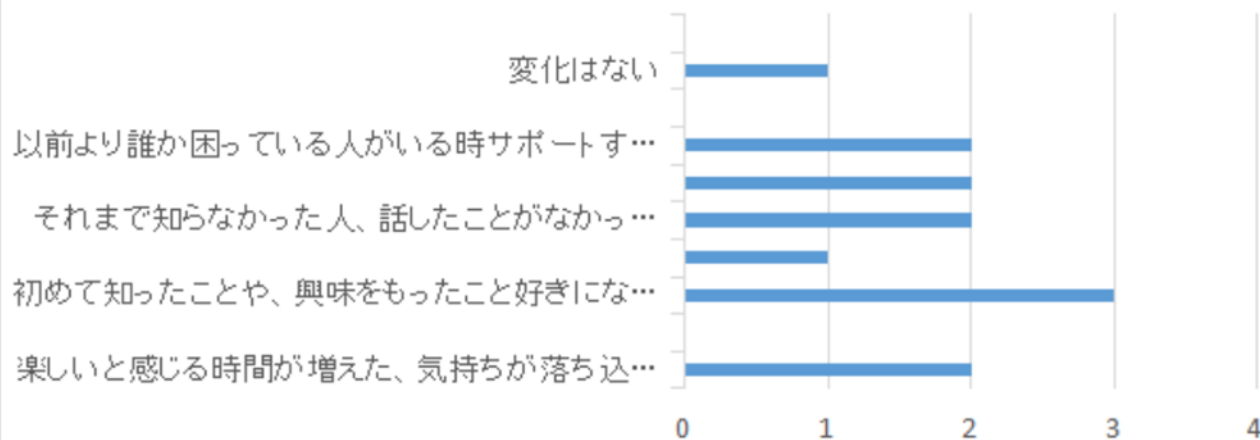
問1。お子さんが（児童館）に行くようになってあなたに変化がありましたか？



時間的な余裕・精神的な余裕が増えたとの回答が同回答数だった。

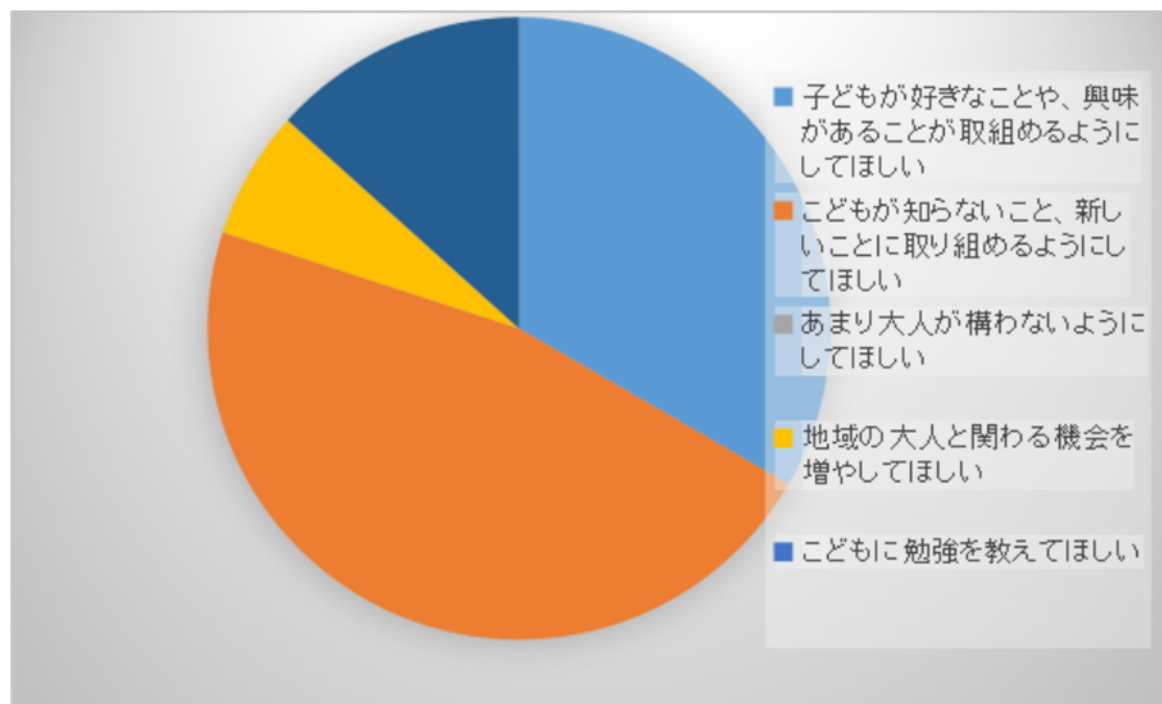
児童館に行きだしての変化など

問2お子さんが児童館に行くようになってお子さんの様子で変化を感じたことがありますか。



初めて知ったことや、興味を持ったこと好きになったことがあったの項目が一番多かった。

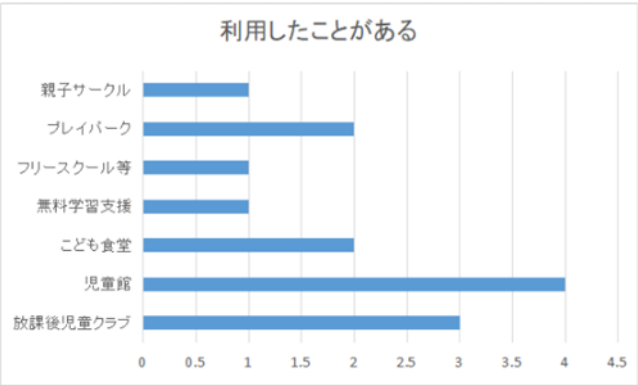
問3. あなたが（児童館・児童クラブなど）に望むことはありますか。



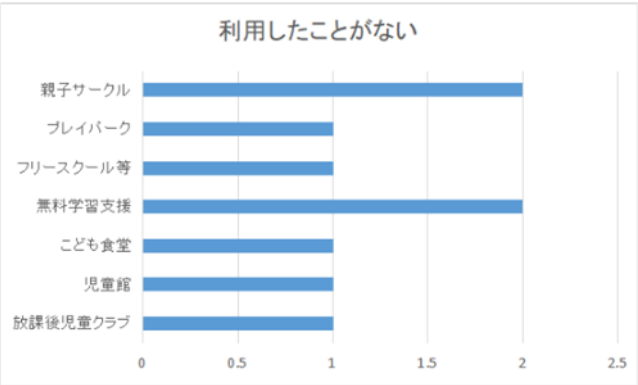
子どもが知らないことや、新しいことに取り組めるようにしてほしいの回答が一番多く、次いで好きなことや興味があることが取り組めるようにしてほしいの回答が続いている。

問4 あなたのご家庭では以下の子どもの居場所を利用したことがありますか。またその利用の有無についてその理由を教えてください。

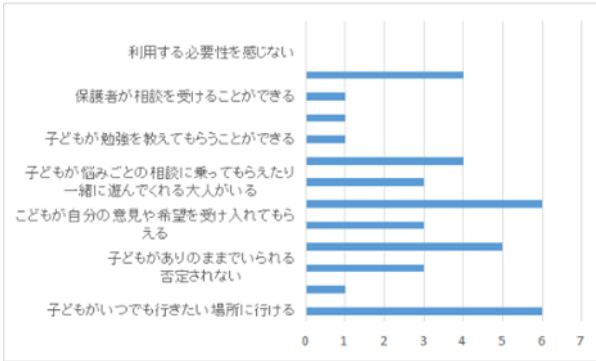
問5.あなたはどのような場所であればお子さんに「子どもの居場所」を利用させたいと思いますか？



利用しやすいと、児童館が一番多く、児童クラブ、プレイパークなどが次いで多い。
理由としては、留守中の間心配だからという回答が多く見られた。



理由としてどのようなところかわからない等認知度の低さが伺える
その他利用したことがない場所と理由については未回答。



子どもの意見を尊重し、ありのままを受け止めてくれる居場所を望む親が多い

**クリスマスを
家族で作ろう！**

**12月21日 土曜日 10時～13時
13時～15時**

新鮮な産直お野菜を選んでお買い物して、
クリスマスリースサラダの盛り付け、マイ
オープンサンドを自分で作って食べよう。

買ったお野菜は本番のクリスマ
スにお家で作りましょう。
クリスマスリースサラダのレシ
ピ、オープンサンド
のレシピ付きです。

**参加費 大人 1000円
子ども 無料**

**場所 みはらしの丘
あいさい広場 一生大吉前**

主催：子どもたちにホンモノの食と体験を届ける会【ルリアン】
本イベントは【徳島県「こどもの居場所」支援ニーズ調査事業に係
る委託事業】の一部です。



クリスマスを家族で 作ろう！

2024年12月21日

第5回目 10時～13時

第6回目 13時～15時

アンケート回収数 子ども 6枚

保護者 10枚

運営上の工夫及び課題

5,6回目

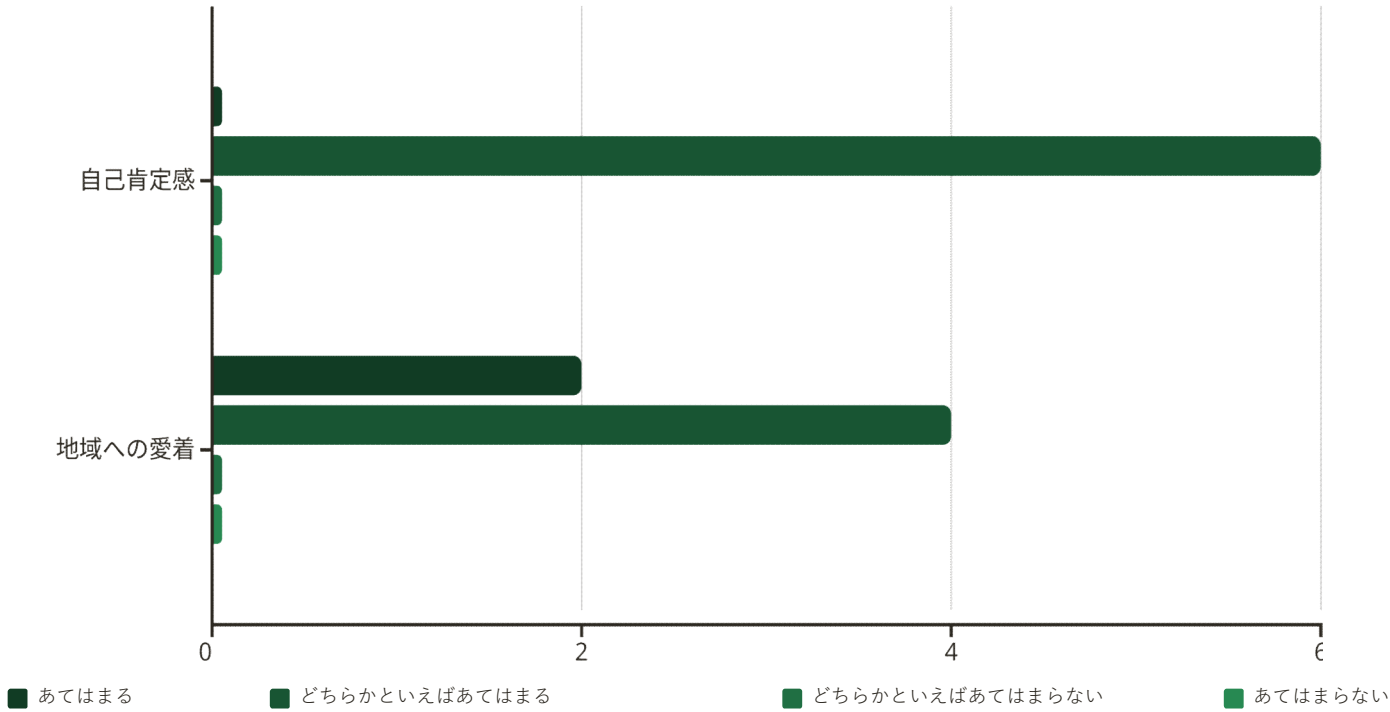
子どもたちが集まる場所での開催を目指しました。当初、商業施設での開催を目指していましたが、施設との調整が難しく、徳島県小松島市のJAが運営する「あいさい広場」のイベント同日に、「クリスマスを家族で作ろう！」として、開催しました。新鮮なお野菜の選び方などJAで購入し、その野菜を使って、クリスマスリースに盛り付けた野菜でサラダボールとオープンサンドを作りました。講師の方から、お料理のお仕事について、お話を聞きました。



第5, 6回目調査

こどもの自己肯定感と地域への愛着

アンケート調査では、こどもたちの自己肯定感と将来の居住意向について質問しました。以下のグラフは回答結果をまとめたものです。



調査結果から、ほとんどのこどもたちが自己肯定感を持ち、同様に将来も現在の地域に住みたいと考えている、という前向きな傾向が見られます。

こどもが求める居場所の特徴

居たい 14項目 38件

ありのままでいられる・くつろげる場所・居ただけ居れるなど居場所に対して安心感を求める回答が多くみられました。

行きたい 8項目 20件

自分と同じような境遇の子たちが集う場所がいいとの回答が多く、行くきっかけを求めている回答もありました。

やってみたい 9項目 26件

学習や体験機会があること・自分の役割があることを期待する回答が多く見受けられています。



30

居場所での影響

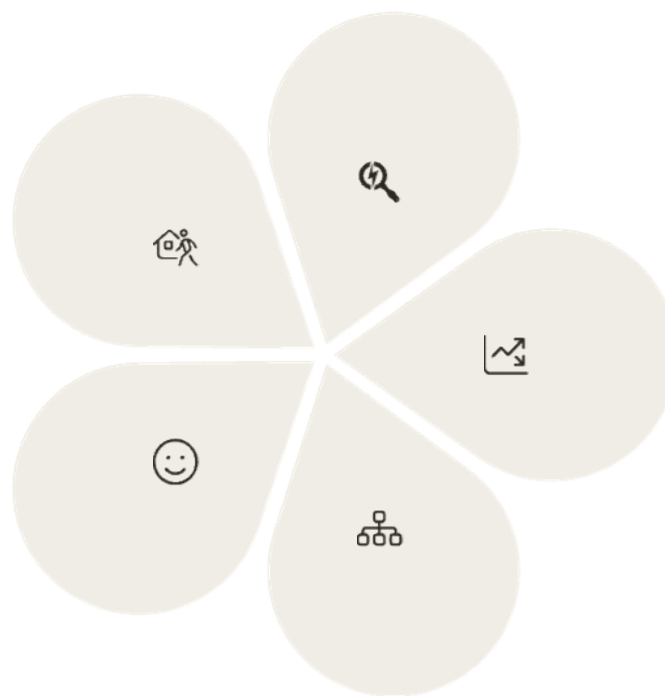
設問に対して回答が無回答のみで集計できませんでした。

安心感
心理的安全性

楽しいと感じる時間や気持ちが落ち込みにくくなった・自分の気持ちを伝えてもいいと思える・自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった等

変化なし・その他

居場所に通い始めて変化がないという回答もあった



交流の広がり

社会性

それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った・以前より人と関わるのが好きになった・以前より誰か困っている人がいる時サポートするようになった

自己成長

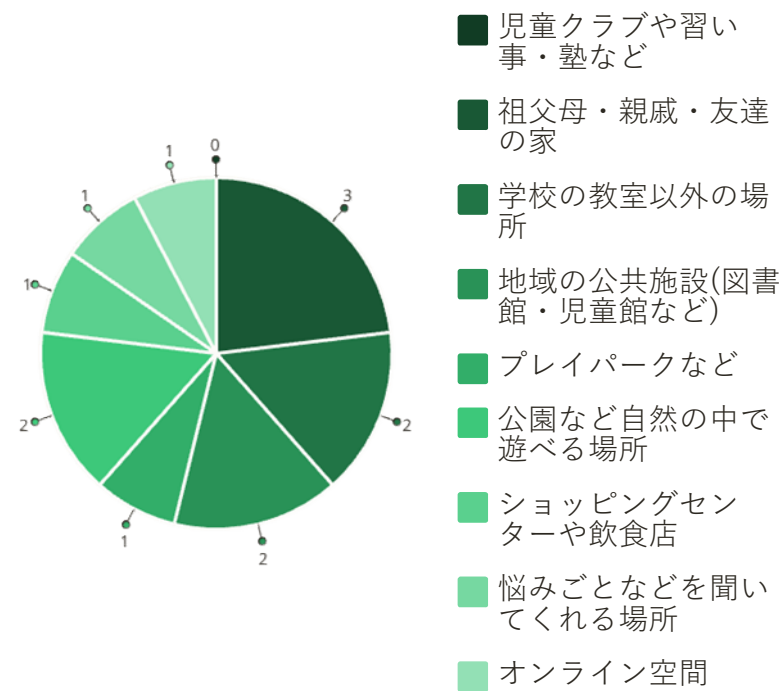
以前より自分がやろうと決めたことをできるようになった

学びに対する姿勢

初めて知ったことや、興味をもったこと好きになったことなどがあった

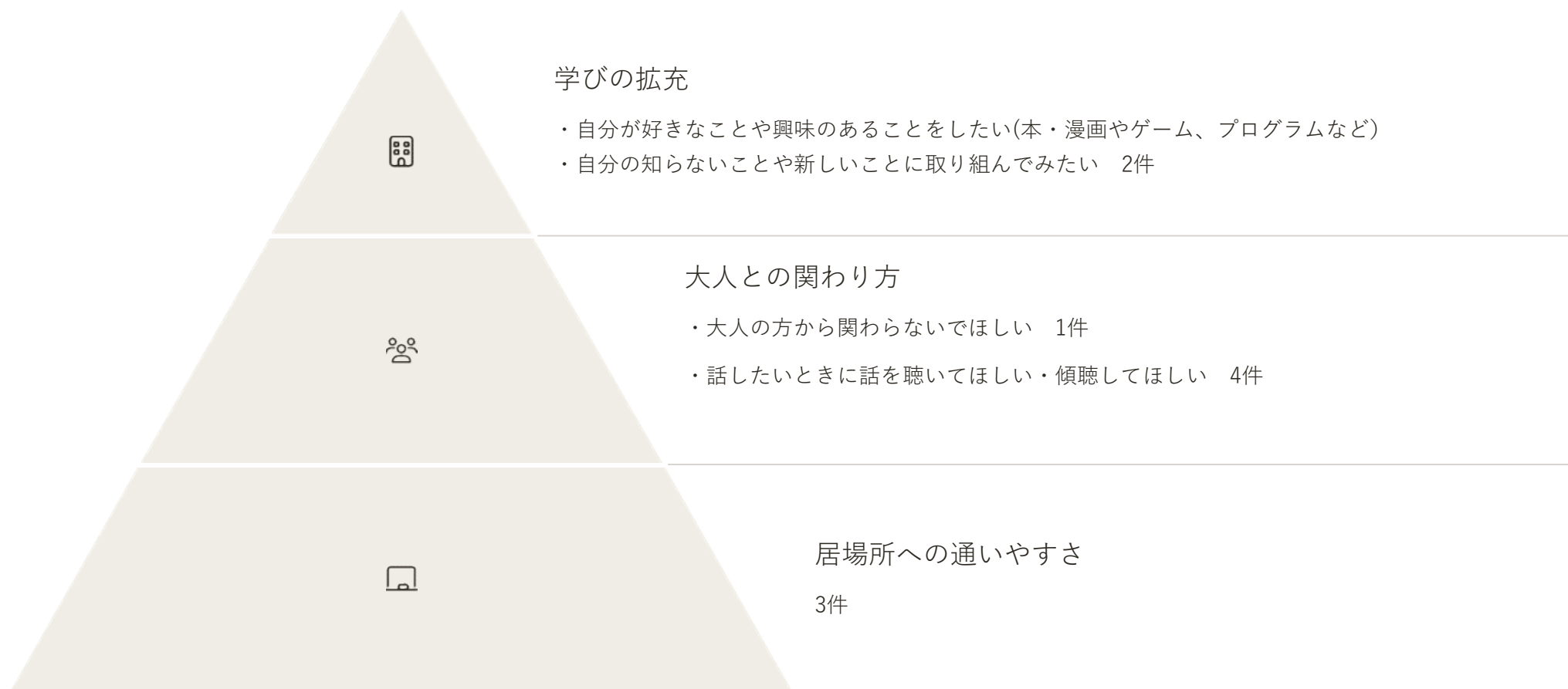
居場所の種類

居場所があるとの回答は3件・未回答が3件でした。



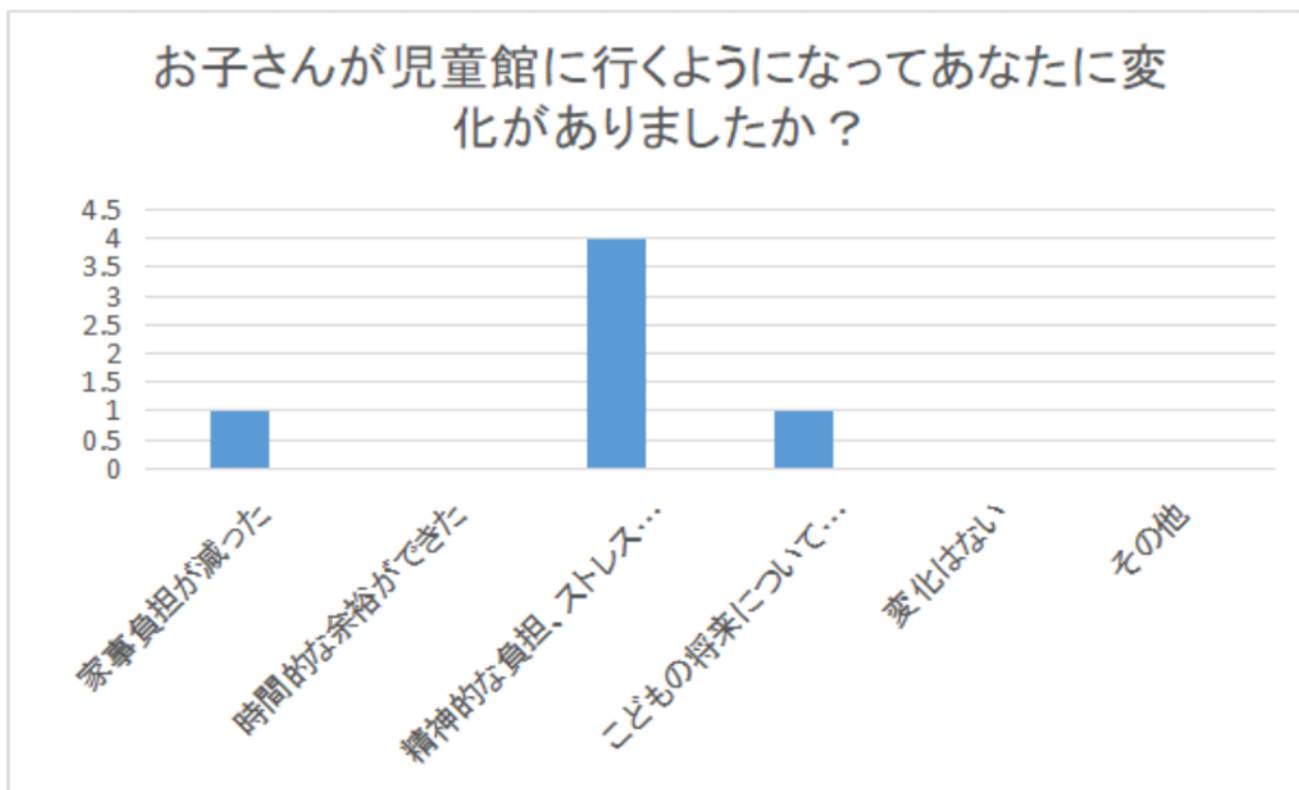
児童クラブや習い事・塾が居場所だと感じる回答・公園などの場所を居場所だと感じる回答が多くみられました。

居場所に望むこと



学びの提供を多く求める回答や・大人との関わり方に多く要望がありました。

第5,6回 保護者対象アンケート調査結果



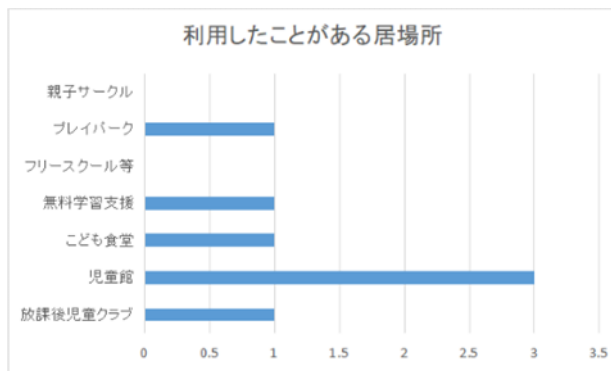
精神的な負担やストレスが低減されたという回答が多くみられました。

児童館に行くようになってからの変化

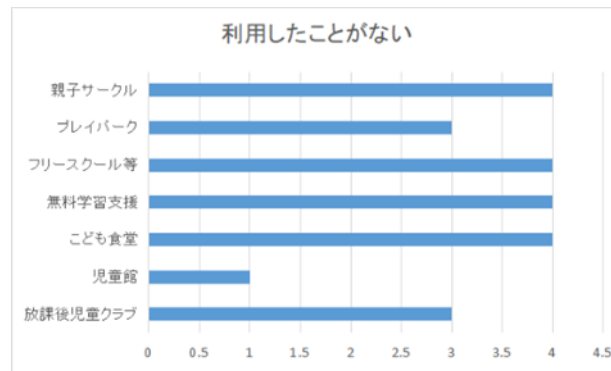


初めて知ったことや、興味をもったこと好きになったことなどがあった の回答が一番多くみられた

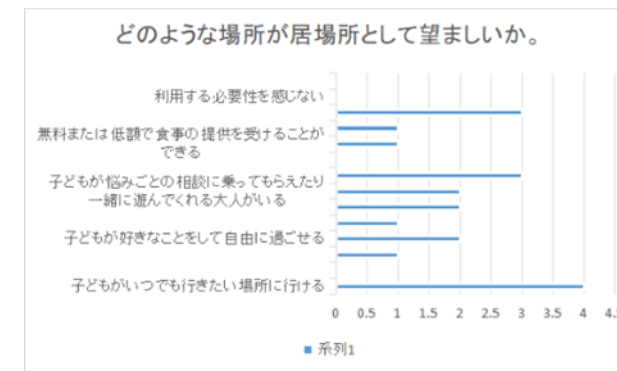
保護者としては、居場所に対して新しい知見が広がることを期待している声が上がっている。



児童館が多く、その理由として



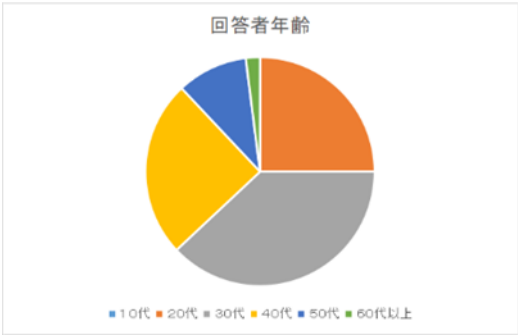
ほとんどの居場所が正しく認知されていない。（時間や経済面で見合わない等感じている）



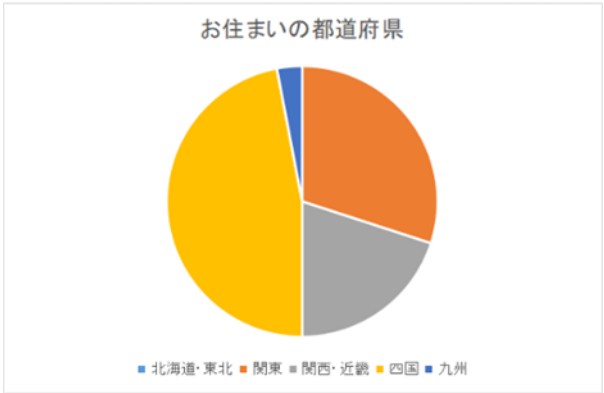
子どもがいつでも行けるなど自由度が高い場所が求められている

Webアンケート集計結果

アンケート回答数 108

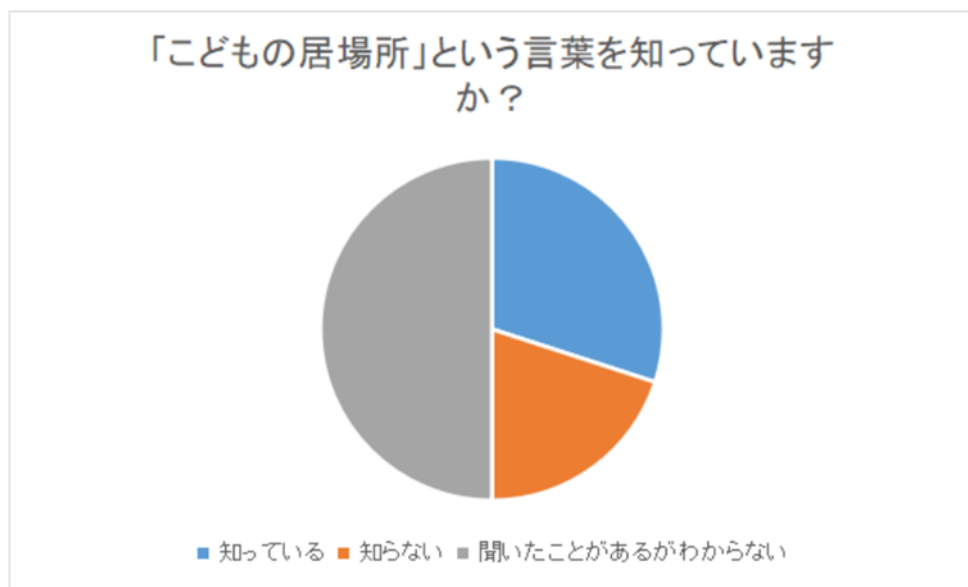


- 1. 30代
38%
- 2. 40代
25%
- 3. 20代
25%



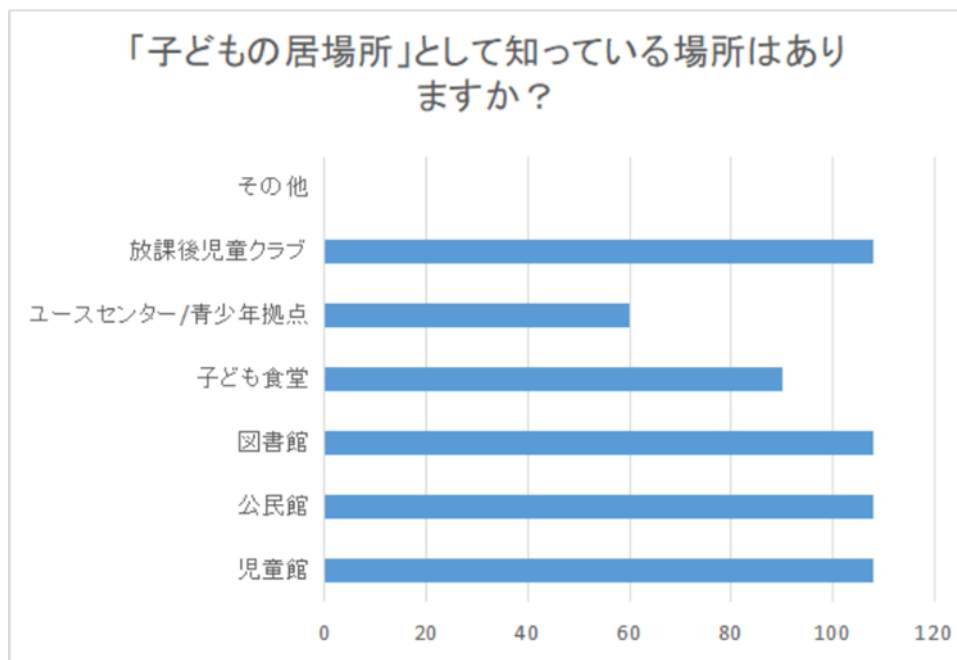
- 1. 四国
47%
- 2. 関東
30%
- 3. 関西・近畿
20%

「こどもの居場所」という言葉を知っていますか？



1. わからない 50%
2. 知っている 30%
3. 知らない 20%

言葉は知っているが分からない・言葉自体初めて聞く方が多くみられます。



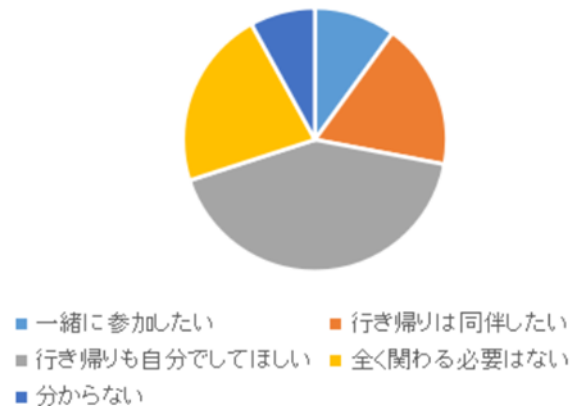
「子どもの居場所」として知っている場所がありますか？（複数回答）

公共性の高い場所については認知度が高い傾向があり、子ども食堂やユースセンターについてはまだ認知度が低い傾向にある。

5. どのような場所が理想的なこどもの居場所だと考えますか？
 例) 身近にある、お弁当が食べられる、安心できる、
 交友関係が充実する、24時間365日利用が可能 など

こどもだけで行ける	悩みを聞いてくれる	友達がつくりやすい場所
お弁当が食べられる	色々な学年の交流がある	レゴや学びができる場所
こどもだけでお金を出したらご飯が出てくる	子どもたちが行きたがる場所	スポーツができる場所
子どもを預かってもらえる	子どもがのびのびできる場所	家庭の代わりになるような場所
習い事ができる	休日、親子で行ける場所	
両親ともに働いているので預かりがある	くつろげる場所	
こども向けのイベントをやってくれる	休日仕事なので、休日預けられる場所	
宿題を見てくれる	夜遅くまで見てくれる場所	

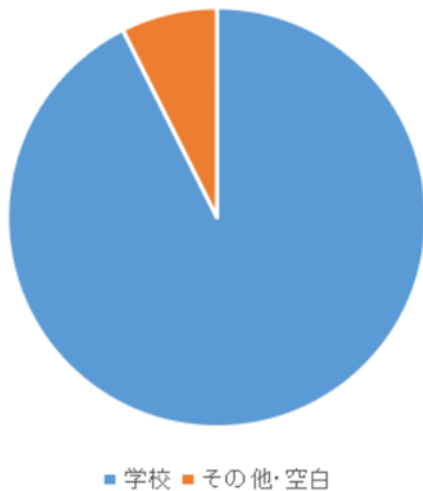
「子どもの居場所」ですが、保護者の方の参加
はどのように考えますか？



子どもの居場所に関する 保護者の見解

1. 行き帰りも自分でしてほしい 42%
2. 全く関わる必要はない 22%
3. 行き帰りは同伴したい 18%

どのような機関とこどもの居場所が連携してほしいですか？
例) 保育園、学校、図書館 など



こどもの居場所の社会的連携

1. 学校 92%
2. その他・空白 8%

自由回答であったが学校機関と答える回答が大多数を占めていた。

把握した課題に係る分析・考察等（検討の経過等含む）

県支給アンケート結果より、子どもの調査からの考察としては、
まずは、何よりも子どもたちが「こどもの居場所」に望んでいるのは、自分たちが安心して自由に過ごせる場所であります。
大人の関与は、あまり好まないまでも、相談したいときには、側にいて欲しいという希望です。
また、次に、好ましい場所としては、「友だち」がキーワードであり、「友達がいる、友達と一緒に」と、気が許せて、気が合う友と同じ時間を過ごせるということが理想的な場所であるようです。
また、「居心地のよさ」においては、「興味のあることができる」ということで、娯楽からはじまり、ゲームや知育ゲームなど自分の知らないことや新らしいことにも取り組める場所を望んでいます。
また、「こどもの居場所」としての認知には、児童館などの公的な場所を示しており、通いやすさを含めた親しみがあるようです。以上の内容を受けて、新しい場所づくりよりも、今ある学童や児童館などの公的な施設が、学校の延長の場所としての安心感があり、そこで、子どもたちがより安心でくつろげ、体験の機会を得ることができることを必至であると考えます。

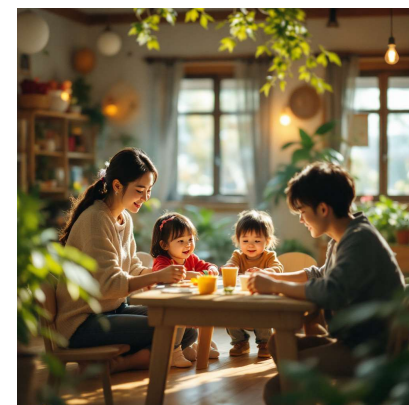


把握した課題に係る分析・考察等（検討の経過等含む）

また、保護者のアンケートからは、「こどもの居場所」の認知は、低く、あえていうならば、子どもと同様に「学童保育や児童館」があげられています。

そして、それらに通うことで「時間的な余裕ができ、精神的な負担やストレスが減った」と自覚してします。その上で、子どもたちが「初めて知ったことや、興味をもったこと好きになったことなどがあつた」と感じており、

子どもたちには、居場所で多くの体験の機会を望んでいることが見受けられます。また、「お金をかけたくない」「時間が不定期での申込みではなく、いつでも行ける場所がよい」という意見も現場でのヒアリングで受けており、その上で保護者が考える「こどの居場所」への希望は、子どもたちが、安心安全で、ひとりで通える地域にある場所であり、新しい学びや体験の機会がある、できるだけ料金のかからない場所であることが考察することができます。この希望をまとめると、今後の学童・児童館の内容の充実は、忙しい子育て世代の保護者にとって、重要な場所であることが捉えられます。



把握した課題に係る分析・考察等（検討の経過等含む）

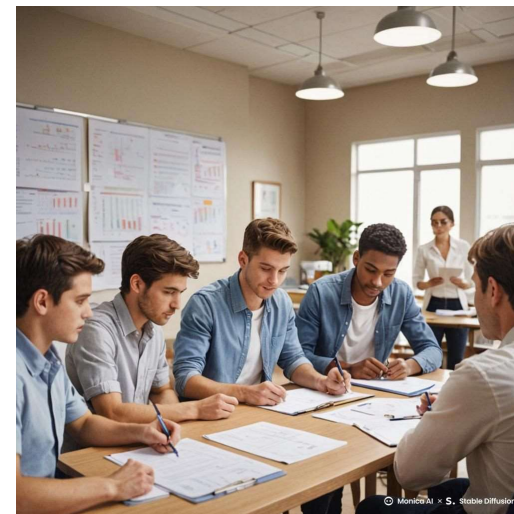
今回、独自調査したWEBアンケートにおいて「こどもの居場所のあり方」について、「こどもの居場所」ということばの認知は、30%であり、知っている場所を質問したところ

「児童館」をはじめ公共施設が圧倒的に多く、保護者の参加に関しては、子どもだけで完結する施設であることを希望しており、

できれば、行き帰りも子どもたちで通所できることを望んでいます。

また、居場所と連携する場所として、学校との連携を92%の方が望んでいます。

以上のアンケート結果より、保護者は、「こどもの居場所」として、公共施設を望んでいる傾向にあり、今後の課題として、公共が民間化がされる一方、多くの保護者は、「こどもの居場所」は、公共の施設で、子どもたちをより安心して保育していきたいとの希望があり、公共の「こどもの居場所」の充実をはかっていくことが必至と考察します。



徳島県こども未来部 青少年・こども家庭課 御中

令和 6 年度 事業実施報告書

事業名:きずなの町並みハブプロジェクト

実施団体:一般社団法人 心繋プロジェクト 代表者:丸岡 大輔

① 居場所の実施内容及び実績、運営上の工夫及び課題 実施内容・実績

1. 居場所の開放

- ・ 開放日:週 2 回(火曜・水曜)
 - ・ 開放時間
 - 15:00～18:00(小学生～高校生)
 - 10:00～17:00(夏季・冬季休暇期間限定)
 - ・ 活動内容:学習支援、アート活動、ボードゲーム会、自然活動会
- (詳細データは別紙添付)

2. 心繋プロジェクト(自立支援プログラム)

- ・ 実施頻度:月 1 回(第三または第四日曜日)
- ・ 実施内容
 - 8/24・25「脇町遊戯小路・脇町ゲームストリート」(参加者 84 名)
 - 8/31「アート制作ワークショップ」(天候不良により中止)
 - 9/21－22「キズナキャンプ」(天候不良により中止)

- 10/20「けん玉ワークショップ」(参加者 22 名)
- 11/17「お米の物語とおむすびの会」(参加者 11 名)
- 12/22「ちょっぴり早いクリスマス会」(参加者 9 名)
- 1/26「ピタゴラスイッチをさわろう」(参加者 15 名)
- 2/24「パステルに魅せられる世界」(参加者 16 名)

3. きずなの町並みハブ開設

- ・ トイレ改修済
- ・ 2 階の宿泊スペース改修済
- ・ 居場所開放スペースの適宜利用開始
- ・ 別紙参照

4. 広報活動

- ・ 心繋プロジェクトのインスタ投稿開始し、ホームページも連動して積極的に公開を始めてます。

ホームページ Kizunastreet.com

インスタアカウント [Kizunaproject2024](https://www.instagram.com/Kizunaproject2024)

7. 運営上の工夫

- ・ 地域住民や専門家との協力体制
- ・ 看護師、保育士が定期的に相談会を開催 ・ 地域住民が講師を務めるアクティビティを実施
- ・ 子ども主体のプログラム

- ・ 参加者が自由に計画・実行できる形式を採用
- ・ 子どもたちの意見を取り入れ、プログラムの改良を実施

課題

- ・ 周知の難しさ:新規参加者の増加に向け、SNS や広報活動の強化が必要
- ・ 資金面での継続性:助成金依存からの脱却と持続可能な資金調達が課題
- ・ スタッフの確保:ボランティアや運営スタッフの確保・育成が求められる
- ・ 参加者への関わりの継続:継続的な参加を促すため、個々の子どもたちに合わせた関わり方を模索する必要がある

信頼関係の構築を深めるため、関係者と子ども・保護者との対話の機会を増やす
支援が必要な子どもたちへの個別対応をより充実させる体制の整備が求められる。

8.支援ニーズ調査の集計結果

調査概要・調査方法:アンケート調査(訪問・オンライン)

- ・ 回答者: ○ 子ども(小学生～高校生):45 名
- ・ 保護者・地域住民:15 名、 関係機関(学校、福祉関係者):5 名

主な結果

①子どもたちの声

- ・ 「学校以外で安心して過ごせる場所が増えて嬉しい」(85%)
- ・ 「もっと色々な活動に参加したい」(70%)
- ・ 「困ったときに相談できる大人がいると安心」(90%)

②保護者・地域住民の声

- ・「地域ぐるみで子どもたちを支える仕組みが必要」(80%)
- ・「親同士が交流できる場もあればいい」(60%)
- ・「居場所の情報をもっと分かりやすく発信してほしい」(75%)

③関係機関の意見

- ・「学校では対応しきれない子どもたちの居場所として重要」(100%)
- ・「支援の継続と拡充が望まれる」(100%)

課題分析と改善策

今後の改善策

- ・ 広報活動の強化.
- ・ 資金調達の多様化
- ・ スタッフ体制の充実
- ・ 参加者への関わりの深化

まとめ

本年度の活動は一定の成果を上げましたが、今後も継続的な改善を進め、持続可能な運営を目指します。以上

令和6年度徳島県「こどもの居場所づくり」支援体制強化事業 （「こどもの居場所」支援ニーズ調査事業）実施業務実施状況				
委託事業者名		一般社団法人心繋プロジェクト（居場所開放）		
居場所の開設場所		美馬市脇町大字脇町123 ウダツインキュベーションセンター		
開催月	延べ開催回	延べ参加人数	開催概要	備考
7月	2	2	7/24居場所開放 参加者なし。 7/31居場所開放 小学生1名、保育園児1名参加。コーヒー淹れ方教室実施。	
8月	2	3	8/22居場所開放 参加者なし 8/28居場所開放 小学生3人、保育園児1人トランプやボードゲームを楽しみ、宿題を取り組みました。	
9月	3	7	9/18居場所開放 教育旅行生と小学生1名、保育園児1名との交流会 9/25居場所開放 参加者なし 9/28居場所開放 小学生4人、保育園児1人、ボードゲーム会を実施しました。	
10月	7	27	10/6居場所開放 小学生3名 トランプやボードゲームを楽しみ、宿題を取り組みました。 10/9居場所開放 小学生4名、保育園児1人、コーヒー淹れ方教室実施。 10/13居場所開放 小学生2名 トランプやボードゲームを楽しみ、宿題を取り組みました。 10/16居場所開放 小学生4名、保育園児1人、街遊び探検実施しました。 10/19居場所開放 小学生4名、保育園児1人 トランプやボードゲームを楽しみ、宿題を取り組みました。 10/25居場所開放 小学生4名、保育園児1人 トランプやボードゲームを楽しみ、宿題を取り組みました。 10/30 アーティスト イエロー氏と交流会 小学生2名、保育園児1名	
11月	4	7	11/7居場所開放参加者なし 11/1居場所開放4参加者なし 11/2居場所開放小学生2名、宿題サポート 11/28居場所開放小学生5名、ボードゲーム会	
12月	3	6	12/4居場所開放 小学生2名 トランプやボードゲームを楽しみ、宿題を取り組みました。 12/13居場所開放 参加者なし 12/19小学生4名 トランプやボードゲームを楽しみ、宿題を取り組みました。	
1月	19	70	1月より子ども達より要望で常時開放 居場所では宿題サポート、トランプやボードゲームを楽しみました。 紙御さんとも連絡を取り合うことを始めてます。	
2月	13	37	居場所では宿題サポート、トランプやボードゲームを楽しみました。 紙御さんの悩み相談開始。	
3月	12	26	居場所では宿題サポート、トランプやボードゲームを楽しみました。	3/24現
合計	65	185		

こども居場所開放日（活動様子）

週2回（火、水）長期連休は（10時～17時）

小学生が幼児をリードしてます



軽食希望時は事前に相談してます



近所の高齢者とも交流します



保護者参加型も認めてます



地域の方と過ごすこともあります



自己学習も自主的にしてます



自立支援プログラム

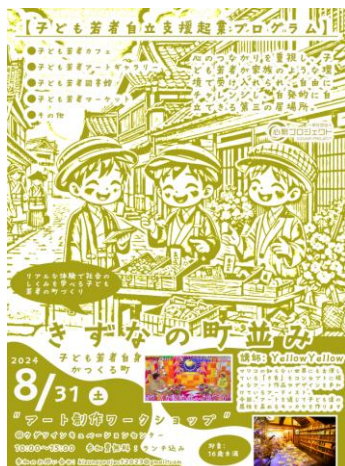
7月分 開催場所 ウダツインキュベーションセンター

8/24.25 連日開催



8月分 開催場所 ウダツインキュベーションセンター

台風にて中止



9月分 開催場所 ラビングカフェ

天候不順で中止



10 月分開催場所 ウダツインキュベーションセンター

こども食堂実施



11 月分開催場所 ウダツインキュベーションセンター

こども食堂実施



12 月分開催場所 ウダツインキュベーションセンター

こども食堂実施



1月分開催場所 きずなの町並みハブ

こども食堂実施（ウダツインキューベーションセンター）



2月分開催場所 ウダツインキュベーションセンター



こどもの居場所アンケート集計結果

1. 回答者の基本情報

- 合計回答者数:45 名
- 性別:
 - 男子:30 名
 - 女子:15 名
- 年齢構成:
 - 0～12 歳:15 名
 - 13～15 歳:20 名
 - 16～18 歳:10 名

2. 居場所に関する意識調査

問 1:あなたは将来も今もこの地域に住んでいたいと思いますか

- 住んでいたい:15 名(33%)
- どちらかといえば住んでいたい:10 名(22%)
- どちらかといえば移りたい:7 名(16%)
- 移りたい:5 名(11%)
- 移る予定があるが将来的に戻ってきたい:3 名(7%)
- わからない:5 名(11%)

3. きずなの町並みハブについて

問 1:あなたにとってきずなの町並みハブはどのような場所ですか

- 安心できる場所:25 名
- 友達と過ごせる場所:18 名
- 勉強や新しいことを学べる場所:12 名
- 相談できる場所:10 名
- その他(自由記述):5 名(「ご飯が食べられる」「大人と話せる」など)

問 2:きずなの町並みハブに行くようになって、変わったことがありますか

(複数回答可)

- ・ 楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ち込みにくくなった:20 名
- ・ 自分の気持ちを伝えてもいいと思うようになった:15 名
- ・ 新しいことを知ったり、興味を持ったことが増えた:12 名
- ・ 自分を大切にしてくれる人がいると感じるようになった:10 名
- ・ それまで知らなかった人と話す機会が増えた:8 名
- ・ 人と関わるのが好きになった:7 名
- ・ 誰かをサポートすることが増えた:5 名
- ・ 自分の決めたことをやり遂げられるようになった:6 名
- ・ 変わったことはない:4 名

問 3:きずなの町並みハブでやってみたいこと、改善点(複数回答可)

- ・ 自分の好きなことをしたい(ゲーム、読書など):20 名
- ・ 新しいことに挑戦したい:15 名
- ・ 大人に自分たちの話を聞いてほしい:10 名
- ・ 困ったときに味方になってほしい:8 名
- ・ 大人にあまり干渉されず過ごしたい:5 名
- ・ 通いやすくしてほしい(無料、長時間開放):12 名
- ・ 特にない:5 名

4. 居場所の有無

問 4:家や学校以外に「ここに居たい」と感じる場所がありますか

- ・ ある:30 名(67%)
- ・ ない:15 名(33%)

問 5:その場所の種類(複数回答可)

- ・ 友達や親戚の家:12 名
- ・ 児童クラブや習い事の場所:10 名
- ・ 学校の保健室や図書館:8 名
- ・ 公園や自然の中:7 名
- ・ ショッピングセンターなど:6 名
- ・ 図書館や公民館:5 名
- ・ 地域の遊び場:5 名
- ・ 無料の勉強や食事支援の場所:6 名
- ・ 相談・サポートの場所:4 名

- ・ オンライン空間(SNS やゲームなど):3 名

問 6:「ここに居たい」と思う場所がない理由(複数回答可)

- ・ 特に居場所がないと感じる:8 名
- ・ 行く場所がない／遠い:4 名
- ・ 家や学校で十分:3 名

問 7:同様の場所があれば行きたいか

- ・ はい:10 名(67%)
- ・ いいえ:5 名(33%)

5. 調査結果の考察

- ・ **きずなの町並みハブの認知度と評価:**
 - 多くの子どもが「安心できる場所」と認識しており、ポジティブな影響を受けている。
 - しかし「居場所がない」と感じる子も一定数おり、より多様なニーズに応じた支援が求められる。
- ・ **居場所に求めるもの:**
 - ゲームや読書など、自由な活動ができる場が求められている。
 - 大人の関わり方については「もっと話を聞いてほしい」と「構わないでほしい」の両方の意見があり、バランスが重要。
 - 経済的負担やアクセスのしやすさも考慮すべきポイント。
- ・ **今後の課題と改善点:**
 - **周知の強化:**もっと多くの子どもに情報を届ける必要がある。
 - **多様な活動の提供:**自由に過ごせる空間と、新しいことに挑戦できる機会のバランス。
 - **アクセス改善:**通いやすい時間設定や支援体制の充実。

今後は、アンケート結果をもとにより良い居場所づくりを目指していく。

保護者アンケート集計結果

【調査概要】

- ・ 調査対象:きずなの町並みハブを利用する児童の保護者
- ・ 回答者数:20 名
- ・ 調査方法:アンケート(訪問・オンライン)
- ・ 調査期間:令和 6 年度

【アンケート結果】

問 1 お子さんがきずなの町並みハブに行くようになってあなたに変化がありますか？

- ・ 家事負担が減った:5 名(25%)
- ・ 時間的余裕ができた:8 名(40%)
- ・ 精神的負担、ストレスが減った:10 名(50%)
- ・ こどもの将来についての不安が減った:6 名(30%)
- ・ 変化がない:3 名(15%)
- ・ その他(自由記述):
 - 「親としての悩みを共有できる場があると感じた」
 - 「地域のつながりが強くなった」

問 2 お子さんがきずなの町並みハブに行くようになって、お子さんの様子で変化を感じたことがありますか？(複数選択可)

- ・ 楽しいと感じる時間が増えた、気持ちが落ちこみにくくなった:12 名(60%)
- ・ 自分の気持ち(したいことや嫌なこと)を伝えていいと思うようになった:9 名(45%)
- ・ 初めて知ったことや、興味をもったこと、好きになったことがあった:11 名(55%)
- ・ 自分のことを大切にしてくれる人やサポートしてくれる人がいると感じるようになった:10 名(50%)
- ・ それまで知らなかった人、話したことがなかった人と会った:7 名(35%)
- ・ 以前より、人と関わるのが好きになった:8 名(40%)
- ・ 以前より誰か困っている人がいる時、サポートするようになった:6 名(30%)
- ・ 以前より、自分がやろうと決めたことをできるようになった:9 名(45%)
- ・ 変化ない:4 名(20%)

- その他(自由記述):
 - 「家で会話が増えた」
 - 「以前より笑顔が増えた」

問3 あなたがきずなの町並みハブに望むことはありますか？(複数選択可)

- こどもが好きなことや、興味があることが取り組めるようにしてほしい: 13 名 (65%)
- こどもが知らないこと、新しいことに取り組めるようにしてほしい: 10 名 (50%)
- あまり大人が構わないでほしい: 4 名 (20%)
- 地域の大人と関わる機会を増やしてほしい: 8 名 (40%)
- こどもに勉強を教えてほしい: 7 名 (35%)
- 保護者の相談にのってほしい: 6 名 (30%)
- 利用しやすくなってほしい: 9 名 (45%)
- 特になし: 3 名 (15%)
- その他(自由記述):
 - 「親同士が交流できる場も増やしてほしい」
 - 「休日も開放してほしい」

問4 あなたのご家庭では以下の「こどもの居場所」を利用したことがありますか？

- 利用したことがある: 15 名 (75%)
 - 理由(複数選択可):
 - 保護者の仕事が遅くなると心配だから: 7 名 (35%)
 - 遅くまで関わる機関で体験させたい: 5 名 (25%)
 - 無料低額あるいは学費援助があるから: 4 名 (20%)
 - 家事負担の軽減のため: 6 名 (30%)
 - その他(自由記述):
 - 「こどもの居場所を増やしたいと考えていた」
 - 「友達と過ごせる環境がほしかった」
- 利用したことがない: 5 名 (25%)
 - 理由(複数選択可):
 - どこにいけばいいかわからない: 2 名 (10%)
 - 必要性がない: 1 名 (5%)
 - 参加すると貧困と思われたり、いじめられるかもしれないから: 1 名 (5%)
 - 知らない人と関わりたくない: 2 名 (10%)

- どんないことを提供されるのか心配だから: 2 名 (10%)
- 利用に際して都合が合わない: 2 名 (10%)
- 利用場所が近くにないから: 1 名 (5%)
- 利用費用の負担があるから: 1 名 (5%)
- その他 (自由記述):
 - 「時間が合わない」
 - 「もう少し近くにあれば利用したい」

問 5 あなたは、どのような場所であればお子さんに「こどもの居場所」を利用させたいと思いますか？ (複数選択可)

- こどもがいつでも行きたいときにいける: 14 名 (70%)
- こどもが一人で過ごせたり、何もせずのんびりできる: 9 名 (45%)
- こどもがありのままでいられる、否定されない: 12 名 (60%)
- こどもが好きなことをして自由に過ごせる: 10 名 (50%)
- こどもが自分の意見や希望を受け入れられる: 9 名 (45%)
- こどもが悩みごとを相談できたり、やりたいことにチャレンジできる: 11 名 (55%)
- こどもが相談にのってくれたり、一緒に遊んでくれる大人がいる: 8 名 (40%)
- こどもがいろんな人と出会える、友人と一緒に遊べる: 7 名 (35%)
- こどもが勉強を教えてもらえる: 6 名 (30%)
- 無料または低額で食事提供を受けられる: 8 名 (40%)
- 保護者が相談を受けられる: 5 名 (25%)
- 費用負担がない: 9 名 (45%)
- その他 (自由記述):
 - 「夜間の居場所もほしい」
 - 「送迎があると助かる」

まとめ

保護者の多くが「こどもの居場所」の必要性を感じており、特に「気軽に行ける場所」「安心して過ごせる環境」が求められています。今後、より利用しやすい環境の整備や情報発信の強化が必要と考えられます。